日本タンゴ・アカデミー機関誌

TANGUEANDO EN JAPON

No. 36
2015

タンゲアンド・エン・ハポン

ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN

Número 36, julio de 2015

日本タンゴ・アカデミー　機関誌

タンゲアンド・エン・ハポン

第36号（2015年7月）

Sentimiento Gauchoを歌うアダ・ファルコン
映画“Ídolos de la Radio”の一場面
(YouTubeより)

日本タンゴ・アカデミー

（http://tangoacademy.jp/）

●日本タンゴ・アカデミー　機関誌
ÓRGANO OFICIAL DE LA ACADEMIA DEL TANGO DE JAPÓN

TANGUEANDO EN JAPÓN　第36号（2015年7月）

（タンゲアンド・エン・ハポン）

目　次

頁

日本タンゴ･アカデミー 2015年上期活動実績 …… 3
≪報告≫日本タンゴ・アカデミー 2015年全国会員の集い ……齋藤冨士郎 7
アカデミー行事アルバム …… 12
タンゴ・セミナーのプログラム・コメント　CLASE DE TANGO （タンゴ教室）
　第90回　1940年代のフランシスコ・カナロ楽団……コメンテーター：齋藤冨士郎 13
　第90回　タンゴ・セミナー補足資料「1940年代のフランシスコ・カナロ楽団」
……齋藤冨士郎 15
　第91回 「タンゴの歌、その魅力はどこから？」……コメンテーター：高場将美 21
「東京リンコン・デ・タンゴ」レポート ……福川靖彦・笠井正史 25
第25回「関西リンコン・デ・タンゴ」
　レポート ……山本雅生 29
　プログラム …… 31
写真で見る最近のブエノス・アイレス ……佐藤　進 34
＜愛好家インタビュー＞ ―本田健治さん― ……聞き手・宮本政樹 38
あれから50年「東京オリンピック」と「日本のタンゴ南米ツアー」……島﨑長次郎 48
アルベルト・カラシオーロ ……鈴木一哉 51
タンゴ作詞家列伝　第7回　Ｊ・デグランディス／Ｃ・ベダーニ／
Ｅ・カディーカモ……高場将美 60
現代タンゴ群像（1955～1990）　第7回　ロス・トゥバタンゴ……西村秀人 64
＜アーティストの足跡（２）＞アダ・ファルコン …… ホルヘ・パラシオ（訳：弓田綾子） 71
シリーズ・資料再見（５）私のカミニート（高橋忠雄）……編集部 74
カルロス・ガルデル　－５－ …… 大澤　寛（訳） 78
私の人生とタンゴ：断片的回想録……舳松伸男 83
映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様
～そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって～　その６・完 ……飯塚久夫 89
こんなレコード／ＣＤを聴いています（７）
私の好きなタンゴは・・・やはり、現代ものです ……山根　洋 92
全国リレー随想（16）～タンゴ・ラジオ今昔～ ……佐藤勝夫 95
ラファエル・カナロのディスコグラフィ ……作成：齋藤冨士郎 100
ラ・フアン・ダリエンソ　来日記念盤CDとコンサート・レポート ……鈴木茂次 104
東京・春・音楽祭　チコス・デ・パンパ ……脇田冨水彦 108
2015年上期首都圏タンゴ・コンサート情報 ……作成：脇田冨水彦 109
編集後記 …… 112

日本タンゴ・アカデミー　2015年上期活動実績

● タンゴ・セミナー（CLASE DE TANGO）

◎ 第90回セミナー：第90回タンゴ・セミナーは２月28日（土）10：30より15：30までメルパルク東京において開催された「2015年ＮＴＡ全国会員の集い」の第1部として10：30から12：00まで行われました。コメンテーターは齋藤冨士郎氏で、「1940年代のフランシスコ・カナロ楽団」というタイトルで、普段あまり聴かれることのない時代のF. カナロ楽団の活動を、パソコンによるパワーポイントのプレゼンテーションを使ってお話をされました。

◎ 第91回セミナー：第91回タンゴ・セミナーは東医健保会館において６月14日（日）13：30から16：30まで開催されました。今回のタイトルは「タンゴの歌、その魅力はどこから？」でコメンテーターは高場将美氏です。スペイン語の１シラブル（音節）には１つの音が当てられ、それが集まった１詩句が１フレーズのメロディになること、１詩句は必ず８シラブルの型になっていること、など大変勉強になるお話がありました。参加者は会員40名、非会員２名の計42名でした。

● 東京リンコン・デ・タンゴ

◎ １月20日（火）：2015年幕開けの第80回東京リンコン・デ・タンゴは鈴木茂次さんによる「最近のタンゴシーンによせて」、佐藤　進さんによる「ミロンガで聴いたタンゴ」、それに生演奏として若手歌手KaZZmaさんによる「タンゴの心を唄う」の3部構成のプログラムでした。鈴木さんは７曲紹介され、フィンランドのタンゴ映画「白夜のタンゴ」に話が及びました。佐藤さんは「ブエノス・アイレス紀行」という副題を添えて、ブエノス・アイレスでのミロンガ体験を踏まえたお話をされました。KaZZmaさんはギターの弾き語りでアンコールを含めて６曲が歌われました。参加者はNTA会員34名、非会員５名、ゲスト１名の合計40名でした。

◎ ３月３日（火）第81回東京リンコンはいつもの「原宿クリスティー」で開催されました。当日は桃の節句、雛祭りに当たるのでプログラムは２部構成の「雛祭り女性特集」となりました。第１部は「五人官女トーク饗宴」ということで山本嘉子さん、弓田綾子さん、町田静子さん、寺本千栄子さん、宇都宮知子さんの５人が「官女」となって各２曲ずつお話とご自身の思い入れを添えて紹介されました。第２部は「二人お姫様バンドネオン共演」ということで小川紀美代さんとお弟子さんの若林咲子さんによるバンドネオン２重奏（一部は小川さんのソロ）でアンコールも含めて７曲が演奏されました。参加者はNTA会員35名、非会員２名の合計37名でした。

◎ ５月26日（火）第82回東京リンコンのキャッチフレーズは「目に青葉、タンゴを聴いて初鰹」という大変気の利いた一句でした。プログラムは２部からなり、第１部のコメンテーターは杉山滋一さんで、「リンコン　タンゴの歴史　第１回　1920年代」というタイトルで1924年のオルケスタ・ティピカ・セレクトに始まり、1927年のフアン・マグリオ“パチョ”楽団に終わる全12曲の名曲名演を皆で堪能しました。第２部は久々の登場となるタンゴ歌手ロベルト杉浦さんがアンコールも含めて６曲歌われました。その力強い歌声に大拍手の連続でした。出席者はNTA会員34名、ビジター５名、ゲスト１名の合計40名でした。

● 関西リンコン・デ・タンゴ

第25回関西リンコン・デ・タンゴは５月24日（日）、神戸市三宮の「サロン・ド・あいり」において開催されました。プログラムは第１部の上田　登氏による「映像で見るタンゴの魅力」に始まり、続いての第２部は関西を代表する「アストロリコ四重奏団」によるライブ演奏、最後の第３部は島﨑名誉会長による音と映像を交えての「来日タンゴ楽団を回想して」という大変楽しいお話で終わりました。参加者は会員13名、その他22名の計35名でした。

その後の懇親会ではアストロリコのメンバーも交えて、約20名の参加を得て、和気藹々で懇親を深めました。その席上で島﨑名誉会長から関西リンコン・デ・タンゴの今後の運営について協力体制の確立の呼びかけがあり、全員が了解し、さし当りは現体制の運用で続ける方向で合意が得られました。

● 中部リンコン・デ・タンゴ（第16回）

第16回中部リンコン・デ・タンゴは６月28日（日）13：00より伊勢市伊勢河崎商人館「角吾座」に会場を移して開催されました。プログラムは第１部「地元会員による３曲選」（コメンテーター島田由美子さん、勝原良太さん）、第２部「ＳＰコンサート」（ゲストコメンテーター澤田寛さん）、第３部「バイオリンとピアノによる２重奏」（vn：大久保ナオミさん、pf：伊藤晶司さん）、第４部「バイオリン、バンドネオン、歌…その泣きのセンティミエント」（コメンテーター宮本政樹さん）です。詳細な報告は次号に掲載されます。

● 機関誌「タンゲアンド・エン・ハポン」35号が１月に発行されました。

● 副機関誌「タンゴランディア」30号が 4月に発行されました。

● 会員動静　会員総数184名

新入会者：勝俣秀夫（再入会）（さいたま市）、福井利恵子（東京都）平田歌代子（東京都）、
高田幹雄（大阪市）、佐々木　稔（堺市）

退会者：荒田孝宏、大岩　功、加藤光夫、佐藤之郎、平田耕治、廣嶋紀通、山下よし子

● 理事会・役員会

＊　１月14日（水）：事務局より退会者が４人と増え、現在の会員数は182名になったとの報告がありました。これを受け、如何にして会員減を食い止めるか、会員増を図るかについて討議しました。またこれに関連して財政逼迫の状況の説明もあり、新年度から予算計画に基づいた会の運営を図るべきとの意見が出され、皆の同意を得ました。ミロンガパーティーと夏の納涼リンコンの開催について会場確保の立場で方針を早く固めるべきとの意見も出されました。

＊　２月２日（月）：事務局より新入会者１名、退会者８名、現在会員数179名との報告がありました。また、会計担当からの入出金状況、機関誌編集担当からのタンゲアンド誌とタンゴランディア誌の編集進行状況、及び東京、関西、中部各リンコンの状況の報告がありました。

２月28日の「全国会員の集い」の業務・事務分担を決定しました。従来、年末時点での退会者には年明け発行のタンゲアンド誌は送っていませんでしたが、この取り扱いについて改めて議論しました。新たに４人の新役員（実行委員）を選出しました。

＊　３月９日（火）：事務局より現在会員数は新入会者を含めて181名になったとの報告がありました。入出金状況、機関誌編集状況、東京リンコンの活動状況など定例の報告に続いて、今回は先の「全国会員の集い」の結果報告と反省事項について討議しました。また、９月６日開催のオルケスタYOKOHAMAのコンサートと10月18日真鶴町にて開催予定の日本アルゼンチン協会主催のコンサートを後援することを承認しました。

＊　４月16日（木）：現在の会員数は183名になったとの報告が事務局よりありました。入出金状況に関しては今後よりきめ細かい財政運用が必要との認識を得ました。機関誌編集状況については大きな問題はありませんが、今後は頁数の上限を決めての運営が必要との認識を得ました。リンコン･デ･タンゴの計画状況の報告に続き、NTAの事業の一環としてのCDの作製･頒布の進め方について議論しました。又、いくつかの催し物への後援を承認しました。

＊　６月２日（火）：新入会者が１名あり、現在の会員数は184名になったと報告がありました。引き続き、入出金状況と機関誌編集状況の報告がありました。財政支出抑制のためにタンゲアンド誌の頁数は100頁程度に、タンゴランディア誌の頁数は44 ～ 48頁に抑えたいということで合意しました。７月の東京リンコン・デ・タンゴは恒例の納涼大会になるので、出席者の勧奨を積極的に進めることで合意しました。その他、東北リンコン・デ・タンゴ立ち上げの方策、８月２日のミロンガパーティーの進め方、島﨑名誉会長所蔵の音源によるラ・クンパルシータCDの制作計画、などを議論しました。

● 編集会議

＊　１月14日（水）:役員会に先だって同じ会場で編集会議を開き、主、副機関誌の編集状況を報告、討議しました。その後、新メンバーへの編集作業の移行について討議しました。

＊　２月２日（月）:役員会に先だって同じ会場で編集会議を開き、主、副機関誌の編集状況を報告、討議しました。タンゴランディア誌は手書き原稿が多いので、それらのPC入力作業の分担者を決定しました。

＊　６月２日（火）：役員会に先だって同じ会場で編集会議を開き、主機関誌の編集状況を報告、討議しました。それに続き、新たな執筆者の発掘策と誌面構成について討論しました。

● 役員人事

以下の新役員人事を決定しました。

吉岡達郎（四日市市）（実行委員）

＜編集部からのお知らせ＞

タンゲアンド・エン・ハポン誌34号において、今後、執筆者に別刷り20部を無償提供する方針を打ち出し、実行して参りました。しかしNTAの財政上の理由で、この方針を維持することが困難な状況になりました。また別刷りの利用状況も期待したほどではないようです。それで、些か朝令暮改ではありますが、上記方針を変更して、今後は希望者のみに別刷りを20部に限り無償提供することといたします。但し、初めての寄稿者に対しては希望の有無にかかわらず別刷りを20部無償提供することといたします。なお、タンゴ・セミナー報告、東京・関西・中部リンコンの報告、写真、コンサート評、CD評、書評については従来通り別刷り無償提供の対象外といたします。

＊＊

＜訂正＞

タンゲアンド・エン・ハポン誌35号7頁の囲みの中で「第81回タンゴ・セミナー」とあるのは「第90回タンゴ・セミナー」の間違いです。訂正いたします。

＜予告：CD「ラ・クンパルシータ全集（仮称）」の制作が進んでいます＞

現在、日本タンゴ・アカデミーでは記念事業として「ラ・クンパルシータ」生誕100年を記念した全50曲からなる２枚組CDの制作を進めています。収録内容はアルゼンチン編ではロベルト・フィルポ楽団の「ラ・クンパルシータ」初録音（1916年）に始まり、アロンソ・ミノット楽団による1917年録音、フランシスコ･カナロ楽団（1927年)、カジェタノ･プグリシ楽団（1929年)、オルケスタ･ロス･プロビンシアノス（1931年)、ロベルト･フィルポ四重奏団（1938年)、オスバルド･フレセド楽団（1943年)、ニコラース･ダレサンドロ六重奏団（1953年)、カルロス･ディ・サルリ楽団（1955年）など第１期、第２期黄金時代の名演が豊富に取り揃えられ、欧米編ではエバ・ボール楽団、サビエル・クガート楽団、ビアンコ・バチーチャ楽団、オスカル・ロマ楽団など貴重な音源が並び、日本編では巴里ムーラン・ルージュ楽員による録音、奥田良三や江戸川蘭子の歌など大変珍しい音源が含まれており、全体として大変密度の濃い内容になっています。なお、著作権などの関係もあって収録曲の詳細は目下調整中ですが、８月中には最終決定の見込みです。リリースは2016年７月を予定しています。詳細な内容や価格などについては本誌37号において紹介いたします。皆様、ご期待ください。

《報告》

日本タンゴ・アカデミー　２０１５年全国会員の集い

齋藤　冨士郎

「NTA2015年全国会員の集い」は会場を2013年の会場であった「メルパルク東京」に再び移して、２月28日に開催された。例年通り第１部（10：30－12：00）がタンゴ・セミナー、第２部（12：00－15：30）が懇親パーティーである。

第１部の第90回タンゴ・セミナーについては本号所載の報告を参照していただくことにして、ここでは第２部の懇親パーティーの報告から始める。

懇親パーティーは飯塚久夫NTA会長の挨拶に始まり、杉山理事による会計報告と事業計画報告、齋藤冨士郎と大澤　寛両編集長による機関誌の方針説明が続き、その後、島﨑長次郎名誉会長の発声で乾杯となった。更に、新しく入会された方々と遠方からお越しの方々の紹介があった。

今回のアトラクションは小松真知子＆タンゴクリスタルである。前半はダンス抜きで専ら演奏に耳を傾け、休憩を挟んでの後半は生演奏をバックにダンスを楽しむ構成であった。筆者は飲みながら、食べながら、話しながら演奏を聴いていたので、演奏曲目のすべてを覚えきれてはいないが、「ア・メディア・ルス」、「エル・チョクロ」、「ケハス・デ・バンドネオン」、「カフェ・ドミンゲス」など著名曲ばかりで、いずれも中々の力演であった。更に、感心したのは小松　勝氏の編曲で、どの曲についてもプグリエーセ風でもピアソラ風でもない独自の編曲で、それでいて決して難しくない編曲であった。楽団のリーダーは小松真知子氏であるかもしれないが、編曲者としてそれを下から支える小松勝氏の寄与は中々のものであると思った。

料理も美味しかったが、それ以上に、NTA会員の元気ぶりを象徴してか、分量は十分計算済みであったのにも拘らず料理の無くなるのは大変早かったのには驚いた。これは昨年もそうであったと記憶している。一方、飲み放題の酒の方は結構余っていたようだ。出席者の平均年齢を考慮すればまずは妥当な結果である。

会は齋藤副会長の閉会の辞と大澤理事の手締めで、再会を祈念してお開きとなった。懇親パーティーへの出席者は78名（会員73名、ビジター〈サポート要員を含む〉５名）であった。

なお、2016年の会場も「メルパルク東京」に決まり、開催日は３月６日である。通常、会場の予約は３か月前しか出来ないのだが、今回は弓田理事の大変な努力によって１年前の予約が実現したことを強調しておきたい。

最後に一つ、私見であるが気になったことを付け加えたい。それは出席者全員が結構「よそ行き」に近い服装であったことである（筆者もスーツにネクタイであったが、それは筆者がセミナーのコメンテーターであったからである）。それで悪いことはないが、「アカデミー」といっても結局はタンゴ愛好者のあつまりであるから、もっと気楽な普段の服装でよいのではないかと思った（「私はこれが普段の服装だ」という人もいるかもしれないが）。かつて全国会員の集いが八丁堀の労働会館で開かれていた当時は皆、普段の服装であったように記憶している。何でもないことのようだが、こういう変化は何となく気になる。企業においても、上下を問わず皆が互いに「さん付け」で呼んでいたのが、いつの間にか「・・課長」、「・・部長」と肩書き付けで呼ぶようになるのは大企業病の始まりである。NTAもそうなってはならない。「全国会員の集い」は普段の服装での出席にしようではないか。

日本タンゴ・アカデミー　平成２６年度収支報告書　単位：円

（2014年 1月 1日～2014年12月31日）

＊収入の部

前期繰越金	2,809,819	（内 前受会費169名 ¥2,376,000）
会費、入会金	247,000	2014年会費、中途入会など 1月 1日以降入金分
特別会費	249,000	懇親会参加費
〃	325,000	ミロンガ参加費
〃	18,000	セミナー・ビジター参加費
〃	125,900	リンコン、機関誌販売収入など
当期収入合計	964,900	
前受年会費	2,217,000	次年度（2015）入会金・会費 158名分
＊収入の部合計	5,991,719	

＊支出の部

事業費	1,528,827	懇親会、セミナー、リンコン、ミロンガ,HPWeb費用など
機関誌発行費	1,989,207	４回発行、印刷、発送、編集企画会議費用など
会議費	92,600	理事会開催会場費など
事務局運営費	138,790	会員名簿、会員証、広報案内文書、コピー・発送費など
当期支出合計	3,749,424	
＊支出の部合計	3,749,424	

＊次期繰越金　2,242,295

平成27年(2015) 1月20日

監査の結果、適正かつ正確であることを認めます。

監事　脇田　冨水彦

監事　山本　幸洋

日本タンゴ・アカデミー　平成２７年度予算書

（単位：円）

（2015年 1月１日～2015年12月31日）

＊収入の部

前期繰越金	2,242,295	（内、平成27年分 前受年会費 2,217,000 158名）
会費、入会金	318,000	2015年会費，入会金，1月 1日以降入金分
特別会費	355,000	懇親会、ｾﾐﾅｰ、ﾘﾝｺﾝ、ﾋﾞｼﾞﾀｰ会費など
当期収入合計	673,000	
＊収入の部合計	2,915,295	

＊支出の部

事業費	1,100,000	懇親会、ｾﾐﾅｰ、ﾘﾝｺﾝ、HPWeb 費用など
機関誌発行費	1,600,000	４回発行、印刷、発送、編集会議費用など
会議費	90,000	理事会開催会場費など
事務局運営費	90,000	会員名簿、案内文書作成、ハガキ封筒など
当期支出合計	2,880,000	
＊支出の部合計	2,880,000	

＊次期繰越金　35,295

飯塚会長の挨拶

杉山理事による会計報告

島﨑名誉会長の音頭で乾杯

齋藤、大澤両編集長による機関誌編集方針の説明

新入会員の紹介：左から阿部和子さん、和田ひろみさん、平田歌代子さん

遠路からご出席の方々の紹介：左より、石島　識さん（函館市）、岩垂　司さん（札幌市）、佐々木秋雄さん（いわき市）
舳松伸男さん（堺市）、勝原良太さん（四日市市）、西村秀人さん（名古屋市）、吉岡達郎さん（四日市市）

演奏する小松真知子&タンゴクリスタル

歓談する人々

（写真撮影：吉澤義郎、編集部）

アカデミー行事アルバム

― 東京リンコン・デ・タンゴ（2015年1月20日）―

歌うKaZZmaさん

歓談する人々

― 東京リンコン・デ・タンゴ（2015年3月3日）―

受け付け作業は中々大変です

小川紀美代さんのバンドネオン・ソロに
聴き入る人々

― 東京リンコン・デ・タンゴ（2015年5月26日）―

会場正面の立て看板

客席を回りながら歌うロベルト杉浦さん

タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第90回タンゴ・セミナー　　2015年2月28日

1940年代のフランシスコ・カナロ楽団

（1938年～ 1948年）

コメンテイター：齋藤 冨士郎氏

― プロローグ：日本中のタンゴファンが名演の宝庫と崇める1927年録音から ―

1．Un Poquito ほんの少し（M.A. Vivoli）　G.1927（CD-1191）

― オルケスタ編 ―

☆　Inst.録音は少ない、1942 ～ 1944年、1948年はInst.録音はゼロ

2．Reliquias Porteñas –milonga– ブエノス・アイレスの聖遺物（G. De Leone）　G. 1938（DIEGON 89141）

3．El Tigre –tango sinfónico– 虎（F. Canaro）　G. 1941（CTA-774）

4．La Rompedora –milonga– ラ・ロンペドーラ（P. Castellanos）　G. 1941（TOCP 7564）

― 歌曲編 ―

☆　日本人にとっては馴染みの薄いアモール、アドリアーン、ロルダーン

5．En Esta Tarde Gris この灰色の午後に（M.Mores – J. M. Contursi）canta: Francisco Amor　G. 1941（DBN=EMI 8590812）

6．Gricel グリセル（M. Mores – J. M. Contursi）canta: E. Adrián　G.1942（DBN=EMI 8590182）

7．Torrente 激流（H. Manzi – H. Gutiérrez）canta: C. Roldán　G.1944（DBN=EMI 7243 499973 2 5）

8．Adiós Pampa Míaさらば草原よ（F.Canaro – M. Mores）canta: A. Arenas　G.1945 EOS-40016

― キンテート編 ―

☆　1943年まではL.Riccardiもピアニストを務めた？

9．Reina de Saba シバの女王（R. Mendizábal）　G.1941（CD-1174）

10. Milonga con Variaciones 変奏付きミロンガ（F. Canaro）　G.1942（CD-1174）

11. La Rosarina ラ・ロサリーナ（R.González）　G.1943（CD-1174）

12. Don Juan ドン・フアン（E. Ponzio）P: MARIANO MORES　Bn: MINOTTO　G.1947（CTA-6005）

― エピローグ：ペースを取り戻した1950年代 ―

13. Retintín レティンティン（E. Arolas）　G.1949（TOCP 7564）

14. El Gavilán エル・ガビラン（F. Canaro）―キンテート「ピリンチョ」―　G.1955（OW 1043）

15. Sentimiento Gaucho ガウチョの嘆き（F. y R. Canaro）　G.1961（日本録音）（TOCP 7568）

左から、マリアノ・モレスとその愛娘、フランシスコ・カナロ、
エルネスト・ディ・チコ。1947年のカーニバルのバイレにて

パワーポイント・スライドを使って
説明する齋藤冨士郎氏

会場風景

（写真撮影：吉澤義郎）

第90回タンゴ・セミナー補足資料

1940年代のフランシスコ・カナロ楽団

―不人気、実は「聴かず嫌い」―

齋藤　冨士郎

☆ はしがき

F. カナロ楽団の1927年のDNO録音と言えば我が国のタンゴファンの殆どが随喜の涙を流す名演の宝庫である。それに引き替え同じF. カナロ楽団の1940年代の録音は、わが国では余り人気が無く、レコードコンサートでもほとんど取り上げられない。F. カナロ楽団のLP/CD復刻を殆ど網羅的に進めて来られたある著名コレクターの方も1941年録音の復刻を終えた時点で「これに続くカナロ - ロルダーンの時代はカナロ最悪の時期」（ご本人は記憶されていないだろうが）と言って、復刻を打ち切ってしまわれた。ポルテニア音楽同好会のA. M. P. 復刻シリーズでもF. カナロ楽団の復刻は1936年までである。その他では蟹江丈夫氏監修によるF. カナロ10枚組の復刻LP“LA VIDA DEL CANARO”（EOS-40011～EOS-40020）と８枚組の復刻CD「フランシスコ・カナロ大全集」（TOCP 7561～TOCP 7568）にはそれぞれ1940年代をカバーするものが１枚ずつあるだけで、オムニバス物は別にしてそれ以外のまとまった復刻例はないようである。一方、アルゼンチンでは1940年代のF. カナロ楽団はEMI=DBNのReliquiasシリーズでインストルメンタル演奏と歌曲を合わせてCD復刻が数点あり、最近になってもDIEGONレーベルからもこの時代の復刻が数点出されているから、特に不人気というわけでもなさそうである。

楽しみで聴くだけであれば、好きな時代の好きな演奏だけを聴いていればよい。しかし、あるアーティストについてその全体像を云々しようとするならば、好きな時代の好きな演奏だけを聴いているだけでは不十分で、好き嫌いを離れて全生涯の楽歴に耳を傾けなければならない。それでいささか天邪鬼ではあるが、ここでは敢えてF. カナロの1940年代の（といっても取り上げた時代範囲は1938年からモレス退団の1948年に至る10年間であるが）録音について考察してみた。

☆ F. カナロ楽団の1940年代の録音歴

図１はレフコビッチのディスコグラフィに基づいて作成したF. カナロ楽団の1938年～ 1948年の録音歴、図２はその録音歴の中の歌曲についての歌手別統計データである。

図１から直ちに見て取れることは全体的に録音数がほぼ直線的に減少しており、特にオルケスタ演奏によるインストルメンタル録音数が1938年以降激減しており、1942 ～ 1944年はゼロである。表１はこの期間のオルケスタ演奏で取り上げられた曲目の一覧であるが、これを見ると我々に良く知られた曲目が非常に少ない（1938年はそうでもないが）。キンテート・ピリンチョの録音もオルケスタ程ではないが漸減しており、1944 ～ 1946年はゼロである。歌曲の録音数はオルケスタやキンテートの録音数をかなり上回っているが、それでも1938年から1948年に向かって略々単調に減少している。これには第２次世界大戦による欧州からのレコード盤原料の輸入途絶の影響も考えられるが、確証はない。

図２は図１の歌曲の部分についての歌手別の統計データである。これによると1938年はロベルト・

マイダ（Roberto Maida）が中心歌手であり、1939年から1941年まではエルネスト・ファマー（Ernesto Famá）とフランシスコ・アモール（Francisco Amor）が中心歌手であったと言える。しかし両者とも1942年以降は名前が出て来ず、代わってエドゥアルド・アドリアーン（Eduardo Adrián）、カルロス・ロルダーン（Carlos Roldán）、エンリケ・ルセロ（Enrique Lucero）、ギジェルモ・コラール（Guillermo Coral）といった、我々に余り馴染のない歌手たちが入れ代わり立ち代わり登場するようになる。1945年以降は我国にもよく知られたアルベルト・アレナス（Alberto Arenas）が中心歌手の地位を占めるようになる。

西暦年	インストルメンタル録音曲名	作者
1947	El Norteño	F.Canaro -M.Mores
1946	Reliquias Porteñas -pot pourri-	
	La Puñalada	P.Castellanos
	La Tablada	F.Canaro -M.Mores
1945	La Metralla	M.Campoamor
1941	Tiempo Perdido	N.Musseti
	Lamentos del Bandoneón	D.J.Crespini
	La Bandera de mi Patria -marcha-	F.Canaro
	El Tigre	F.Canaro
	Apasionadamente	F.Canaro-I.Pelay
	Echale Sal	A.Villoldo
	La Rompedra -milonga-	P.Castellanos
1940	Pimienta	O.Fresedo
	Tango Milonguero	F.Scorticati
	La Milonga Retobada -milonga-	Pancho Arañas
	A Mano Limpia	P.Castellanos
	Milonga Clásica -milonga-	L.Riccardi
	Sentimiento Gaucho	F.Canaro
	Doña Mercedes -polca-	M.García
	Bandoneón de mis Amores	F.Scorticati
	Desde el Alma	R.Melo
1939	Quiero Verte Una Vez Más	M.Canaro
	Atardecer	L. y G.Teisseire
	Olimpia	C.Bolifa
	El Rey del Bosque	F.Canaro
	La Polca del Casamiento -polca-	F.Canaro
1938	La Melodía de Nuestro Adiós	F.Di Cicco
	Lorenzo	A.Bardi
	Retintín	E.Arolas
	Pampa	F.Pracánico
	Corazón de Oro -vals-	F.Canaro
	España Cañi -paso doble-	P.Marquina
	La Milonga de mis Tiempos	L.Riccardi
	Fiebre	H.Canaro
	Por tu querer	F.Gorrindo-R.Girard
	Mate Amargo	P.Aragón
	Pura Parada	J.F.Noli
	Milongón	F.Canaro-H.Manzi
	La Maleva	A.Buglione
	Pecado Mortal	Ada Falcón
	Reliquias Porteñas	G.De Leone
	La Canción del Gitano -paso doble-	J.F.García
	Ciertos Amores	R.Canaro
	Mi Buenos Aires	F.Rofrani
	La Puestera	H.Canaro

表１

☆ 1940年代のＦ．カナロ楽団の演奏スタイル

F. カナロ楽団のオルケスタ・ティピカ編成を基本としたわかり易い演奏スタイルは彼の生涯を通して変わっていない。そうは言っても長い年月の間には演奏スタイルもいろいろと変化している。我が国の多くのタンゴファンの支持を集めている1927年のDNO録音ではやや遅めのテンポで中音域を中心にどっしりと落ち着いたスタイルで演奏を進めており、これが「わかり易い」と言われる所以であろう。これを「カナロ節」と表現することもできる。それが1929～1930年頃からハワイアンギターのような外来楽器や管楽器も演奏に加わるようになり、同時に編曲も次第に華やかになる傾向を示す。更に歌が入るようになる。1938年頃、F. カナロは二人歌手制を採用し、それまでのエストリビジョ・スタイルを排して、歌手に歌詞全体を歌わせることで歌手を演奏にもっと深く参画させようアイデアを持っていたという（参考資料［１］）。また1940年代の演奏では管楽器（トランペット？）が積極的に使用され、更に（マリアーノ・モレス（Mariano Mores）がピアニストであったことの反映として）ピアノの派手なプレイが聴かれるようになる。そのこととインストルメンタル録音が非常に少ないことがこの時代のF. カナロ楽団の演奏が我が国であまり好まれなくしている理由かもしれない。興味あることに、1950年代の演奏ではオルケスタ・ティピカ編成による本来の「カナロ節」に回帰したように聴こえる。

☆ 1940年代のF．カナロ楽団の歌手たち

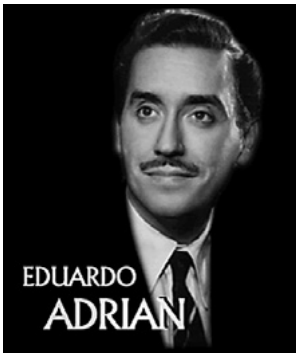
1940年代前半のF．カナロ楽団の中心歌手はR．マイダ、E．ファマー、F．アモールであり、後半

はA. アレナス、E. アドリアーン、C. ロルダーン、G. コラール、E. ルセロが中心で、これらの中でR. マイダ、E. ファマー、A. アレナスの３人は我が国でも著名であるし、G. コラールは改名後のギジェルモ・リコ（Guillermo Rico）で知られている。しかし、F. アモール、E. アドリアーン、C. ロルダーン、E. ルセロについては我が国での知名度はそう高くはない。それでここではF. アモール、E. アドリアーン、C. ロルダーンの３人について少し調べてみた。E. ルセロについては簡単な記述しか見いだせなかったので、紹介は省いた。

フランシスコ・アモール（Francisco Amor）（1906-1976）（本名Francisco Iglesias Amor）はバイア・ブランカ生まれである。F. カナロ楽団への参加は1938年である。彼は1939年の“Cuartito azul”と1941年の“En esta tarde gris”でヒットを飛ばした。1941年にF. カナロとの契約の不調と他の新規の契約のためにF. アモール はE. ファマーと共にF. カナロ楽団を退団した。その後はソリストとしてブエノス・アイレスとウルグアイを往き来し、ラジオ等で活躍した。彼の最後の録音は1957年、モンテビデオにおいてであった。ウルグアイにおいて彼は画家としても才能を発揮し、南米諸国で個展を開いた（参考資料［１］）。

エドゥアルド・アドリアーン（Eduardo Adrián）（1923-1990）（本名Carlos Albert Eyherabide）はマル・デル・プラタに生まれ、アベジャネーダで育った。彼の母親のエンマ・ジスモンディ（Emma Gismondi）はオペラ歌手で、その才能を彼は引き継いだと言える。彼は1941年のある日、ロドルフォ・シアマレーラが審査員であったあるオーディションで、たまたま入室したM. モレスに見出され、ラジオ・ベルグラーノに連れて行かれ、そのままF. カナロ楽団に入団することとなった。当時、F. カナロ楽団にはウルグアイ人のC. ロルダーンが歌手としていた。彼はF. カナロ楽団に1943年まで在籍し、その後も録音や音楽劇などを通じてF. カナロとの関係は続いた。1969年に彼はクアルテートの伴奏で１枚のLPを録音した。彼はタンゴを歌う以外に、タンゴについて論じることもした。1962年から1968年まで、彼はウルグアイに住んだが、1968年にアルゼンチンに戻り、ユネスコの後援の下に、高校生に向けて38回の講義をした（参考資料［２］）。

カルロス・ロルダーン（Carlos Roldán）（1913-1973）（本名Carlos Belarmino Porcal）はウルグアイ生まれで、少年の頃から音楽活動をしていたが、その後ブエノス・アイレスに渡った。1940年に彼はE. ファマーとF. アモールが去った後のF. カナロ楽団に参加した。F. カナロ楽団に在籍中、彼は歌手兼俳優として多くの音楽劇に出演した。1945年に彼はF. カナロ楽団を離れ、自己の楽団を率いてモンテビデオで活躍した。但し、1947年に１回だけF. カナロ楽団と録音をしている（参考資料［３］）。



ここで改めてF. カナロ楽団におけるF. アモール、E. アドリアーン、C. ロルダーンの３人の歌を聴いてみると、それぞれ互いに微妙に異なってはいるが、一言で表現すればエストリビジョ的ではなくF. カナロが企図したような曲全体を軽く、通して歌うスタイルである。取り上げられた曲目も有名曲

というよりは当時の新曲、特にF. カナロが自ら上演した音楽劇で初演した曲が主体になっている。こういうことが結果として我が国のタンゴファンをして1940年代のF. カナロ楽団に馴染めないものにしているのかもしれない。

☆ F. カナロ楽団のピアニスト

1918年にそれまでピアニストであったホセ・マルティネス（José Martínez）が退団し、後任のピアニストとしてルイス・リッカルディ（Luis Riccardi）が参加し、1943年まで25年間在籍した（参考資料［４］）。筆者はこの期間のF. カナロ楽団の演奏スタイルの確立には彼の貢献が大きいのではないかと考えている。1939年にはM. モレスがピアニスト、作曲家、編曲家として入団し、1948年まで在籍した。オスカル・サビノ（Oscar Sabino）は1940年代初め頃からF. カナロ楽団といろいろな形で接触があったらしく、1948年のM. モレス退団後に第１奏者に昇格した（参考資料［５］［６］）。そうしてみると1940年代のF. カナロ楽団は複数のピアニストで運営していたらしい。しかしピアニストが複数在籍するということは演奏スタイルの維持の点で難しい問題があったと想像される。1940年代のF. カナロ楽団の演奏スタイルはその前後の時代と比べて何か違ったように感じられることがあるが、それはこういうことに関係しているのかも知れない。1950年代以降のF. カナロ楽団の演奏を聴くと、F. カナロの本来の演奏スタイルはL. リッカルディから、M. モレスを経由せず、直接O. サビノに引き継がれたのではないかと思われるのである。

☆ キンテート・ピリンチョ

キンテート・ピリンチョ*）の場合は少し様相が異なり、1940年代を通してそのスタイルはそれ以前のキンテート・ドン・パンチョ時代と殆ど変わっていない。だから日本のタンゴファンにとってはキンテート・ピリンチョに関する限り1940年代が特に不人気ということはない。ここで注意したいことは1944年から1946年までキンテート・ピリンチョの録音が無く、1947年に４曲、1948年に２曲録音したのみで、後は1950年まで録音していない。そして1947年～ 1948年のレコードには「Piano：Mariano Mores、Bandoneón: Minotto」と記載されていることである。わざわざそう記載したということは1943年までのキンテート・ピリンチョのピアニストはL. リッカルディであった可能性もある。

☆ F. カナロ楽団とマリアーノ・モレス：「嚢中の錐」

1938年から1948年までF. カナロ楽団の録音数がほぼ直線的に減少しているという図１のデータだけを見ると、この時期のF. カナロ楽団の活動が如何にも低調であったかのような印象を受けるが、実はそうではない。1940年から1945年までのF. カナロ楽団の録音数は減少傾向にあったとはいえ年平均50曲を越え、それは同時期のフアン・ダリエンソ楽団やアニバル・トロイロ楽団の年平均録音数20数曲をはるかに引き離している。低調どころか大活躍であったわけである。蟹江丈夫氏監修のF. カナロの年表（TANGUEANDO EN JAPÓN、No.32（2013）pp.105-109）や石川浩司氏（「タンゴの歴史」（青土社　2001、pp.121-124）によればF. カナロはこの期間、音楽劇や映画の製作に力を入れており、そうすることで新旧交代の時期でもあった「タンゴ黄金時代」を乗り切ったのである。それには何と言ってもM. モレスの貢献が大きかったに違いない。そしてF. カナロ楽団の長い歴史の中で（1910年代

*）厳密に言えば1940年から1943年まではピリンチョ・イ・ス・キンテート・ティピコ、1947年から1950年まではフランシスコ・カナロ・イ・ス・キンテート・ピリンチョが正式の呼び名であるが、ここではキンテート・ピリンチョで通す。

は別として）1920年代以降で楽団退団後にマエストロ、それも大マエストロとして、成功したのはM. モレスただ一人である。

F. カナロが常にわかり易い音楽、踊り易いタンゴを指向したのに対して、M. モレスの視線は劇場音楽的なスペクタキュラーの方向にあった点で両者の音楽は基本的に異なっている。実際、この時代のF. カナロ楽団の演奏を聴いてみると、ピアノの音など何かそれまでのL. リッカルディの時代とは違ったモレス的な印象を受ける。

「嚢中の錐」という言葉がある。これは古代中国の戦国時代の故事に由来する言葉であって、その意味するところは「優れた人物と言うものは例えば嚢の中の錐のようなもので、錐の先端がたちどころに嚢から突き出るように、どこにいても必ず目立つ存在となる」ということである。

察するにF. カナロにとってM. モレスは「嚢中の錐」ではなかったのだろうか？　つまりF. カナロが如何に自分流にはめ込もうとしても、結局はM. モレスの方でそこからはみ出てしまったのではないだろうか？　M. モレスがピアノを弾いているキンテート・ピリンチョの録音が僅か６曲、SP盤３枚に止まっていることがこのことを反映しているように見える。そしてこのことが1940年代のF. カナロ楽団の演奏スタイルを特徴付けているのであり、我が国の多くのタンゴファンから好まれていない要因ではないだろうか？　勿論、これは単なる憶測に過ぎない。

☆「聴かず嫌い」はやめよう

「食わず嫌い」という言葉があると同様に、音楽の方にも「聴かず嫌い」があるようだ。自分の「好み」に拘るあまり、それから外れたものは碌に聴きもしないで「あれは駄目だ」と決めつけてしまう態度である。短調で書かれた哀愁に満ちたタンゴが好きな日本のタンゴファンの多くにとって、歌物が中心でインストルメンタル演奏が非常に少ない、そしてどちらかと言えば明るい1940年代のF. カナロ楽団の演奏スタイルはその好みに合わないことは確かであろう。そうは言っても実際に聴かないで「あれは駄目だ」と片付けるのは「聴かず嫌い」と言わねばならない。筆者自身も実はそうであった。ところがこの一文を草するために改めて1940年代のF. カナロ楽団の演奏を聴きこんでみると、それはそれとして結構楽しめるところもあり、何も「最悪の時代」とまで決めつけることはないのではないか、と考えるに至った。そして1940年代という時代にあってはF. カナロのその演奏スタイル・演奏姿勢が当時のブエノス・アイレスの人々の支持を受けたことを我々はもっと理解すべきである。F. カナロが70～80年後の日本でどう言われるかなど考えたはずはないのである。

「聴かず嫌い」はやめて、1940年代のF. カナロ楽団にももっと耳を傾けよう。

参考資料

［１］http://en-us.todotango.com/Creadors/BiograFia.aspx?id=91
［２］http://en-us.todotango.com/Creadors/ BiograFia.aspx?id=913
［３］http://en-us.todotango.com/Creadors/ BiograFia.aspx?id=164
［４］F. Canaro “Mis Memorias”（Corregidor 1999）pp.377-378
［５］ibid pp.350-351
［６］大岩祥浩、「アルゼンチン・タンゴ　アーティストとそのレコード」（改訂版）（（株）ミュージック・マガジン 1999）pp.53-67, pp.424-425

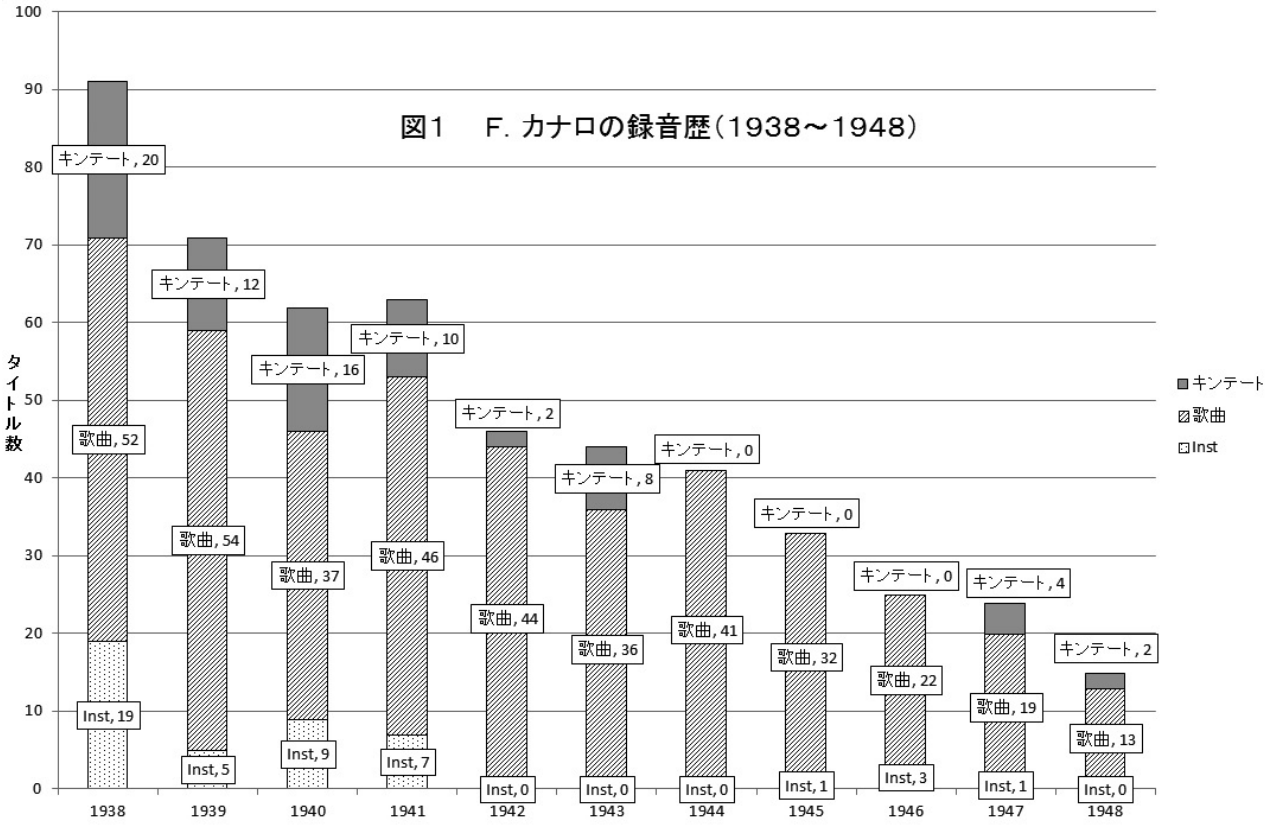


図1　F. カナロの録音歴（1938～1948）
タイトル数
キンテート
歌曲
Inst
キンテート, 20
歌曲, 52
Inst, 19
キンテート, 12
歌曲, 54
Inst, 5
キンテート, 16
歌曲, 37
Inst, 9
キンテート, 10
歌曲, 46
Inst, 7
キンテート, 2
歌曲, 44
Inst, 0
キンテート, 8
歌曲, 36
Inst, 0
キンテート, 0
歌曲, 41
Inst, 0
キンテート, 0
歌曲, 32
Inst, 1
キンテート, 0
歌曲, 22
Inst, 3
キンテート, 4
歌曲, 19
Inst, 1
キンテート, 2
歌曲, 13
Inst, 0
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948

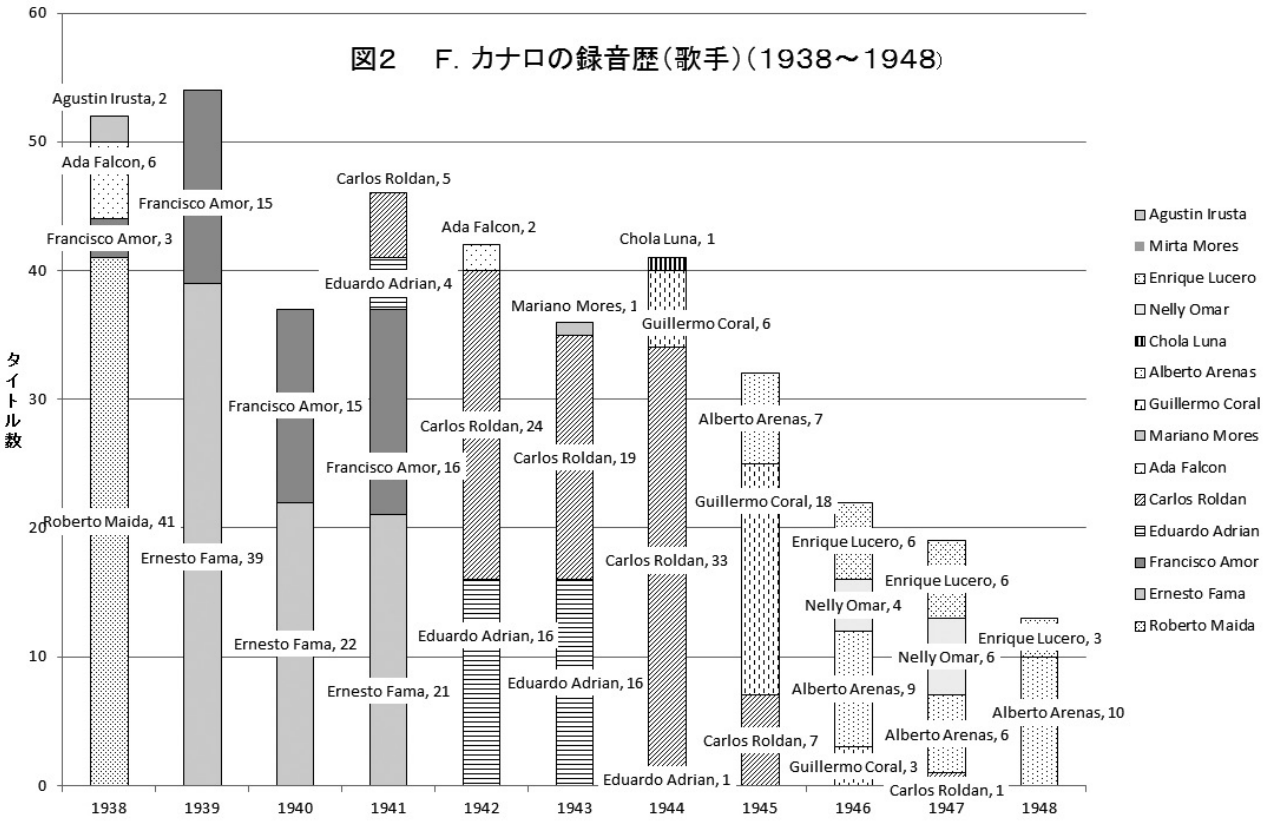


図2　F. カナロの録音歴（歌手）（1938～1948）
タイトル数
Agustin Irusta
Mirta Mores
Enrique Lucero
Nelly Omar
Chola Luna
Alberto Arenas
Guillermo Coral
Mariano Mores
Ada Falcon
Carlos Roldan
Eduardo Adrian
Francisco Amor
Ernesto Fama
Roberto Maida
Agustin Irusta, 2
Ada Falcon, 6
Francisco Amor, 3
Roberto Maida, 41
Francisco Amor, 15
Ernesto Fama, 39
Francisco Amor, 15
Ernesto Fama, 22
Carlos Roldan, 5
Eduardo Adrian, 4
Francisco Amor, 16
Ernesto Fama, 21
Ada Falcon, 2
Carlos Roldan, 24
Eduardo Adrian, 16
Mariano Mores, 1
Carlos Roldan, 19
Eduardo Adrian, 16
Chola Luna, 1
Guillermo Coral, 6
Carlos Roldan, 33
Eduardo Adrian, 1
Alberto Arenas, 7
Guillermo Coral, 18
Carlos Roldan, 7
Enrique Lucero, 6
Nelly Omar, 4
Alberto Arenas, 9
Guillermo Coral, 3
Enrique Lucero, 6
Nelly Omar, 6
Alberto Arenas, 6
Carlos Roldan, 1
Enrique Lucero, 3
Alberto Arenas, 10
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948

タンゴ・セミナーのプログラム

タンゴ教室

Clase de Tango

第91回タンゴ・セミナー　　2015年6月14日　東医健保会館

タンゴの歌、その魅力はどこから？

コメンテイター：高場 将美

詩と歌詞――歌詞はメロディとともにあるもの

歌詞 letraは、詩 poemaの１種ではありますが、純粋な詩とは違います。いわゆる詩情とか、詩的なひらめきがまったくない歌詞もありますね。でも、語り口のうまさとか、詩的ではないけれど巧みな言い回し、あるいは単にひびきのおもしろさなどで、聴く人の心をとらえます。

スペイン語では、詩も文字で読むのではなく、声に出して語るための、ひびき・音の芸術です。歌詞もそのとおりですが、歌詞は、メロディが付いて、歌うことで生命を持つ芸術です。歌詞は必ずメロディと一体となって魅力が生まれます。

ことばのリズムとメロディ

スペイン語では、ことばのひびきの要素の、実用上の最小単位はシラブルです。シラブル（音節などと訳される）は、日本語だと、かな１文字に相当します。スペイン語では、es, pan, trans 等々、日本語にはないシラブルも多くあります。また、母音（a, e, i, o, u）がふたつ以上つながった場合、詩や歌詞では、別々のシラブルにするか、まとめて１シラブルにするか、作者の好きなようにしています。（日本語では、歌詞では場合により「ん」を１シラブルに考えているようですが、スペイン語では、たとえば an で１シラブルです）。

詩も歌詞も韻文 versos でつくられています。韻文とは、簡単に言って「定型詩」で、一定のパターンで、決まったシラブル数の詩句 verso（文字に書くと１行になる単位）が並び、要所要所で脚韻 rima を踏むスタイルです。脚韻とは、詩句の最後の母音の組み合わせを同じにすることです（子音は関係ありません）。

１シラブルにはひとつの音が当てられ、それが集まった１詩句が１フレーズのメロディになります。

つまり歌詞とメロディは完全に一致しているのです。字あまり･字足らずは絶対に許されません。このような規則は、学校で習ったものではなく、自然に作者の体に入っているものです。聴くほうは、もちろん規則なんか気にしてなく、やはり自然に、その形に乗せられて魅力を感じているわけです。

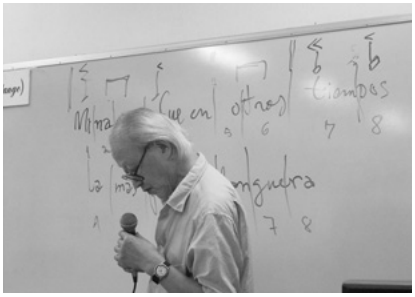
歌詞のことばのもっているリズムが、音楽のリズムに乗り、歌詞の抑揚がメロディにピッタリ合っていることが、タンゴの歌の魅力の原点です。具体的な意味は分からなくても、スペイン語のひびきの音楽を感じ取ることで、その歌が語っているものが感じられます。

実例をひとつだけ、分析してみましょう。これは最初に音楽がつくられ、それに合わせて作詞されたので、歌詞のリズムもメロディも音楽と完全に合っています。

歌詞は、スペイン語の詩の伝統でもっとも古くから広く愛されてきた、１詩句が８シラブルの型です（詩句の最後にアクセントが来ると、そこは２シラブルに数えます）。ここでは、２行目と３行目、６行目と７行目、そして４行目と８行目が脚韻を踏んでいます。シラブルの区切りに／を入れておきました。

Mi/na/ que/fue en/o/tros/ tiem/pos/
la/ más/ pa/pa/ mi/lon/gue/ra/
y en/e/sas/ no/ches/ tan/gue/ras/
fue/ la/ rei/na/ del/ fes/tín/...
Hoy/ no/ tie/ne/ pa/ po/ner/se/
ni/ za/pa/tos/ ni/ ves/ti/dos/,
an/da en/fer/ma/, y el/ a/mi/go/
no ha a/por/tao/ pa/ra el/ bu/lín.

１詩句は常に８シラブルの型になることを、左の実例で説明するコメンテイターの高場氏



１．あわれな女　Pobre Paica（1915年前後に作詞、録音は1920年）
カルロス・ガルデール Carlos Gardel　ギター：ホセー・リカルド José Ricardo

フワン･カルロス･コビアーン Juan Carlos Cobián作曲の『エル･モティーボ（動機）El motivo』に、パスクワール・コントゥルシ Pascual Contursiが歌詞をつけたもの。作曲者が、歌詞を付けてもいいけれど、題名は変えないでほしいと言ったので、後年は『エル・モティーボ』の題になった。

スペインの劇場音楽に影響されたタンゴの歌

タンゴの最初の歌曲は、スペインの劇場音楽（歌劇から庶民的な音楽コメディまで）に大きな影響を受けていました。

２．ボヘミアンの心　Alma de bohemio
（作曲：ロベルト・フィルポ Roberto Firpo　作詞：フワン・カルーソ Juan A. Caruso）
プラシド・ドミンゴ　Plácido Domingo

エル・ポルテニート　El porteñito　（作詞作曲：アンヘル・ビジョルド Ángel Villoldo）
アルフレード・ゴビ Alfredo Gobbi

３．ラ・モローチャ　La morocha
（作曲：エンリーケ・サボリード Enrique Saborido　作詞：アンヘル・ビジョルド Ángel Villoldo）
リベルター・ラマルケ Libertad Lamarque

４．ブエノスアイレス　Buenos Aires
（作曲：マヌエル・ホベース Manuel Jovés　作詞：マヌエル・ロメーロ Manuel Romero）

ロベルト・フローリオ Roberto Florio　カルロス・ディサルリ Carlos Di Sarli楽団

真のタンゴの歌の誕生

1910年代の後半に、ブエノスアイレスとモンテビデオの社会の下層階級の人びと（大多数がそうでした）のことばづかいを生き生きと表現する、真に「タンゴの歌」と呼べるものが誕生し、確立しました。

ことばづかい・語り口は、都会のことばそのものですが、詩形は、大草原の吟遊詩人の物語り歌のスタイルを継承しています。都会といっても大草原の一部だったんですね。

これを正しく表現する歌いかたの発明者がカルロス・ガルデールです。彼自身が社会の底辺をさすらってきた人でしたので、歌詞に深く共感し、一体化した歌いかたを、1920年代に完成させました。

５．わが悲しみの夜　Mi noche triste
（作曲：サムエール・カストリオータ Samuel Castriota　作詞：パスクワール・コントゥルシ）

６．マノ・ア・マノ（五分と五分）　Mano a mano
（詩：セレドーニオ・フローレス Celedonio E. Flores
作曲：Ｃ・ガルデール／ホセー・リカルド José Ricardo）
カルロス・ガルデール

街と人びとの歌

1920年代から、街の風物や特徴ある住民をテーマにした、単なる失恋男の嘆きだけではないタンゴもたくさんつくられました。あまりにもいい歌詞が多くて選ぶのに困るので、わたしの好きな中からランダムにご紹介します。

７．たそがれのオルガニート　Organito de la tarde
（作曲：カトゥロ・カスティージョ Cátulo Castillo
作詞：ホセー・ゴンサーレス・カスティージョ José González Castillo）

８．タラーン・タラーン Talán... talán...
（作曲：エンリーケ・デルフィーノ Enrique Delfino
作詞：アルベルト・バカレーサ Alberto Vacarezza）
カルロス・ガルデール

９．パトテーロ・センティメンタール Patotero sentimental
（作曲：マヌエル・ホベース Manuel Jovés　作詞：マヌエル・ロメーロ Manuel Romero）
イグナーシオ・コルシーニ Ignacio Corsini　ロベルト・フィルポ Roberto Firpo楽団

10．メンタ・イ・セドローン Menta y cedrón
（作詞：アルマンド・タジーニ Armando Tagini　作曲：オスカル・アローナ Oscar Arona）
アンヘル・バルガス Ángel Vargas　アンヘル・ダゴスティーノ Ángel D'Agostino楽団

女性歌手たちの歌づくり

タンゴは完全に男性優位の音楽でした。女性の気持ちを歌っていても男性の作詞家がつくっていました（世界のほかのジャンルでも、そうだったようです）。そんな中で、女性歌手が、自分が歌うためにつくったすばらしい歌詞も、少ないけれどあります。代表的な２曲をお聴きください。

11．でもわたしは知っている　Pero yo sé
（作詞作曲：アスセーナ・マイサーニ Azucena Maizani）
アスセーナ・マイサーニ

12. カンタンド（歌いながら）Cantando
（作詞作曲：メルセーデス・シモーネ Mercedes Simone）
メルセーデス・シモーネ

1930年代の話題

この年代は、タンゴにはマイナスの話題が多いのですが、いい話題は、痛烈な社会批判・絶望的な感情表現で共感を呼んだ作詞作曲家ディシェーポロの登場です（20年代の末からですが）。そして、新形式といってよいミロンガが誕生して、タンゴ全体を元気にしました。

13. ケバチャチェー　Qué vachaché
（作詞作曲：エンリーケ・サントス・ディシェーポロ Enrique Santos Discépolo）
ティタ・メレーロ Tita Merello

14. 1900年のミロンガ　Milonga del 900
（作曲：セバスティアーン・ピアーナ Sebastián Piana　作詞：オメーロ・マンシ Homero Manzi）
カルロス・ガルデール

15. ブエノスアイレスの影法師　Silueta porteña
（作曲：フワン＆ニコラース・クカロ Juan y Nicolás Cuccaro
作詞：オルランド・ダニエーロ Orlando Daniello ／エルネスト・ノリ Ernesto Nolli）
ワルテル・カブラール Walter Cabral　フワン・ダリエンソ Juan D'Arienzo楽団

1940年代のふたりの詩人

後に「黄金時代」と呼ばれるほどの、オルケスタ・ティピカとダンスの全盛期です。歌の面では、本物の詩人であるふたりのオメーロが、タンゴ文化をすばらしく豊かなものにしました。

16. スール（南）　Sur
（作詞：オメーロ・マンシ　作曲：アニーバル・トロイロ Aníbal Troilo）
エドムンド・リベーロ Edmundo Rivero

17. マキジャーヘ（メーキャップ）　Maquillaje
（作詞：オメーロ・エスポーシト Homero Expósito
作曲：ビルヒーリオ・エスポーシト Virgilio Expósito）
オメーロ・エスポーシト

最後に、演奏家・作曲家も、どれほど歌詞を大事にしているかを証明するヴィデオ。そして、タンゴの歌を発明してくれたガルデールに、また歌ってもらいます（映画より）。

18. ラス・クアレンタ　Las cuarenta
（作詞：フランシスコ・ゴリンド　作曲：ロベルト・グレーラ Roberto Grela）
ロベルト・グレーラ

19. 場末のメロディ　Melodía de arrabal
（作曲：エドゥワルド・ボネーシ Eduardo Bonessi
作詞：マリオ・バティステーラ Mario Batistella）
カルロス・ガルデール

『東京リンコン・デ・タンゴ』

レポート：福川 靖彦・笠井 正史

第80回　2015年1月20日　原宿「クリスティー」

第80回の今回は、次の３部構成のプログラムでレココンと生演奏を鑑賞しました。参加者はタンゴ・アカデミー会員34名、非会員５名、ゲスト１名の総勢40名でした。

第１部「最近のタンゴシーンによせて」

コメンテーター：鈴木茂次さん

（1）“シカトリーセス”CICATRICES
演奏：ワルテル・チーノ・ラボルデとディエゴ・クイッコ

（2）“サトゥマ”（おとぎの国～理想郷）SATUMAA
歌：レイヨ・タイパレ

（3）“パラ・ウント・モノネン，タンゴ・デ・ノルテ・ア・スール”
（ウント・モノネンに捧ぐ、北から南へのタンゴ）　演奏：ラス・チカス・デル・タンゴ
語り：オラシオ・フェレール

（4）“オホス・ネグロス”（黒い瞳）OJOS NEGROS　演奏：セステート・マジョール

（5）“ラ・ボルドーナ”LA BORDONA　演奏：フアン・ホセ・モサリーニ楽団

（6）“エステ・エス・エル・レイ”（これが王様だ）ÉSTE ES EL REY
演奏：ラ・フアン・ダリエンソ楽団

（7）“ア・トーダ・オルケスタ”（全てのオルケスタに捧ぐ）A TODA ORQUESTA
演奏：オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ

この中、３曲目の“パラ・ウント・モノネン”は映画「白夜」の中で取り上げられたフィンランドの誇る作曲家ウント・モノネンに捧げられた曲です。また７曲目の“ア・トーダ・オルケスタ”は昨年12月のオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ第53回リサイタルで演奏されたものを当日のライブ録音により司会の飯塚久夫会長の紹介つきで聴くことができました。

第２部「ミロンガで聴いたタンゴ」

コメンテーター：佐藤　進さん

昨年２回に亘って奥方ともどもブエノスアイレスを訪問された佐藤進さんご自身の旅行記を交えてのお話を披露されました。佐藤進さんはブエノスアイレス滞在中何度もミロンガを回られたようです。今回の曲目

もそうしたミロンガ体験から次のような曲目が選曲されました：

（1）“君の口は嘘をついた”TU BOCA MINTIÓ　演奏：フアン・ダリエンソ楽団（G:1951）
（2）“老いたる虎”TIGRE VIEJO　演奏：オスバルド・フレセド楽団（G:1934）
（3）“わが故郷に勝るところなし”NO HAY TIERRA COMO LA MÍA
演奏：フランシスコ・カナロ楽団（G：1939）
（4）“ミロンガの一夜”UNA NOCHE EN LA MILONGA
演奏：ロベルト・フィルポ楽団（G：1929）
（5）“ベーチョのバイオリン”EL VIOLÍN DE BECHO
演奏：マトス・ロドリゲス楽団（G：2006）
（6）“解放”EMANCIPACIÓN　演奏：コロール・タンゴ六重奏団（G：2010）
（7）“別れ”EL ADIÓS　演奏：エドガルド・ドナート楽団（G：1938）

第３部「ＫａＺＺma　タンゴの心を唄う」

第３部は若手歌手KaZZmaによるギター弾き語りの生演奏で次の５曲が披露されました：

（1）“タンゴの街”BARRIO DE TANGO
（2）“おい姐ちゃん、ちょっとお聞き”CHE PAPUSA OÍ
（3）“チクラーナのヒヤシンス”JACINTO DE CHICLANA
（4）“想いのとどく日”EL DÍA QUE ME QUIERAS
（5）“ミロンガ・センチメンタル”MILONGA SENTIMENTAL

この後、アンコールに応えてアタウワルパ・ユパンキのツクマンの月（LUNA TUCUMANA）が唄われました。

第81回　2015年3月3日　原宿「クリスティー」

第81回の今回は桃の節句雛祭りに当たり、２部構成の「雛祭り女性特集」リンコンで、参加者はタンゴ・アカデミー会員35名、非会員２名の総勢37名でした。

第１部「五人官女トーク饗宴」

コメンテーターの山本嘉子さん、弓田綾子さん、町田静子さん、寺本千栄子さん、宇都宮知子さんの５人が「官女」となって各２曲ずつお話とご自身の思い入れを添えて紹介されました。

（1）山本嘉子さん：
“冬の花“　Flores de invierno　演奏：フアン・ギド楽団（1929）
“アザミの花”El abrojito　演奏：キンテート・レアル（1959）
（2）弓田綾子さん：
“素敵なお嬢様”Elegante papirusa　演奏：ミゲル・カロー楽団（1943）

“大きな人形に” A la gran muñeca　演奏：フロリンド・サッソーネ楽団（1966）

（3）町田静子さん：

“心が泣くとき” Cuando llora el corazón　演奏：フランシスコ・カナロ楽団（1929）
歌　：チャルロ

“かつてのふたりは” Fuimos　歌　：アドリアーナ・バレラ（1991）

（4）寺本千栄子さん：

“ひとりになりたい” Quiero estar solo　演奏：オスバルド・フレセド楽団（1928）
“囚われの苦悩” Dolor de preso　演奏：ロベルト・フィルポ楽団（1931）
歌　：P. アスール

（5）宇都宮知子さん：

“過ぎし幸せ” Dicha pasada　歌　：カルロス・ガルデル（1926）
歌　：ミゲル・モンテロ（1958）
歌　：ネストル・ヘラルド（2005）

第２部「二人お姫様バンドネオン共演」

第２部は女流バンドネオン奏者の師弟共演で、小川紀美代さんとお弟子さんの若林咲子さんによるバンドネオン２重奏（一部は小川さんのソロ）で、先ず次の４曲が披露されました：

“想いの届く日”　El día que me quieras
“首の差で”　Por una cabeza
“ラ・クンパルシータ”　La cumparsita
“リベルタンゴ”　Libertango

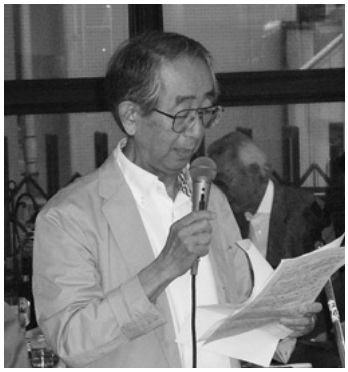
続いて「オートラ」の掛け声に応えて

“コンドルは過ぎゆく”　El cóndor pasa

を含む３曲が演奏されました。

演奏する若林咲子さん（左）と小川紀美代さん（右）

第82回　2015年5月26日　原宿「クリスティー」



2015年５月26日第82回東京リンコンがいつもの原宿クリスティーで開催されました。参加者はタンゴ・アカデミー会員33名、非会員４名、ゲスト１名の総勢38名でした。この日、退院間もない福川靖彦催事担当理事が司会進行に当たりました。

第１部 は杉山滋一理事が解説と皿回しの一人二役で「リンコン・タンゴの歴史第１回」と銘打って1920年代の出来事を繙き乍ら次の12曲を紹介しました：

（1）“MILONGUITA”	(1920) Orquesta Típica Select
（2）“TODO CORAZÓN”	(1924) Orquesta Típica Julio De Caro
（3）“CANARO EN PARÍS”	(1927) Orquesta Típica Francisco Canaro
（4）“DE MI BARRIO”	(1927) Orquesta Típica Víctor
（5）“SI SUPIERA – LA CUMPARSITA”	(1927) Carlos Gardel
（6）“PUENTE ALSINA”	(1926) Rosita Quiroga
（7）“ESTA NOCHE ME EMBORRACHO”	(1928) Azucena Maizani
（8）“COTORRITA DE LA SUERTE”	(1927) Orquesta Típica Roberto Firpo
（9）“ARRABALERO”	(1927) Orquesta Típica Osvaldo Fresedo
(10) “TE ACONSEJO QUE ME OLVIDES”	(1928) Orquesta Típica Francisco Lomuto
(11) “VENTANITA DE ARRABAL”	(1927) Orquesta Típica Francisco Canaro
(12) “EL CIRUJA”	(1927) Orquesta Típica Juan Maglio “Pacho”

流石にベテラン・タンゴファンだけあり、曲目紹介の合間に1920年代のタンゴの世界を取り巻く時代背景にも言及され、中身の濃いレココンとなりました。次回は1930年代に入る訳で、これまた格調高い解説が期待されます。

第２部 は当日のゲスト ロベルト杉浦さんで、ご持参のカラオケＣＤ伴奏により次の６曲を披露されました：

（1）“MALENA”
（2）“REMEMBRANZA”
（3）“LA ÚLTIMA CURDA”
（4）“NARANJO EN FLOR”
（5）“FUERON TRES AÑOS”
（6）“LA ÚLTIMA COPA”

ロベルト杉浦さんは東京リンコンでは久々の登場ですが、声量たっぷりに狭い会場の中、立ち位置を随時変えて参加者を飽きさせないサービス精神たっぷりの演出を心得ておられました。５曲目の後の６曲目は「オートラ」に応えての「最後の杯」でしたが、時間が許せばもう１、２曲披露されたのではないかという心残りがありました。

第25回 関西リンコン・デ・タンゴ・レポート

— 山本 雅生 —

平成27年５月24日（日）第25回「関西リンコン・デ・タンゴ」が神戸市三宮の例会場「サロン・ド・あいり」で開催されました。今回の参加者は日本タンゴ・アカデミー会員12名、非会員の方が22名、合計34名でした。

遠くは四国丸亀から最高齢の会員 冨田　稔さんが参加され、高松からも非会員の女性の参加がありました。今回のプログラムの第２部で演奏をして下さる「アストロリコ」の威力も有って、一応満席で開催をする事が出来、一安心をした次第です。

プログラムの第１部は上田　登さん担当の「映像で見るタンゴ」です。私共が古くから馴染んだ曲とか楽団が出て来るのですから、安心して楽しむ事が出来ました、画面に出て来る個々の演奏者の名前などの説明が有り、一同“納得”と云う形でプログラムは進みました。数曲はダンスが出てきたのですが、中で１曲木偶の坊の私でもこれなら踊れるのではないか？と思える場面が有りました。それはお相手の女性の代わりに箒を持ってそれは上手に（プロのダンサーなので当たり前ですが）楽しく踊っていました。フアン・ダリエンソの演奏ではすでにお馴染みになっている“指揮”が出てきて笑ってしまう場面も有りました。

この後、島﨑名誉会長に挨拶をお願いしました。

第２部はアストロリコの登場です。四重奏団とあってオルケスタとは一味違う演奏を楽しみました。今回は一寸趣向を変えて「日本人が作曲をしたタンゴ」も聴こうと云うことにしました。曲目はマエストロ門奈さんの作られたミロンガ・パンペアーナの「ダル・ブエルタ」、オルケスタの演奏でも聴いた「ロス・ビンクロス」。麻場さんの作曲になる「フロリダ通りを歩きながら」と云う佳曲は彼の地に行った事の無い私などには、さも「行って来たぞ！」と言われている様な思いがしました。平花さんが作られた「ラ・ピカリータ」と云うのは、アストロリコがブエノス・アイレスにいる間ミゲル・モンテスさんが言い出して皆が平花さんにつけた「あだ名」だったと云うお話でした。ピカラと云う意味は「いたずらな」とか「辛辣な事を云う人」との事だそうですが、あの柔和な笑顔を見ているととてもそんなには見えないのですが？？

京谷弘司さん作曲の「レコルダシオン」はお馴染みの曲、そして御大「早川真平さん」の「パレルモの夜」、それと有名曲「地上の星」を門奈さんの編曲で聞かせて頂きました。

第３部は“来日したタンゴ楽団を回顧して”と題して島﨑名誉会長に色々な楽団との経緯をお話して頂きました。我々の年代が本場のタンゴと拘った歴史のお話で、各年代に起こった世相を交えて楽しい「回顧談」でありました。意外だったのは昭和29年に初めて来日をした「フアン・カナロ」の時はアルバイトで忙しくて行けなかった事が悔いの残る事と云われた事でした。それ以後の楽団は勿論全部行かれると共に歓迎会など交流を深められた様子などを聞かせて頂きました。

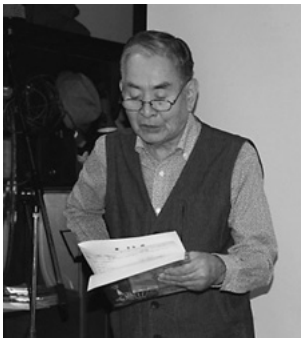
昭和43年のフアン・ダリエンソ楽団の処では御大が大の飛行機嫌いなので、楽団は来日したけれど本人は来日せず、その代わりにカルロス・ラサリがマエストロでやって来た事のお話がありました。そのラサリのお孫さんが今年楽団を率いて来日をしたのですから感慨も一層でした。その昔「高橋忠

雄さん」と並んでタンゴの大先生「高山正彦さん」も飛行機嫌いで一度もアルゼンチンには行かなかった事もご披露して下さいました。

プログラム外で神戸にちなんだSPレコードで、島﨑名誉会長お得意の「巴里ムーラン・ルージュ楽員」の演奏する「美はしの神戸」（昭和７年）を聞かせて頂きました。（翌日、舞台となった「松風・村雨堂」を案内させて頂きました。）

そんなこんなで、ほぼ座席定員の入りで和気あいあいの雰囲気の中、吉澤さんのお手配で記念写真を写して頂いて無事散会となりました。只、気になりますのが私の様な年寄りがそう長くやって居られないのは明白な事実で、この後を引き継いでやって下さる若い？方が見つからないと云う苦悩がとみに大きくなっています。

次回は11月８日（日）、来年の春は５月の第４日曜日の予定になっています、皆様方のご協力・ご支援をお願い致します。



上田　登氏

島﨑名誉会長

アストロリコ四重奏団の演奏風景

日本タンゴ・アカデミー　第25回 関西リンコン・デ・タンゴ
2015年5月24日（日）　於：神戸三宮「サロン・ド・あいり」

プログラム

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　第　1　部　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

映像で見るタンゴ　　ベスト オブ タンゴ　VOL 2　　227　上田　登

1	PREGONERA 花売り娘	（A. デアンジェリス） アルフレド・デアンジェリス　　歌 ダンテ&マルテル
2	RESPONSO 冥福の祈り	（A. トロイロ） オスバルド・ベリンジェリ&エルネスト・バッファ
3	EL CHOCLO とうもろこし	（A. ビジョルド） 歌　ティタ・メレージョ
4	LÁGRIMAS Y SONRISAS 涙と笑い	―ワルツ―　（P. デグージョ） 踊り　ポーチョ・ピサロ
5	INSPIRACIÓN 霊感	（P. パウロス） 踊り　アンドレア&セバスティアン
6	FELICIA フェリシア	（E. サボリード） 踊り　カルロス&イネス　ボルケス
7	LA CASITA DE MIS VIEJOS わが両親の家	（J. C. コビアン） Bnソロ　　アストル・ピアソラ
8	LA YUMBA ラ・ジュンバ	（O. プグリエーセ） オスバルド・プグリエーセ&アティリオ・スタンポーネ
9	GRICEL グリセール（女性名）	（M. モレス　　J. M. コントゥルシ） 歌　A. バレラ
10	DON ALFONSO ドン・アルフォンソ	（H. バレラ） フアン・ダリエンソ楽団
11	LA CUMPARSITA ラ・クンパルシータ	（G. H. マトス・ロドリゲス） 踊り　ダニエラ&アルマンド
12	TAQUITO MILITAR 軍靴の響き	―ミロンガ―　（M. モレス） 踊り　ノルマ&ルイス　ペレイラ
13	BOEDO ボエド（通りの名前）	（J. デカロ） 踊り　バニーナ&ロベルト
14	インタビュー	
15	EL ONCE 第11回	（O. フレセド） 映像　ブエノスアイレスのクラブ風景
16	INVIERNO PORTEÑO ブエノスアイレスの冬	（A. ピアソラ） アストル・ピアソラ5to
17	ESCUALO 鮫	（A. ピアソラ） アストル・ピアソラ5to

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　第　2　部　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アストロリコ 四重奏団の演奏を楽しむ　　074　門奈紀生　282　麻場 利華

バンドネオン　門奈 紀生　　バイオリン　麻場 利華

ピアノ　平花 舞依　　コントラバス　滝本 恵利

普通のコンサートでは中々聴く事の出来ない日本で作曲された、タンゴの名曲をお楽しみ下さい

1　CAFÉ DOMÍNGUEZ　（A. ダゴスティーノ）
カフェ・ドミンゲス

2　EL CHOCLO　（A. ビジョルド）
エル・チョクロ

3　DAR VUELTA　（作曲：門奈紀生）
二人日和

4　LOS VÍNCULOS　（作曲：門奈紀生&平花舞依）
絆

5　CAMINANDO POR LA CALLE FLORIDA　（作曲：麻場利華）
フロリダ通りを歩きながら

6　LA PICARITA　（作曲：平花舞依）
ラ・ピカリータ

7　RECORDACIÓN　（作曲：京谷弘司）
回想

8　パレルモの夜　（作曲：早川真平／編曲：門奈紀生）

9　地上の星　（作曲：中島みゆき／編曲：門奈紀生）

10　BENDITA NOCHEBUENA　（J. S. ゴリオ）
幸せなクリスマスイブ

11　TODA MI VIDA　（A. トロイロ）
我が人生のすべて

12　PA'QUE BAILEN LOS MUCHACHOS　（A. トロイロ）
仲間達が踊るように

門奈紀生　「O. T. ポルテニア」「ロス・タンゲーロス」「タンゴ・クリスタル」 等で活躍後1991年「アストロリコ」を結成、日本人離れしたタンゴの感性に本場アルゼンチンでも奇跡と驚嘆される「黄金の左腕を持つバンドネオン」の異名のとおり、琴線に触れる情感豊かな演奏で人々を魅了している。

麻場利華　大阪音楽大学卒、海外公演での演奏を聴いたウーゴ・バラリスやアントニオ・アグリ等の名バイオリニストから「彼女には教える事はない」と称賛される。
FMラジオのタンゴ番組「チャオチャオ・リカ！」のDJを4年間務めた。

平花舞依　大阪音楽大学卒、的確なテクニックとリズム感を持ち、ダイナミックな演奏は巨匠ホセ・コランジェロを始め、本場の巨匠達が驚きを持って称賛された。

滝本恵利　国立音楽大学卒、カナダのゲーリー・カー氏のセミナーに参加、オーケストラ・室内楽等で活躍中の2009年アストロリコ・レディース「アルコイリス」でタンゴ界デビュー「男前な演奏」が魅力の希少な女性奏者。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 第 3 部 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

来日したタンゴ楽団を回顧して

タンゴ・ファンを熱狂させた思い出のシーン

関西リンコン／2015／4／26

島 崎 長 次 郎(NTA名誉会長)

1. 1954(昭29)年　フアン・カナロ楽団
   甘きものを AHÍ VA EL DULCE(Juan Canaro)

2. 1961(〃36)年　フランシスコ・カナロ楽団 (司会:高橋忠雄)
   タンゴの宝もの RELIQUIAS PORTEÑAS(メドレー)

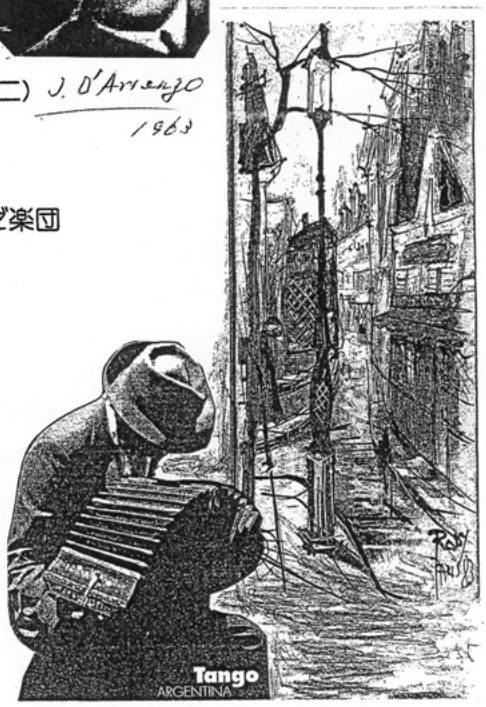
3. 1963(〃38)年　フェルナンド・テル(Bn)・トリオ
   泣き虫 EL LLORÓN(A. Radrizzani)

4. 1964(〃39)年　キンテート・レアル
   夜明け EL AMANECER(R. Firpo)

5. 1965(〃40)年　オスバルド・プグリエーセ楽団 (司会:谷川越二)
   白いスカーフ(J. マシエル)～想い出～ラ・クンパルシータ
   EL PAÑUELITO～RECUERDO～LA CUMPARSITA

6. 1966(〃41)年　フロリンド・サッソーネ楽団
   フェリシア FELICIA(E. Saborido)

7. 1967(〃42)年　アルマンド・ポンティエール楽団 (司会:谷川越二)
   友に捧ぐ A LOS AMIGOS(A. Pontier)



8. 【映　像】"ファン層を拡大したドイツの雄" アルフレド・ハウゼ楽団
   碧　空 BLAUER HIMMEL(Josef Rixner)

9. 1967(〃42)年　ロス・セニョーレス・デル・タンゴ
   エル・チョクロ EL CHOCLO(A. Villoldo)

10. 1968(〃43)年　フアン・ダリエンソ楽団
    ラ・プニャラーダ(M) LA PUÑALADA(P. Castellanos)

写真で見る最近のブエノス・アイレス
2014年2月と11月

佐藤　進（上尾市）

［タンゴゆかりのカフェを訪ねて］

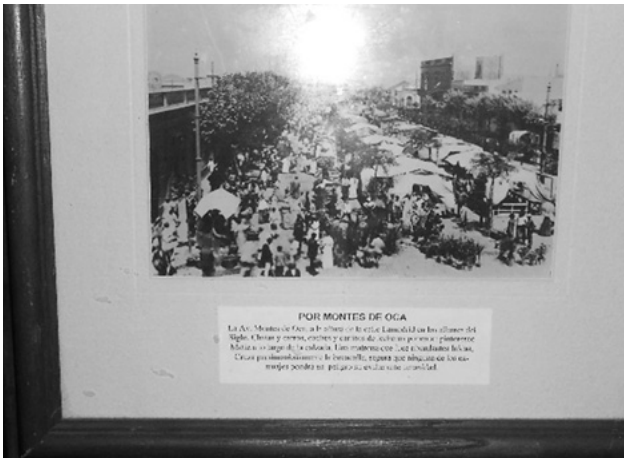
由緒あるカフェ・トルトーニは今では観光客のメッカ的な存在

ラ・ペルラ・デ・カミニートは多数の移民が上陸した当時からボカを見守っている

エスキーナ・オメロ・マンシではいつもタンゴが流れている

新装なったカフェ・デ・ロス・アンヘリートスは多くのタンゲーロスが通った店

1942年開店のエル・プログレッソはかつて存在したトレス・エスキーナスに近い



エル・プログレッソには賑わった当時のバラカスの写真が多く展示されている

[ライブ・ハウスで聴く]

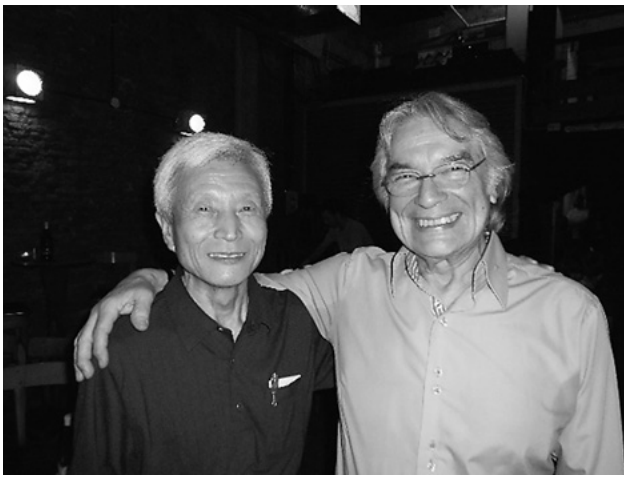
アルマグロ・タンゴ・クラブで演奏するセステート・マジョール、指揮はオラシオ・ロモ

演奏終了後メンバーとのスナップ

トルクアット・タッソで歌うリディア・ボルダ、この夜はフォルクローレが多かった

カフェ・トルトーニのSala Alfonsina Storniに出演したトリオ・ミッション・タンゴ

カフェ・ビニーロ、この夜はオルケスタ・ビクトリアの演奏でノエリア・モンカーダが歌った



カフェ・ビニーロに出演したラウル・バルボーサと

[ミロンガを楽しむ]

Salón Canningのパラクルトゥラルは人気抜群のミロンガ、演奏するセステート・ミロンゲーロ

セステート・ミロンゲーロの演奏で踊るアナリアとマルセロ

クルブ・グリセル

ヌエボ・チケではミロンガの合間に抽選でシャンパンや招待券が当たる

パラクルトゥラルで演奏するラ・フアン・ダリエンソ楽団、演奏は午前1：35に始まった

ラ・フアン・ダリエンソ楽団で歌うフェルナンド・ロダス、ダリエンソ・スタイルで踊りたいダンス・ファンで混雑する

[ミロンガを楽しむ]

ラ・イデアルは映画のシーンに登場するなど知名度が高い、昼はカフェ、午後はミロンガとなる

開いたばかりなので空いているオベリスコ・タンゴ、空いていると注目されるため初心者は踊りにくい

大きな会場で人気ミロンガのラ・ビルータに出演するコロール・タンゴ

パレルモ地区の社交場とも呼べるサラ・シラヌッシュは品の良い雰囲気が漂う

エル・ベッソにはベテラン踊り手が多く集まる、夜12時ころが最も混んでいて初心者は入りにくい

ヌエボ・サロン・ラ・アルヘンティーナは午後早く始まるので地元のシニアが集う、タンゴのみならずサルサやバチャータも盛ん

愛好家インタビュー

本田　健治（渋谷区）さん

INTERVIEW

～（株）ラティーナ　社長 ～

聞き手　宮本 政樹

「ラティーナ」誌は、かつての「中南米音楽」の時代から、タンゴに関するさまざまな情報を発信し続けてきた日本では唯一の月刊誌であり、我々タンゴファンにとっては非常にありがたい雑誌である。その代表者である本田健治さんにタンゴ誌の歴史、タンゴ観、編集・営業方針等全般に亘ってお話を伺いました。（2015年４月６日ラティーナ事務所にて）

１．＜音楽への興味から職業としてのレコード会社へ＞

本田　子供の頃は音楽よりもスポーツの方が大好きでした。でも、生まれた年になくなった父が部屋中一杯のSPをもっており、また姉たちが音楽が好きでLPを持っていたので、たまたまコンチネンタル･タンゴのリカルド･サントスなどを聴いていた記憶があります。それと偶然かもしれませんが、北海道の田舎で姉に連れられていったトリオ・ロス・パンチョスの生演奏を聴いて「すごい声があるものだ！」と感動した記憶はあります。当時はシャンソンとかカンツォーネとかも日本の曲やアメリカのポップスと同様にもてはやされていて、ラジオのヒットチャートなどに応募したりして楽しんでいました。でも、音楽の道に進もうとは考えてもいませんでした。

中学から高校時代は、ビートルズやローリング・ストーンズが出てきて、その影響でエレキギターをまず始めました。バスケット部にいて夜中はギター、いつ寝ていたのか（笑い）。大学ではギター部に入って、いつの間にか「関東大学ギター連盟」の委員長も務めました。私はみんなと合奏するのではなく、フラメンコ・セクションを独立させて、それに夢中でしたよ。３年ぐらいまではかなり熱中して、プロを目指そうかとも思ったのですが、僕よりもっとうまい人があまりメシが食えていないんですね（笑い）。音楽に深く入って行ったのはその頃で、寝ても覚めてもフラメンコ、パコ・デ・ルシアのコピーばかりやっていました。それから何か音楽に関わる仕事をやりたいと思ってレコード会社に入りました。ビクターとフィリップスの共同出資会社の日本フォノグラムの第一期生でした。

洋楽部に配属されましたが、呑気なものでパコ・デ・ルシアがフィリップスのアーティストだと知ったのは入社してしばらくしてからでした。他にはフィリップスは南米では圧倒的なシェアを誇っていて、フォルクローレの宝庫でした。その割にタンゴは少なかったですね。で、パコを売りたくてもセールスが伸びない。その原因はスペイン語？と思い、原盤倉庫からスペイン語のものばかり集めて片っ端から聴きました。スペイン語圏の歌が流行ればパコとかカマロンの様なものでも売れるようになるに違いない。と、まぁ動機は単純でしたが。その中での一番心打たれたのはメルセデス・ソーサの「アルヘンティーナの女たち」でした。で、フラメンコ・シリーズに加えてフォルクローレのシリーズを出しました。ちょうどその頃NHKの人気番組「世界の音楽」でクリスティーナとウーゴが爆発的な人気になり、直後にアルゼンチン・フィリップスが契約して録音したおかげで、セールスも爆発的に伸びた。当時のフォルクローレ・ブームは実はクリスティーナたちに負うところが大きかったと思いますよ。フォルクローレ・シリーズが順調になり始めた頃、また原盤倉庫から凄いレコードを発見。「ニューヨークのアストル・ピアソラ」です。音といい、音楽性といいガツンと殴られたようでした。これはもう売れても売れなくてもいいや、っていうくらい惚れてしまいました。で、他のレーベルからでているピアソラを聴いたらどれも素晴らしい。こんな素晴らしい音楽があるのに、タンゴ界ではあまり評価されていないということにがっかりした反面、これはチャンスだと思いましたね。でも、もちろん、洋楽部ですからロッド・スチュアートとかレオン・ラッセルのプロモーションもやらされましたよ。私の好みにはジャンルはないですから、どれも良い思い出です。74年だったですかねぇ、オイル・ショックで世の中自粛ムードに溢れていて、ジャケットにコストを掛けないという業界の決まりがあったのに、僕みたいな若僧がそれを打ち破って、カラー７ページもある豪華なメルセデス・ソーサの最初のレコードを出した。それが原因で当時の社長と最悪の関係になって会社を辞めることになってしまった。

―　会社の従来のやり方とは違う自分の確固たる営業方針があったわけですね？

本田　という訳でもないのですが、こんなマイナーな音楽を売るには、みんなが自粛している時に派手なジャケットのを出すくらいのショックがないと認めてもらえませんよ、と言うのが私の言い分だった。若かったというか馬鹿でしたねぇ（笑）。でも、その結果メルセデス・ソーサは世の中で認められたのだからいいんですよ。パコ・デ・ルシアだって、しつこく出し続けたから知られるようになっ

たんだし。でも、会社にあれだけたてついたら無理ですよ。私が社長だったらすぐ首です(笑)。あの当時はラテンと言う言葉を使ってはレコードは売れない時代でした。だから、あのまま逆らわずに残ったにしてもあまり良いことはなかったですねぇ。だから「中南米音楽」が何でこんなにタンゴを続けて記事やってるんだ？と、最初入る前から思ってましたね。ところが会社を辞めてスペインに行ってたら「中南米音楽」の中西さんから電話があって「一緒にやらないか」と話があり、帰ってきて最初に担当したのが民音タンゴ・シリーズのフルビオ・サラマンカです。

― 「中南米音楽」に入ったのは何年ですか？

本田　1974年に入ったんですけど、75年の１月からのそのタンゴ・シリーズでミュージシャン達と一緒にいてだんだんタンゴが面白くなって来た。それでピアソラ以外も聴き始めたんです。サラマンカの次がフェデリコでしたが、感激しました。２部の頭で３曲だけトリオでピアソラやったんですが、もの凄い演奏なのに、あの当時はピアソラはまだ一般的には評判が良くなかったせいか客席で感動している風な人はあまり見かけなかった。あの頃はタンゴにとってはいい時代ではなかったですが､救いだったのは､大岩さんから「本田君、ピアソラ？中々いいところを聴いているね」と言われたり、京谷さんからも「どうしてこのピアソラがダメなんだよ」と言われて、すごく勇気づけられました。毎年タンゴシリーズを聴いて行くうちに、タンゴは奥が深いなと感じ、良さもわかってきていろいろ聴くようになった。その時代ですらタンゴを聴いてなくて他のジャンルの音楽を聴いていた人が初めてタンゴを聴いた時に惹かれるのはピアソラだろうなという確信はしていましたし、若手の評論家たちは皆ピアソラが大好きだったので増々意を強くしました。タンゴを聴き始めるのに入り口は何でも良い、きっかけですから、どれかを否定してはダメです。まさにタンゴ・アカデミーがやらなければいけない事の根本でもあると思います。

２．＜「中南米音楽」誌から「ラティーナ」誌への音楽的環境の推移＞

― 「中南米音楽」から「ラティーナ」に変更したのは1980年頃でしたか？

本田　ええ、1980年代の初め・・・ピアソラが初めて日本に来た頃ですね。「中南米音楽」の最後が1983年の３月号で、４月号を休んで５月号から新たに「ラティーナ」となりましたね。（その二冊を持って来て見せてくれました。）

― 1970年代というのはタンゴ界にとっては最悪の頃で、タンゴ楽団も衰退、消滅したりして、タンゴの記事も少なくなり、雑誌の内容もワールド・ミュージック的なものに転換しようという事だったんでしょうか？

本田　そうですね。ブエノスアイレスを訪れても当時のタンゴ・スポットは観光客ばかり。フェデリコだけがしっかりティピカ編成を守るんだ、と張り切っていましたけど簡単ではなさそうでしたよ。1970年代の後半になって、タンゴもフォルクローレも話題性がなくなって困っていたら、スイスのモントルー・ジャズ・フェスティバルで、ブラジル音楽がすごく受けて、ブラジル・ナイトだけが２晩になって盛りあがっていたんです。そこでブラジル音楽を中心に雑誌を組み立てるようになった。雑誌を維持するためには仕方がなかったんです。でも、そんなこともあったのかアルゼンチン・タンゴをずっと背中に背負ってき

た中西さんとしては、「もう、雑誌なんか止める！」と言い出したんです。

— あの頃はメディアもタンゴの放送を取り上げなくなってしまいましたね。

本田 そうですね。ブラジル音楽だけが唯一見込みがありそうだったが、まだ実績がないわけですね。始めた頃はブラジル音楽はタンゴよりも売れてなかったのに話題になった。70年代後半には日本でも一般紙やFM東京あたりでブラジル音楽のムーブメントが出来てきた。それで、1979年から我々もブラジルのアーティストを呼ぶようになったんです。ＦＭ東京には今のJ-Waveの現社長の斉藤さんがいて、喜んでバックアップをしてくれました。ブラジル音楽だけがまだ世の中の人は騒いでくれていた。でもブラジル音楽が話題になった頃、ピアソラの来日の話が起こって、自治省の協力で来日が実現することになった。あの時は武満徹さんや評論家の黒田さんたちがすごく応援してくれて、あちこちで記事を書いてくれました。

— ピアソラと武満徹さんとの接点が資料もなくてわからないんですが、そんなに記事を書いていたんですか？

本田 僕らはピアソラが来日する時に宣伝のための小さな新聞を作ったんです。武満さんはピアソラが大好きで、そんな価値もない、宣伝のための新聞に記事を書いてくれました。それと黒田さんも一般誌紙への影響力が大きかったから、一応成功を収めることができました。あの時の新宿厚生年金での公演は自分が関わった公演の中で今でも最高の一つと思っています。

そんな事で、「雑誌はもう止める！」って言ったんで、僕は「こんな立派な装丁にしてやらなくても、やる方法は絶対にあるから、何とか続けませんか」と言って説得し、「もうカラーも要らないし、成り立つスタイルで計算してみますから」と言って、名前も「ラティーナ」にして、こんな中綴じのものにしたわけですね。皆さんには、「すごく若向きに作って発想を変えたんじゃないか」と言われましが、本当は窮余の一策というか、とにかく経費をあまり掛けないで、印刷屋も変えて再出発したんです。それで、サンプルがきてどんな雑誌になるのか見えてきた頃には、実は中西さんも喜んでいましたよ。実際、雑誌は辞めたくなかったはずですから。

— そして、タンゴの記事も出来るだけ少なくして。もうタンゴは受けなくなっていましたからね。

本田 でもその頃はまだ読者の中でも半分はタンゴファンでしたから、そこのところのせめぎ合いが大変だったです。一方で、止めるって言われているものを出しているわけだから、売れなければいけないし（笑）。

— かつての全盛時代には、タンゴの記事は７割から８割ぐらいまでありましたかね。

本田 そうですね。タンゴとフォルクローレを合わせて８割ぐらいでしたね。ブラジルは逆にものすごく少なかったですね。70年代のボサノバの大ブームの頃でもブラジルの記事はほとんどなかったですね。「ミュージック・マガジン」は随分取り上げていましたが、「中南米音楽」はほとんどなかった。ですから「ラティーナ」になった状況というのは、僕らがこれをやりたくてというのではなく、窮余の一策で止めるのはないだろうという発想でしたから。再発１号目は、売れるようにするためにいろいろな手を使って、東販の人に協力してもらって今までの３倍以上を本屋に並べてもらっても、見事に半分ぐらい売れなくて

戻ってきましたよ（笑い）。でもタンゴも全くないわけではなく、だんだんやって行くうちに中西さんも分かってくれて、「もうこのやり方でないと無理なんだなあ」と言ってました。それでも、タンゴの記事も藤沢嵐子さんの復活や、ピアソラの来日もあったから結構やっていたんですけどね。80年に藤沢嵐子さんが一時カムバックして、その後もずっと追っかけてましたよ。なにしろタンゴには他に人を惹きつける話題がなかった。

３．＜現在のアルゼンチンにおけるタンゴその他の音楽の状況＞

— 今現在のアルゼンチンでの音楽状況ですが、ポピュラー音楽全般に占めるタンゴの人気はどうですか？　若者の音楽志向がサルサの方に向かっているとも聞きますが、実際のところはいかがですか？

本田　一時サルサの人気もありましたが、今はアルゼンチンの若者の音楽の一つがタンゴですね。それからフォルクローレ系の新しい音楽や、ジャズっぽい新しいポピュラー・ミュージックも徐々に出てきていますが、どうでしょう？　タンゴの方が動きはあると思いますね。その他、南米中どこでもそうですが、昔からロックは強いし、ポップスもそうですが、サッカー場を満杯にするポップ、ロックのアーティストやグループはたくさんいますよ。

— 若手の演奏家も随分出てきているようですし、タンゴも完全に復活したと言えるでしょうね。

本田　そうですね。70年代から僕もずっと見てきてますけど、ピアソラ人気の頃から若いミュージシャン達もどんどん出て来たし、今は楽団も、ものすごい数が生まれています。それに、今はミロンガが盛況で、若者たちはカジュアルな感じで、お爺さんが孫を連れて来る、と言う風に非常に理想的な状況ですね。去年のタンゴダンス世界選手権の司会の挨拶で、「現在はタンゴの新たな黄金時代だ」とついに公言しましたね。

— タンゴの歴史から言うと、「第三期黄金時代」ですかね。タンゴが盛んになる時には常にダンスがあるといいますからね。

本田　でも、やはり音楽家がいないと始まらないから。日本でも演奏家がたくさん出てきているけど、黄金時代というには恥ずかしいマーケットだから、これは皆で応援してやって行くしかないんだと思います。質の高い音楽家たちがずいぶんタンゴの世界に来るようになっているわけですから。

４．＜タンゴの復興とそれに対するラティーナの編集方針＞

— このようにタンゴが復活した状況において、ラティーナではタンゴの編集内容に何か特別に力を入れて行こうというような事は考えておられますか？

本田　まずはトピックを追っかけて行きながら、新しい楽団の紹介をしないと、せっかく生まれてきているのだから。ところが新聞にタンゴが載ると、それにまず飛びつくのは今の60代以上の人達で、若い人達はまだ目に付かない。

— だから昔からタンゴは年寄りの音楽だと言われる所以ですね。

本田　僕らが若い時からそう言われてましたね。これを何とか風穴あけられないかなぁと思うんですね。若手の音楽家はプロになると直ぐオリジナルをやりたくなる。音楽家としてそう考えるのは当然ですが、古い方達は、

みんなとは言いませんがまずは曲目。それも有名曲。「ダリエンソをやって欲しい」とか、「それじゃないとタンゴじゃない」とか言われてしまう。ところが自分が音楽家になったとして考えると一番わかりやすい。トリオ・ロス・パンチョスみたいに「ベサメ・ムーチョ」をいつも同じスタイルで10年間やり続けたら、普通の人間ならば気が狂いますよ(笑い)。特に若い連中は過去にあったものよりも、どんどん新しいものをやって行きたい。例えば、プグリエーセだって、30年代に初めて自分の楽団を作ってるし、ダリエンソだって28歳の時にチャンテクレールで自分の楽団で出演している。それで皆がダリエンソを認めた頃に、その前の「あれを聴かなきゃタンゴじゃないよ」なんていう話にはならなかったと思うんです。一番いけないことは若い者をコンサートに連れて行って「良かっただろう」と言えばいいのに、「今日のはタンゴじゃないよ」とベテランのタンゴファンが言ったら、そこで終わっちゃいますよ。ファン個人としてはいいんだけど、タンゴ・アカデミーとしては控えるべきだと思いますね。新しいファンが「タンゴって想像を遙かに超えて素晴らしい」と感激しているのに、「えっ、あれを聴いて？」と馬鹿にしたような発言をする。そんな事を言われたらもう誰も寄ってこないですよ。若い連中をみんなで育てていくという気持ちにならないといけないですね。好きか嫌いかという論争はもちろん自由ですし、いいことですけど。

― 趣味としての音楽の好みは自由であるから、相手に押し付けたりするのも良くないし、お互いに認め合わなければいけませんよね。

本田 そうなんですね。皆が自分の好きな事が言える、その方が酒もうまいしね。もちろん、自慢もOKです。若いファンが「凄い！」って思うような場合はね。若い人がお歴々の前で自分の好きな事言って「お前、えらいな！」って言われた方が更に近寄ってきますよ。その方が両方とも酒がうまいしね（笑い）。アカデミーも若い人を育てるような組織であって欲しいと思います。お偉いさん達が前に座って会をリードする雰囲気はものすごい時代遅れですね。あの中には若い人達は入って行けない。

― そうですね。ところで、今後具体的に何か特集記事のようなものは予定しておられますか？

本田 今年はガルデル没後80年にあたり、ガルデルの特集を来月号から３ケ月続けて予定しております。タンゴの歴史においてあれだけタンゴに貢献した人はいないわけですから、取り上げるのは価値がありますね。樫村慶一さんが実によく調べてまとめてくれています。ガルデルの出生の秘密なんて面白いですよ。樫村さんという人は80歳を超えていらっしゃるのに、良く研究されているし、お話ししていてもとても若く感じます。

― 最近「ラティーナ」を読んでいて特集記事にいいのがあるなと思いますね。「生誕100周年トロイロ物語」とか「タンゴ日本渡来100年」、それに数年前からやっていた西村秀人さんの「21世紀のタンゴ・マエストロたち」など100回続きましたよね。鈴木多依子さんの翻訳文なども価値がありますね。

本田 ただタンゴの記事だからというだけでやっていた時期がありましたが、普通の人が面白いと思うように、書く方も、我々も、編集者も、これは今面白いなという事をきちっと出していかないと影響力がないですよね。翻訳文にしても、アカデミーの会長のガブリエ

ル・ソリアが以前からためていた40人～50人分のものを少しずつ出して行く予定です。タンゴの記事も着実に増えてますから、書き手の人ももっといないかなと思いますね。東京でも一番知っているアカデミーの方々がなぜか表に出てこない様に見えます。地方でももの凄く研究している方々がたくさんいらっしゃる。アカデミーというに相応しい形になっていけば、亜国の国立タンゴアカデミーとももっと直接繋いで見たいと思っています。

５．＜イベントを開催するためのアーティスト招聘の際の問題点＞

本田　まず民音主催の演奏会はシリーズですから、毎年その反応を見ながら２年先ぐらいの事から決めて行きます。例えばラバジェンのようにプグリエーセのスタイルではあっても少し難しいのは、東京では受けても全国で見たらどうであったかを考えて、次の年にはもう少し分かりやすいものを持ってくる。

―　最近のグレコ兄弟やファビオ・ハーゲルのように若手を中心にした演奏もいいと思うし、特に今年のラ・フアン・ダリエンソは非常に評判が良かったですね。歌手も上手かったですね。

本田　ラ・フアン・ダリエンソのように若手で昔のアレンジのままでやってくれる楽団が少なかった。３年前のダンス世界選手権でラサリの孫のファクンドが楽団を結成して初めて演奏するというので聴いたんですが、その時は学生バンドのように速い曲になると走ってしまうので、契約する時には「走らないなら」という条件で押しつけた（笑）。でも、ブエノスでは、その走った時ですら爆発的に受けてましたね。ソリスタス・デ・ダリエンソの現地での演奏は毎年ものすごく盛り上がるんですが、あの年取った人達を２ケ月以上の日本のツアーに連れてくると病気になったりで、結構大変なんです。招聘する際の問題はいろいろありますが、例えばスポンサーの意向です。毎年やるからあまり冒険できない。でも、88年のゴジェネチェとマルコーニを呼んだ中南米フェスティバルのように、外務省の審議官が「アルゼンチンでは今これこそが一番受けているんだというものを金は出すからやれ！」と言ってくれる時は一番贅沢なのを組めるんです。あまりそんな理想的なスポンサーはいませんが。ピアソラの来日の時もお金を出してくれた以外、ほとんど条件はなかったですから、感動的なステージが実現できた。

―　楽団を決定する時もただ評判を聞いて決めるのでなく、実際に自分で聴いて判断する事が重要でしょうね。

本田　僕は自分で聴いて良いと思わないと呼ばないですから。それは当たり前の事で、それだけ危険負担を負っているわけです。ライブのプロデューサーだけではなく、ラジオ番組でも、もっと自分の好きな個人の色を出すべきだと思いますね。

―　招聘する場合に他のジャンルと比べてタンゴは難しいという事はありますか？

本田　昔からアルゼンチンのタンゴの連中は日本に行きたいという気持ちを持っていますから、その分だけ大分楽ですよ。欧米や中米のツアーで回っている人達の欧米での扱われ方を見ていますとひどいもんですからね。例えばヨーロッパ・ツアーと言えば聞こえはいいですが、誰かが全部まとめているのではなく、例えば２週間ぐらいの日程だとしても普通は各国単位で担当している場合が多い。公演の間に日数があくと食事代やホテル代にも自己

負担分が出てくる。アメリカツアーなども買い手は普通別々で契約しているから仕事が大変です。尤も日本だって同じ場合もありますが。

— 今回の民音は日本の次が台湾でしたが、台湾なども一括して日本が契約をしていたんですね？

本田 そうです。台湾では日本以上に受けましたよ。タンゴの若い音楽家だというのに、まるで大スターみたいな扱いでしたね。それから、台湾にも優秀なバンドネオン奏者がおり、先日も同じ頃台湾でアウロラの会田桃子さんと一緒に演奏していましたよ。ヨーロッパのアコーデオン・フェスティバルで優勝した実力者とか。しかし、会田さんが言うにはバンドネオンもかなりうまかったらしい。古典タンゴだけではなく、ピアソラも演奏したようです。韓国に女性バンドネオン奏者がいて、アルゼンチンで勉強してきて大分上手くなって来てますね。ですからこれからそういう人達を集めて東京タンゴ祭にも入れて行くことも考えています。ヨーロッパの若手でもロシアやオランダ、北欧のグループの演奏がアルゼンチンでものすごい演奏をして好評だったようですね。今や世界中に若い楽団が生まれ始めてますから、そういうのを徐々に雑誌としても取り上げて、イベントとしてもやって、タンゴが拡がって行くことを期待したいですね。ダンスに関してもアジア選手権に７ケ国ぐらいから来ており、東京以外でも韓国や中国でも大会を開くようになり、アジア全域に拡がって行く兆しがありますね。

— 海外から見た日本の若手の演奏家の評価についてはいかがですか？

本田 昔も今も日本は圧倒的にアルゼンチンの次にタンゴが盛んな国であるという世界の認識は変わらないですね。日本の小松亮太氏にしても、アウロラにしても本場では非常に評価は高いですから。今、早川純さんが単独でフランスに行ってますが、日本のこの状況をヨーロッパの連中が知ったら、びっくりするくらい楽団の数は多いですね。

６．＜音楽出版業界の現状と見通し＞

— 今やIT産業が盛んになってきた時代に、書籍や雑誌を扱っている音楽出版業界は、CD販売も含めて厳しい状況になって来たと思いますが、「ラティーナ」としては今後の見通しとしてどのように考えておられますか？

本田 ただ、現実的に言うと今までの「中南米音楽」から「ラティーナ」に変わった頃と同じように精神的には見通しの暗い時代ですね。しかし、活字文化が全く消えるという事はあり得ないと信じるしかない。同様に、CDが衰退している中でアメリカをはじめとして、LPがまた見直されて人気が出てきています。今のデジタル文化に合わせていく必要はあっても、出来るうちは活字やCD、DVDなどパッケージの媒体を続けていくしかないと思ってます。この問題については無くなる訳がない、と信じるしかない。

— イベントは大事ですね。やはり生演奏がなければ音楽は発展しないですよね。

本田 だから、「エル・チョクロ」みたいな店が出来るとすごい嬉しいですよ。若い演奏家も自由にやっているし、若いお客さんもたくさん来てますからね。

— タンゴ・アカデミーの人からの要望でCDがもっと入手容易にならないかという事なんですが。

本田 昔に比べるとタンゴのCDを注文する人

がだんだん減っています。パソコンを使っている人がインターネットでうちの雑誌やホームページで入荷状況を見てくれればいいんですが。雑誌は一部しか載せる事ができていませんが、旧譜の入荷、再入荷を多くするようにしています。今度のガルデルの記事の時は、ガルデルを入れたり、いわゆる名盤とかタンゴのものを入れたいと思っています。そのためにはアカデミーと協力してこのページを作れるように出来れば良いんですけどね。今はネットでブエノスの直接卸商と繋がっていて、在庫状況が瞬時に分かるから、聞いていただければ在庫確認して直ぐ注文できますよ。アカデミーのセミナーやリンコンでリストを配布して注文すれば、一週間で手に入ります。

7．＜タンゴダンス世界選手権について＞

— 世界選手権が始まってから、ダンスの世界も変わってきて、選手権を目指して若いダンサーや、ダンス愛好者も増えて、ミロンガも盛んになり、若手の演奏家の出番も増えて、タンゴの普及という意味においては非常にいい状況ですね。ただ、従来の音楽愛好者とダンス愛好者とはいろいろな面で異なっておりますね？

本田 これは昔からどの音楽でもそうだったですね。フラメンコがそうですね。フラメンコを４年間やったという女性がパコ・デ・ルシアの名前を知らなかった（笑）。そういう意味では、タンゴダンス選手権のピスタ部門（旧サロン部門）では音楽を知らなければダメですね。曲の展開が分かってないと点数が良くない。

— 本場のミロンガに踊りに行ってアルゼンチンのダンサーによく指摘されるのが「タンゴダンスを踊りに来る前にもっと音楽を勉強して来なさい」と言われること。

本田 プロのダンサーでもエドゥアルドとグローリアなどは実によくタンゴを知っていますね。1920年代から30年代までの物凄い数のタンゴの音やフィルムを持っていて、研究しているので、そこを見習って欲しいと思いますね。今の世界選手権では、選曲する方も、出来るだけ皆の知らない曲を出したりすると、余りにも難しすぎて皆から大ブーイングを受けたりします。でもそういう論争が巻き起こる分だけ音楽への注目が高まっているわけだから良しとしたいですね。

— 私の会のミロンガでは以前から必ずプログラムの曲目と楽団名を張り出すんですが、ほとんどの人が関心を示さずにただ踊っています。音楽に興味があるんだろうかと疑ってしまいますね。

本田 先日のラ・ミロンガのパーティーでは３人ぐらいのDJを立ててやっていたみたいですが、選曲者が注目されるような状況は日本にとっても大事な事ですね。徐々にですがアルゼンチンタンゴ連盟でも、飯塚さんが音楽の事を解説しているし、どこのミロンガでもDJは誰かという事が表に出るようにはなりましたね。そのDJの好き嫌いも生まれてきている状況ですから、いい傾向にあると思いますね。

8．＜NTAの活動について＞

— NTAの主要な行事はレコードコンサートと二つの機関誌の発行ですが、タンゴ界では昔からのこの伝統的なレココンの在り方についてはどう思われますか？

本田 レコードコンサートはタンゴの世界だけ

でなく、ブラジル音楽でも、若い人達を中心にやっています。アカデミーでも若い人達が入ってくるような環境作りが大切ですね。若い人たちは現役で仕事が忙しくてなかなか出てこられないでしょうけど、今のアカデミーを支えている人達だって一番忙しい時にやって来たわけで、仕事はもっと大変だったかもしれませんし（笑）。

— ＮＴＡの機関紙のTANGUEANDO EN JAPÓNとTANGOLANDIAの内容についてはどうですか？

本田　僕はアルゼンチンのタンゴアカデミーとうまく連携する事が出来ないかなあといつも思っています。向こうはタンゴの本場だから情報も豊富にあります。日本ではCDやLPからの情報で現実には大分開きがある。例えばソリアのインタビューを見てもアーティスト本人たちとの付き合いから始まっています。タンゴ・アカデミーが亜国タンゴアカデミーと連携するためには論文みたいなものを取り上げなければいけないけど、そればかりやっていると、若い者が入って来ない。例えばトロイロ生誕100年特集などはソリアが企画・立案者になって、タンゴ・アカデミーだという事でギャラも抑えることができました。CDにしても安い価格で作ってもらいましたしね。それを日本でやろうとすると…簡単ではないですね。

— タンゴ・アカデミーは東京一極集中体制ですから、イベントに参加するのは地方の人にとっては非常に大変であると思われておりますが、それについてはどう思いますか？

本田　僕もそれを心配しているんですね。ですから機関誌に地方の人に参加する機会を与え、地方の方々の声を伝えるべきです。地方にも優れた研究家の皆さんがたくさんいらっしゃる。かつての菅平のタンゴ・フェスティバルのようなものも考えた方が良いのではないでしょうか。そこで地方の人達との交流があって、機関誌に投稿するいい機会にもなりますね。どんな組織でも地方の人に活躍の場を与えてあげないと、そのうち抜けていってしまいます。このままやっていたら地方からタンゴは消えてしまいますよね。

— そのうちにタンゴ・アカデミーとアルゼンチンタンゴ連盟とラティーナさんにも協力をしていただいて、地方のタンゴファンが参加出来るようなタンゴ・フェスティバルを是非開催したいですね。今日はお忙しいところを、長い時間に亘って大変貴重なお話をありがとうございました。

あれから５０年

「東京オリンピック」と「日本のタンゴ南米ツアー」

島﨑 長次郎

昨2013年の９月、ブエノスアイレスで開催された第125次IOC総会で、2020年夏季オリンピックの開催地がわが東京に決定したのは欣快この上もないことだった。そして、今年は前回（1964年）の東京オリンピックから数えて満50年になるという。戦災の廃墟の中から雄雄しく立ち上げ、紺碧の空に響かせた高らかなファンファーレは、躍進する当時の日本の象徴だった。10月１日の新幹線の開業にひきつづき、世界94ケ国参加のもとに開かれた10月10日の開会式。数々の名勝負、感動の名場面は数え切れず、50年経った今でもそれらは鮮明に思い出される。私たち昭和を生きてきたものにとって、これはまさに銘記すべきモニュメントとなった。

そんな1964（昭和39）年。わが国のタンゴ界にとってももうひとつ忘れ難い重要な出来事があった。

日本を代表する名流楽団、早川真平と「オルケスタ・ティピカ東京」の一行15名が、初めての海外遠征で、９ケ月に渡る南米縦断の演奏ツアーを敢行し、日本のタンゴの存在を広く知らしめたのだった。

昭和39年２月23日、羽田空港（カナディアン・パシフィック）を出発したメンバーは次のとおりだった。

◆団長（総括：指揮）早川　真平
○バンドネオン＝岡本　昭　　岩見　和男　　関塚大八郎　　平野　洋輔
○バイオリン　＝志賀　清　　片山　拓三　　家野　洋一　　河内　敏昭
○ピアノ　＝刀根　研二　　○ベース　＝福島　敏夫
○歌　＝藤沢　嵐子　　阿保　郁夫　　柚木　秀子
　＊マネージャー　中西　義郎（雑誌「中南米音楽」社主）　計15名。

一行は途中のバンクーバー経由でメキシコに入り、ここで一泊の後にブエノスアイレスの空港に降り立ったが、目にしたのは予想だにしていなかった出迎えの人々の多さだった。これには旅なれた中西氏もびっくりし、“ともかく大混雑でした。日本人学校の人々、日本人会のメンバー、大使館の人、それに現地のタンゴの演奏家たちなど、ある程度は予想していたものの、これほどの大歓迎にあうとは…、感激の連続で、うれしいというより先にただ呆然という気持ち

羽田空港から出発する一行、１９６４（昭和３９）年２月２３日

でした。なにはともあれ、まずは記者会見。次にテレビの予告編２本を矢継ぎ早にビデオ撮りし、大急ぎでいったんブエノスアイレスを離れることにした”と、中西氏は述べていた。

その後の９ケ月間の行動の概略については、メンバーの一人でバイオリンを担当していた河内敏昭さんの言などを中心にまとめると、およそ次のようになっている。

＜南米での９ケ月間にわたる活動の概要＞

◇ブエノスアイレスでの記者会見後、列車（一昼夜）にて「メンドーサ」に行く。
２日間にわたり、レストランとダンス・ホールに出演。

◇ブエノスアイレスに帰着後、ほぼ２ケ月の間、テレビ（週１）、ラジオ（週２）、夜は連続でミロンガに出演するなど、ここでは多忙をきわめ、月曜日はブエノスでは仕事ができない仕組みになっているため、ウルグアイのモンテビデオに出かけ、体育館や劇場で演奏し、翌日に帰ってまた仕事、といった具合で体調を崩すメンバーもいた。

◇ブエノスアイレスでは、日本でもその後リリースされた「タンゴ･エン･キモノ」のLPの録音（RCAビクター）があり、フロリンド・サッソーネ楽団のバイオリンの名手ロベルト・ギサードやカルロス・アルナイスなど数名がこれを応援してくれた。

サン・マルティン広場における「オルケスタ・ティピカー行」（1964年）

ブエノス・アイレスの録音のＬＰ
（現地と日本で同時録音）

◇当地で嬉しかったのは、いろいろなアーティストがホテルを訪問してくれ、得るものも少なくなかったが、かつて日本にも来たことのあるバンドネオンのフェルナンド・テルの手配で、ギターのロベルト・グレラが目の前で絶妙な演奏をみせてくれたことが最も感動的だったと、ギターも手がける河内さんは述懐していた。

◇その後“ヒーラ”（バスによる地方巡業）に出て、南はコモロド、リバダビア、北はロサリオなどに行く。道中がなかなか厳しかったけれど、ロサリオでは、バイオリンの名手エルビーノ・バルダロが一行を自宅に呼んで歓迎してくれた。

◇残念だったのは、仕事に追われて現地の楽団の演奏をじっくり聴く機会が少なかったことだったが、そんな中でミロンガの楽団の交代時に、ダイナミックなサウンドを誇るホセ・バッソの楽団が聴けたのはよかったし、“ヒーラ”の折に、エクトル・バレラ楽団の切れのある演奏に接したのも印象に残っている。いずれもリズムの取り方やダイナミックな弾き方に学ぶべきものが多く、おおいに

勉強になった。

◇この後に、当初の計画ではブラジルへ渡り、そこからスペインに回る予定だったが、折りしもブラジルの革命に遭遇。急遽予定を変更し、アンデスを越えてチリのサンチャゴに飛び、ここで３週間の仕事をこなし、次にペルーで約２週間の演奏を行った。

◇その後は、エクアドルのキトで１週間、さらにコロンビアに入ったが、ここでは街にしみじみとタンゴが流れ、ガルデル終焉の国柄をあらためて感じた。なお、ブエノスアイレスに続いて、ここでも記念にLP １枚を録音した。

◇最後の訪問国はメキシコで、ここではステージの演奏に、ダンス・ホールへの出演などが加わり、約２週間結構忙しいときを過ごし、ここを旅の最後にして一路懐かしの祖国、日本に向かった。

以上の足跡を残して一行が帰国したのは、注目の東京オリンピックが終了した後の11月26日。９ケ月にわたる旅をあらためて振り返ると、聴衆を沸かせ、足跡を記した国は、アルゼンチンを筆頭にウルグアイ、チリ、ペルー、コロンビア、エクアドル、そしてメキシコの実に７ケ国に及んだ。

今振り返ると、一行15名のうち、当の早川真平をはじめ、刀根研二、藤沢嵐子などすでに９名が亡くなられ、ただただ寂寥の念に耐え難いものがあるが、日本のタンゴ界の有志たちが果たした空前ともいえるこの快挙は、当時の東京オリンピックとともに、いつまでも私たちの記憶に留めおきたいものと思う。

Resumen en castellano

Por Irene Gashu

Han pasado 50 años

Por Chojiro Shimazaki

Han pasado 50 años desde las Olimpíadas de Tokio de 1964. En ese año, tuvo lugar otro acontecimiento memorable: Shinpei Hayakawa y 15 miembros de la Orquesta Típica Tokio realizaron una gira de 9 meses por Latinoamérica: Argentina, Uruguay, Perú, Chile, Colombia, Ecuador y México. Al llegar al aeropuerto de Bs. As. fueron recibidos por una gran multitud de gente. Esta gira sirvió para difundir ampliamente el tango de Japón.

（日本アルゼンチン協会会報No.65より、同協会の許可を得て転載。年次は掲載当時のまま）

アルベルト・カラシオーロ

鈴木 一哉

01. 出生から自身のグループ結成の直前まで

アルベルト・パスクアル・カラシオーロは、1918年３月23日ブエノスアイレスのパレルモ生まれなので、サルガンとピアソラの間の世代ということになる。オラシオ・フェレールによると、音楽について最初は独学であり（後にエクトル・マリア・アルトーラとアナトーレ･ピエトリに師事して学習を完成)、1933年４月31日にラジオ･アメリカ（LS10）にてデビューとされている。一方でカラシオーロの娘さんであるネリダ・ミランダによると、８歳からフアン・ベジードに師事して音楽を学び始めて（後述するマイサニとの仕事よりも後の時期にアナトーレ・ピエトリに師事して現代的な和声法などを学習)、初めて楽団に参加したのは1934年にアントニオ・アルシエリ楽団でバンドネオンを弾いたときであるとのこと。

おそらくカラシオーロの最初の重要な仕事は39～40年にアスセナ・マイサニを伴奏するトリオの一員となったことだろう。残されている写真などから、このときのトリオは、ビセンテ･コンティ（バイオリン)、フランシスコ・トロポリ（ピアノ)、カラシオーロというメンバー構成だったようで、指揮はおそらくトロポリがとったものと推定される。まだほとんど実績の無かった21歳の若者としては大抜擢だったのではないか？　ラジオ局への出演などをしていたようだが、残念ながらカラシオーロが参加したトリオ伴奏によるマイサニの録音は残されていないようだ。なお、この折にマイサニとカラシオーロはタンゴ「ドロール」(1939）を共作している。

30年代半ば以後、カラシオーロは様々な楽団のメンバーとして活動していく。参加した楽団には、ホアキン・ド・レジェス、アンヘル・ダゴスティーノ、マヌエル・ブソン、ビクトル・ブラーニャ、ホルヘ・カルダーラといったなかなか渋い名前が挙がってくるが、概ねその参加時期などは正確には追跡できていない（ブソン楽団の50年代撮影とされる写真に彼が写っているようだ)。ド・レジェス、ブソン、カルダーラの各楽団ではアレンジも書いていたという。この中では、彼の作品の録音が（おそらく初めて）おこなわれている点と、そこでの同僚との小編成での活動が60年代以後の彼の活動に繋がっていったという点から、最後に挙げたカルダーラ楽団が特に重要である。

カルダーラが日本滞在から帰国して自身の楽団を結成したのは55年末のことであるが（これに先立って55年には日本で２曲を録音)、まず56年にオデオンで４曲を録音し、その後RCAビクターに移籍して57～60年に23曲を録音している。ただし、当時発売されたのは15曲のみにとどまり、残り８曲は2003年になってブエノスアイレス・タンゴ・クルブ（BATC）制作のCDで初出となった（“JORGE CALDARA / AÑOS ’57 AL ’60（BUENOS AIRES TANGO CLUB VOLUMEN 13)” BMG 8287653296- 2［CD］P. 2003)。これら未発表だった８曲の中にはカラシオーロが父に捧げて

作曲したタンゴ”CON RUMBO AL CIELO”が含まれていた（カラシオーロは後に同曲をキンテートでも録音）。これは59年６月18日に収録された４曲のうちの１曲で、カルダーラとカラシオーロによる共同編曲とされているが、おそらくカラシオーロ作品の初録音と考えられるものだ。肝心の作品内容については、どこか大草原の香りを感じさせるような楽想があったり、独自のバリアシオンの型を追求したりしているなど、当時のモダン・タンゴの枠いっぱいの範囲内で新感覚さを発揮した充実作であった。なお、BATC盤にはカルダーラのディスコグラフィアなどを含む貴重なブックレットが付属しており、そこに掲載されている59年当時のものとされる楽団メンバーの写真の中には確かにカラシオーロの姿が確認できるが、60年の時点の楽団メンバーとされる写真にはカラシオーロは既に写っておらず、カラシオーロがカルダーラのオルケスタに参加していた時期は59年前後の比較的短期間だったのではないかと推定される。

このカルダーラ楽団参加と時期的に重なると思われるが、カラシオーロは、おそらく50年代末から60年代初頭にかけてキンテート・デ・オロという五重奏団でも活動している（ラジオ・デル・プエブロに出演）。表向きはカラシオーロの名前を前面に出したグループではなかったようだが、残された宣伝写真ではカラシオーロの写真を大きく中心に据えて他のメンバー４人をその周囲に配置していることから、実質的にはカラシオーロが指揮をとっていたと考えてよさそうだ。なお、メンバーのうちピアノのロドルフォ・マンシージャ、コントラバスのノルベルト・サモンタ、バイオリンのエドゥアルド・バルサックの３人はカルダーラ楽団にも参加しており、カラシオーロとのつながりはそこで発生したのだろうと思われる。どのような演奏スタイルだったのか是非とも知りたいグループであり、もし現代的な方向性を持ったスタイルであったとすると、モダン派による小編成グループとしては最初期の事例の一つとなるだろう。いずれにせよ、このキンテート・デ・オロの活動が60年代のカラシオーロ五重奏団結成へとつながっていったであろうことは確かだ（メンバーのバルサックが共通しているという点で）。

なお、1960年代になって、カラシオーロはトロイロ楽団の編曲も担当している。おそらく数は多くないと思われるが、例えば61年８月23日に初めて録音されたバルディ作「ティエリータ」は彼の編曲によるものとされる。弦のピッチカートの用法などに非常に洗練されたオーケストレーションが聴ける。

02. 60年代以降の自身名義のグループでの活動

ここでは、カラシオーロ本人名義の録音について触れていくが、後の発掘音源は録音年が不明確な場合が多いこともあり、発売順に触れていくことにする。

1962年に、カラシオーロは、ようやく自身のグループ、キンテート・デ・タンゴ・コンテンポラネオの結成にこぎつけた。44歳をむかえていたカラシオーロにとっては、遅すぎたデビューと言うべきか？　ラジオでの活動が中心だったようで、現在までに陽の目を見ている録音はわずかだが、その珠玉の録音からこの五重奏団が60年代の現代タンゴの最も質の高い成果の一つであったことがわかる。それだけに、このグループが歴史の底に埋もれてしまったことは極めて残念である。せめてアルバムの１枚でも残してくれていたらと思う。

五重奏団のメンバー構成は、アルベルト・カラシオーロ（バンドネオン、編曲、指揮）、エドゥアルド・バルサックまたはアントニオ・アグリ（バイオリン）、ロベルト・シカレー（ピアノ）、ルフィーノ・アリオラ（コントラバス）、フアン・カルロス・モジャーノ（パーカッション）に歌手（エドゥアルド・ソレール、ペドロ・オルティス、エドゥアルド・マルコーらが出入り）というものだった。とりあえず、62年の結成時点でのバイオリンはキンテート・デ・オロ以来のバルサックが担当していたと考えるべきだろう（当時のアグリはロサリオから上京してピアソラ五重奏団に加わったばかり）。その後は、他の仕事との兼ね合いで、バルサックとアグリのいずれかが交代して担当していくことになったようだ。

この五重奏団の最も独創的な特色の一つはドラムスの使用法にあった。確かにこれ以前にもタンゴの演奏にドラムスを採用した事例は色々と存在していたわけだが、リズムを部分的に補強するといった用法にとどまることが多かったわけで、ピアソラに連なるモダン派の枠組みでアンサンブルに有機的に組み込んだ形での活用はこの1962年のカラシオーロが嚆矢となるのではないか（ピアソラがパーカッション入り八重奏団を試みたのは1963年である）。一方で、傾向が全く異なるとはいえ、マリアーノ・モーレスが（親分のカナロとのつながりもあって）50年代の当時から積極的にドラムスを自身の編成に取り込んできていた点は注意しておきたい（なお、特にドラムスが活躍するセステート・リトゥミコ・モデルノの結成は1963年になってのこと）。

さて、カラシオーロ五重奏団の初録音となったのが、MICROFONレーベルのオムニバス盤“círculo de amigos del buen tango”に収録された２曲の自作タンゴ“Tema de tango en re menor”、“Templo 59”であった（キンテートのメンバーは上述の通りでバイオリンはアグリ）。1961年に作曲家エドゥアルド・パルーラが会長となって創設し、ルイス・アドルフォ・シエラ、エクトル・エルニエ、オラシオ・フェレール、ネリダ・ロウチェットら錚々たるメンバーを擁したサークル「良きタンゴ友の会」が監修した企画盤で、RCA VICTORから音源貸与を受けたトロイロ、ミクロフォン既発盤からの編集でスタンポーネ楽団、レイナルド・ニチェーレ四重奏団、そして、本盤でしか聴くことができない音源としてエドゥアルド・ロビーラ（12人編成）、エクトル・マリア・アルトーラ（管やアルパも含む大編成楽団）、カラシオーロ五重奏団が、各アーティスト２曲ずつ収録されている。数々のライヴの主催などを通じて、ピアソラ、ロビーラを頂点とする60年代前半のモダン・タンゴ運動への最大の支援団体であった同サークルは、1964年９月16日のパルーラ死去により解散をむかえるので、この編集盤の制作は同会の最後を飾る最高の成果であったと言えるだろう。カラシオーロの２作品に関しては、確かにピアソラからの影響も感じられるものの、前述のようにドラムスが音楽的な内容と深く結びついた形で利用されており、リズム割りでもピアソラとは異なる趣向を凝らすなど、独自の個性が刻印されている。また、何と言っても、60年代の奇跡的なアグリをピアソラとは一味違うスタイルのモダン派の枠組みで聴けるという点でも極めて貴重な録音である。

次に発売されたカラシオーロの録音は、1969年にオデオン・レーベルから出たキンテートによる４曲である。実は60年代末から70年代初頭の短期間だがカラシオーロはオデオン社の音楽顧問を務めており、それにともなって録音が可能となったものだろう。筆者の手元にあるのは“ORGANITO DE

LA TARDE”、“CON RUMBO AL CIELO”を収録したシングル盤のみだが、ここではドラムスに替わって電気ギター（エクトル・オルテガであろう）が参加している点が大きな変化だ。他にカラシオーロ自作の“Chiqui”、“Etéreo”の２曲を収録したシングル盤も発売されているはずだが現物未確認。音だけはネットで入手可能であるが、こちらは従来通りのドラムス入りキンテートでの録音だった。特に“Etéreo”は楽器の打楽器的な奏法によるノイズの使用など現代性を追求している。

1970年には、DISCOMUNDOレーベルから、フルート入りの復古調コンフントであるキンテート・アニョランサス名義でアルバム“de ayer… y de siempre”を発表した。対位法的な書法をアレンジに導入したスタイルは斬新で、数多い復古調コンフントの中でも異色の内容と言ってよいだろう。

以下では、カラシオーロの死後に発売された音源について触れる。

2004年には、ダウンロード販売のみで12曲入りアルバム“Tangomania”がリリースされた。このうち最初の９曲がトリオでの演奏、最後の３曲がバンドネオン・ソロである。カラシオーロは、ロベルト・シカレー（ピアノ）、ノルベルト・サモンタ（コントラバス）とのトリオ編成で70～80年代に活動していたとされるので、トリオの９曲はその当時の音源であろう。例えば、中南米音楽71年２月号によると、「ラ・カサ・デル・タンゴ（タンゴの家）」で毎金曜日夜９時半に開催されていたリサイタル「今日のブエノスアイレスとの出会い」にこのトリオが登場したとの短信がある。トリオは、ピアノのグリセの効果的な使用なども含む力強いサウンドで、コントラバスの弓奏による対旋律など３者の対位法的な絡みが聴かれるなど、特徴的なスタイルを持ったグループだった。

2007年にはアルバム“Solos de Bandoneón y más …”が発売された。ドラムス入りキンテートでのカラシオーロの公式録音は数少なく、同時代に聴けなかった聴衆にとってその全体像は幻に近い状態であったわけだが、ここでラジオ音源４曲が発掘されて、いささかなりとも渇を癒すことができたのが嬉しかった。このアルバムは、キンテート４曲、バンドネオン・ソロ４曲（うち３曲は上述のダウンロード販売アルバムで既出）、電気ギターのエクトル・オルテガとのデュオ４曲という未発表音源で構成されていたが、いずれも正確な録音年などは明らかでない（キンテートが1960年代の音源であることは確か）。

キンテートに関しては、メンバーは上述の通りで、ラジオ･エル･ムンド音源（バイオリンはアグリ）２曲と、ラジオ・スプレンディー音源（バイオリンはバルサック）２曲を収録。エル・ムンド音源は、エドゥアルド･マルコーの歌入りで“Nieblas del Riachuelo”、“Duerme mi amor”を取り上げており、アグリの圧倒的な存在感のもと、カラシオーロの独自の感覚に溢れた編曲が非常に新鮮である。スプレンディー音源は、ピアソラの“Lo que vendrá”、カラシオーロ自作“Claudia”と現代のインスト曲を取り上げているだけにカラシオーロの面目躍如な内容。バンドネオン・ソロによる４曲は、和声的な深さを引き出すアレンジで深く沈潜する内容。オルテガとのデュオも独自の味わい。

なお、西村秀人さんの記事『タンゴ愛好団体「ヘンテ・デ・タンゴ」の演奏プログラムから』（TANGUEANDO EN JAPÓN No. 21（2008）に掲載）には、60年代当時の演奏会でのカラシオーロのプログラムも紹介されており非常に興味深い。1966年11月９日にはキンテート・デ・タンゴ・コンテンポラネオ（バイオリンはバルサック、歌はエドゥアルド・ソレール）で８曲を演奏、1967年６月14日には当初予定されていたキンテートでの演奏がバンドネオン・ソロに変更になって３曲を演奏したとのこと。自作曲を中核に据えた当時の活動の様子を確認できるので、是非とも本稿と合わせて見直していただきたい。なお、この時の演奏曲にエクトル・オルテガ作品が含まれているので、この当時から彼とは繋がりがあったのかもしれない（当時のオルテガはロス・シエテ・デル・タンゴのメン

バーだった)。

03. 60年代末以降の歌手伴奏などの録音

ここでは、カラシオーロが60年代末以降に歌手伴奏などで編曲・指揮を担当した録音を中心に触れていくことにする。

シングル盤“HUGO GABRIEL（canto）Con el Conjunto de OSVALDO AVENA：DESDE EL TABLÓN / ¡QUÉ SENSACIÓN!”は、特に60年代以降に新しいタンゴの歌の作曲者、ギタリストとして活躍したオスバルド・アベーナがエクトル・ネグロとオメロ・エスポシトの歌詞を得て作曲したサッカー関連のタンゴ２曲を収録している。1969年冬（７～８月頃？）の録音。伴奏楽団の名義はオスバルド・アベーナとなっているのだが、演奏メンバーは、Guitarra：Osvaldo Avena - Piano：Cicarrelli – Percusión：Correale – Contrabajo：Samonta – Violines：Balzack, Arnaiz, Farace, Cavallaro, Bandoneón, Dirección y Arreglos：Alberto Caracciolo（明らかに綴りがおかしいものもそのまま掲載した）とクレジットされており、実態はカラシオーロのキンテートに弦を増強した編成にアベーナのギターをフィーチャーしたもの。なお、このメトロポリス・レーベルのセリエ・カンシオネーラの１枚目にあたる“REYNALDO MARTÍN（CANTO）/ OSVALDO AVENA（CUARTETO）UN LOBO MÁS / ESTA CIUDAD”（sello DISCOS METROPOLIS Serie Cancionera MCS-001［SIMPLE］P. 1968?）は、アベーナとネグロの共作タンゴ２曲を収録しているのだが、その伴奏の四重奏団のメンバーが不詳である。カラシオーロが絡んでいるという可能性もあるかもしれない。この四重奏団のメンバーについてご存知の方がいらっしゃいましたらどうかご教示ください。

1970年にはクラウディオ・ベルジェの伴奏を大編成楽団で担当してピアソラ＝フェレール作“BALADA PARA UN LOCO”、エラディア・ブラスケス作“DOMINGOS DE BUENOS AIRES”を録音したシングル盤が発売されている。この２曲はカルロス・ガルシーア伴奏が中心のベルジェのアルバム“mi ciudad y mi gente”にも収録された。当時のカラシオーロはオデオン・レーベルで音楽顧問に就任していたはずだが、自身のキンテート４曲とこの２曲以外には表に名前の出た仕事は残していないようで、オデオンとの関係は短期で終了したようだ。「ロコへのバラード」は、鉄琴の使用、バイオリンの独自のオブリガート、和声の新たな付け替えなど創意工夫に溢れる。「ブエノスアイレスの日曜日」も豊かなハーモニーに彩られた編曲であり、カラシオーロのバンドネオンが印象に残る。

1971年にはグラシエラ・スサーナが17歳の終わりに録音したファースト・アルバムの伴奏をパレルモ・トリオと共同で担当している。カラシオーロ指揮の大編成楽団の伴奏による２曲はシングル盤として先行発売された。他に、パレルモ・トリオにカラシオーロのバンドネオンが加わった編成の伴奏４曲、パレルモ・トリオの伴奏４曲、カラシオーロ六重奏団の伴奏２曲から構成され、現代のタンゴ歌曲を中心に取り上げているが、スサーナの歌唱は年齢を超えた迫真の素晴らしさ。カラシオーロの伴奏も特にセステートが現代性に満ちており、同レーベルにアルバムを残したパレルモ・トリオの演奏も滋味に溢れる。現代タンゴ歌謡の歴史に残る名盤と言ってよいだろう。

少し間が開くが、79年に発売されたオスカル・バジェスによるルンファルド詩の朗読にロベルト・グレラ指揮のコンフントが伴奏をつけたアルバムへの参加が次の録音である。素晴らしいメンバーの

コンフントだが、なぜかグレラとしてはやや乱暴な感じを受ける部分もあるのはどうしたことか。

結局、80年にアニバル・アリアス夫人のオルガ・カブレーラのアルバムで２曲の伴奏の編曲・指揮をオルケスタ編成で担当したのが、生前に発売された録音としては最後のものとなったと思われる。なお、同年に、カラシオーロは、ルナ・パークで開催されたオスバルド・プグリエーセ75歳記念のコンサートにオスバルド・タランティーノとの共同指揮の楽団で参加している。

カラシオーロは94年１月31日に75歳で没した。現在では忘れられた存在になってしまっているものの、その高い音楽性はしっかりと再評価しておきたいと思う。

Obras de Alberto Caracciolo：

“A CHILE”（con JOSÉ TEODORO MOUSO），“AMOR EN GRIS”（con PEDRO ORTIZ），“BUENOS AIRES EN　２ｘ４”（con FERNANDO FUENZALIDA），“CHIQUI”（dedicado a su esposa），“CLAUDIA”，“CON RUMBO AL CIELO”（dedicado a su padre），“DOLOR”（con AZUCENA MAIZANI），“ETÉREO”，“MACUMBA”（con JOSÉ TEODORO MOUSO y VÍCTOR LAMANNA），“MILONGA DE UN TIEMPO”（con EDUARDO BRID PAGOLA），“NO LA LLORES BANDONEÓN”（con VÍCTOR LAMANNA y JORGE CALDARA），“NOCHERO Y SOÑADOR”（con VÍCTOR LAMANNA），“PRELUDIO”，“POR AZAR”（con VÍCTOR LAMANNA），“REQUIEM PARA UN GOMIA”（dedicado a Gardel），“TANGOMANIA”，“TEMA DE TANGO EN DO MAYOR”，“TEMA DE TANGO EN RE MENOR”，“TEMA DE TANGO EN SOL MAYOR”，“TEMPLO 59”，etc.

Discografía de Alberto Caracciolo：

V. A.（Aníbal Troilo - Eduardo Rovira - Atilio Stampone - Reynaldo Nichele - Alberto Caracciolo - Héctor Artola）“Círculo de Amigos del Buen Tango”　MICROFON I-54［LP］（P. 1964）

Tema de tango en re menor（Alberto Caracciolo）

Templo 59 - Tango（Alberto Caracciolo）

Bandoneón，Director y arreglador : ALBERTO CARACCIOLO

Violín: ANTONIO AGRI

Piano: ROBERTO CICARE

Contrabajo : RUFINO ARRIOLA

Percusión : JUAN CARLOS MOYANO

“Círculo de Amigos del Buen Tango”　SONY BMG 8869 742704 2［CD］（P. 2008）

ALBERTO CARACCIOLO y su Quinteto

ODEON DTOA 7316［Simple］（P. 1969）
ORGANITO DE LA TARDE - Tango（Cátulo Castillo - José González Castillo）（３ZLD 40251）
CON RUMBO AL CIELO - Tango（Alberto Caracciolo）（３ZLD 40252）

ALBERTO CARACCIOLO y su Quinteto　ODEON 番号不明［Simple］（P. 1969）
CHIQUI - Tango（Alberto Caracciolo）
ETÉREO - Tango（Alberto Caracciolo）

Quinteto añoranzas　DISCOMUNDO 34002［LP］（P. 1970）
Arreglos y Dir. : Alberto Caracciolo
“de ayer… y de siempre”
FAZ A
DON JUAN - Tango（E. Ponzio - R. J. Podestá）、LÁGRIMAS Y SONRISAS - Vals（P. D. y F. J. Gullo）
LA TRAMPERA - Milonga（A. Troilo）、CHAMPAGNE TANGO - Tango（M. G. Aróstegui）
EL AEROPLANO - Vals（P. Datta）、SILUETA PORTEÑA - Milonga（N. L. y J. V. Cúccaro - O. D’Aniello - E. Noli）
FAZ B
RE FA SI - Tango（E. Delfino）、CORAZÓN DE ORO - Vals（（F. Canaro - J. F. Blanco）
CAMPO AFUERA - Milonga（R. Biagi - H. Manzi）、RODRÍGUEZ PEÑA - Tango（V. Greco - J. M. Velich）
PALOMITA BLANCA - Vals（A. Aieta - F. G. Giménez）、
LA PUÑALADA - Milonga（P. Castellanos - E. C. Flores）

V. A.（LOS DEL VIEJO VIZCACHA - PALERMO TRÍO - QUINTETO AÑORANZAS））
“RECORDANDO VALS”DISCOMUNDO 35004［LP］（P. 1970）
CORAZÓN DE ORO - Vals（（F. Canaro - J. F. Blanco）
LÁGRIMAS Y SONRISAS - Vals（P. D. y F. J. Gullo）
PALOMITA BLANCA - Vals（A. Aieta - F. G. Giménez）
EL AEROPLANO - Vals（P. Datta）
（同レーベルのアルバムからのワルツの編集盤）

Alberto Caracciolo “Tangomania”　ダウンロード販売アルバム（P. 2004）
1. Los Mareados、2. Tema de Tango en Re Menor、3. Templo 59、4. Gallo Ciego、5. Desvelo、6. Tierrita、7. El Motivo、8. Chiqui、9. Desde el Alma、10. Por la Vuelta、11. Fuimos、12. La Última Curda
（１- ９ Trio, 10-12 Bandoneón Solo）

Alberto Caracciolo “solos de Bandoneón y más…”UNION 番号なし［CD］（P. 2007）

Quinteto de Tango Contemporáneo, Nieblas del Riachuelo（E. Cadícamo y J. C. Cobián）
Duerme mi amor（H. Giraud y Cholo Hernández），Lo que vendrá（A. Piazzolla）
Claudia（A. Caracciolo），Solos de Bandoneón de Alberto Caracciolo
Mariposa（A. Aieta – y F. García Giménez），Por la vuelta（J. Tinelli y E. Cadícamo）
La última curda（A. Troilo y C. Castillo），Fuimos（J. Dames y H. Manzi）
Duo Caracciolo-Ortega, Adiós Nonino（A. Piazzolla y E. Blázquez）
Mimi Pinsón（A. Roggero y J. Rótulo），Del bajo fondo（O. Tarantino）
El Pollo Ricardo（L. A. Fernández）

HUGO GABRIEL（canto）Con el Conjunto de OSVALDO AVENA
DISCOS METRÓPOLIS Serie Cancionera MCS-003［SIMPLE］（P. 1969）
DESDE EL TABLÓN（Osvaldo Avena – Héctor Negro）
¡QUÉ SENSACIÓN !（Osvaldo Avena – Homero Expósito）
Músicos：Guitarra：Osvaldo Avena - Piano：Cicarrelli – Percusión：Correale – Contrabajo：Samonta – Violines：Balzack, Arnaiz, Farace, Cavallaro, Bandoneón, Dirección y Arreglos：Alberto Caracciolo
（明らかに綴りがおかしいものもそのまま掲載した）

CLAUDIO BERGÉ Con acomp. De Orq. – Dir. : ALBERTO CARACCIOLO
ODEON DTOA 7382［SIMPLE］（P. 1970）
BALADA PARA UN LOCO - Tango（Ástor Piazzolla - Horacio Ferrer）（３ZLD 40949）
DOMINGOS DE BUENOS AIRES - Tango（Eladia Blázquez）（３ZLD 40950）

CLAUDIO BERGÉ “mi ciudad y mi gente”
ODEON LDS-857［LP］（P. 1970）
（14曲収録で、残りの12曲の伴奏はCarlos García指揮のオルケスタ）

GRACIELA SUSANA con acomp. de Orq. - Dir. ALBERTO CARACCIOLO
DISCOMUNDO 12009［SIMPLE］（1970）
CUANDO CAIGAN LAS HOJAS - Tango（Ítalo Curio - Emilio Balcarce）
A MIS MANOS - Milonga Sentida（Julio Camilloni - Alfredo Gobbi）

GRACIELA SUSANA “TANGO DE ESTE TIEMPO”
“EL GORRIÓN DE BUENOS AIRES - Tango de Este Tiempo” DSCOMUNDO 40001［LP］（P. 1971）
FAZ A :
CUANDO CAIGAN LAS HOJAS - Tango（Ítalo Curio - Emilio Balcarce）（１）
ESTAS EN MI CORAZÓN - Tango（Julio Camilloni - Antonio Blanco）（２）
ESTA CIUDAD - Tango（Héctor Negro - Osvaldo Avena）（３）

CHIQUILÍN DE BACHÍN - Vals（Ástor Piazzolla - Horacio Ferrer）（４）
VOLVAMOS A BELÉN Tango（Pedro Sánchez）（２）
NO NOS VEREMOS MÁS - Tango（Federico Silva - Luis Stazo）（３）
FAZ B :
AYER ESCRIBÍ EN EL VIENTO - Tango（F. Silva - L. Stazo）（２）
SEÑOR DE LA AMARGURA - Tango（Zelmar Gueñol - Manuel Sucher）（４）
CONTAME UNA HISTORIA - Tango（E. Blázquez - M. Iaquinandi）（３）
A MIS MANOS - Milonga（J. Camilloni – A. Gobbi）（１）
UN MUNDO NUEVO - Tango（H. Negro - O. Avena）（３）
JUANITO LAGUNA SE BAÑA EN EL RÍO - Tango（H. Herrera - A. N. Castro）（２）
（１）Con acomp. de ALBERTO CARACCIOLO y su orquesta
（２）Con acomp. de ALBERTO CARACCIOLO（Bandoneón）y PALERMO TRÍO（Guitarras）
（３）Con acomp. de PALERMO TRÍO（Guitarras）
（４）Con acomp. de ALBERTO CARACCIOLO y su sexteto

GRACIELA SUSANA“LA VOZ DEL TANGO”VICTOR SWX-7044［LP］（P. 1974）

OSCAR VALLES“Buenos Aires y el lunfardo”RCA CAMDEN CAS-3489［LP］（P. 1979）
Dirección musical y arreglos: Roberto Grela
Acompañaron en este disco a Oscar Valles los músicos Roberto Grela, Roberto Láinez, y Ciro Pérez ,guitarras ; Alberto Caracciolo, bandoneón y Enrique Marchetto, Bajo.
TE LO DIGO POR TU BIEN（Oscar Valles），MI NAIFA（Oscar Valles）
MALANDRÍN ABACANADO（Oscar Valles），LA DIETA（Oscar Valles）
MI BARRIO DE SAN BENITO（Oscar Valles），EL PROGRESO（Oscar Valles）
HACETE UN HOMBRE DE BIEN（Oscar Valles），AGUANTATE CORAZÓN（Oscar Valles）
SANGRE GUERRERA（Oscar Valles），YO SE QUE VIVE EL TANGO（Oscar Valles）

OLGA CABRERA“COMO LAS AVES”GENTE DE TANGO GT - ３［LP］（P. 1985）
EL CORAZÓN AL SUR - Tango（Eladia Blázquez）
DECIME, ¿CÓMO ESTÁ? - Tango（Carmen Guzmán - Mandy）
Arreglos y dirección orquestal : Alberto Caracciolo
grabados el 02/10/80 por :
Violines : Reynaldo Nichele, José Votti, Simón Broitman, Aquiles Aguilar.
Viola : Adrián Pucci. Cello: Daniel Pucci. Piano : Armando Cupo. Contrabajo : Juan Carlos Vallejos.
Bandoneones : Alberto Caracciolo, Daniel Lomuto. Guitarra Criolla : Aníbal Arias.
（12曲収録で、残りの10曲の伴奏はダニエル・ロムート、アニバル・アリアス、ホセ・リベルテーラ、カルロス・ガルシーア、ルイス・スタソ指揮の楽団とアニバル・アリアスのギターが担当）

Los letristas del tango
タンゴ作詞家列伝　第７回

J・デグランディス／C・ベダーニ／E・カディーカモ

J. de Grandis ／ C. Vedani ／ E. Cadícamo

高場 将美
Masami Takaba

ホセ・デグランディス　José de Grandis

最高級のタンゴ名曲（たくさんある）のひとつ『**アムラード**（見捨てられて）Amurado』の作詞者である。ルンファルド（ブエノスアイレスのスラング）を効果的に使った内容は、**コントゥルシ** Pascual Contursi（この記事に前出）の『**わが悲しみの夜** Mi noche triste』に大きな影響を受けている（詩形は、『**マノ・ア・マノ** Mano a mano』などの**セレドーニオ・フローレス**（彼も前出）Celedonio E. Floresのスタイル）。始まりは――

“Campaneo a mi catrera y la encuentro desolada. / Sólo tengo de recuerdo el cuadrito que está ahí, / pilchas viejas, unas flores y mi alma atormentada... / Eso es todo lo que queda desde que se fue de aquí.”

（わたしのベッドに目をやれば、見捨てられて孤独な様子。わたしの持っている思い出は、あそこにある小さな額入りの写真だけ。古いドレスたち、花が何本か、それにわたしの苦しめられている魂……。そんなものだけが、彼女が出て行ってから残っているすべて）。

詩形が変わって、より短いフレーズになる第２部は――

“¡Si me viera! ¡Estoy tan viejo! / ¡Tengo blanca la cabeza! / ¿Será acaso la tristeza / de mi negra soledad? // Debe ser porque me cruzan / tan fuleros berretines / que voy por los cafetines a buscar felicidad.”

（彼女がわたしを見ててくれたら！　わたしはこんなに年をとった！　頭は白い！　それはわたしの黒い孤独の悲しさなのだろうか？　こんなにひどく、やるせない気持ちが押し寄せてくるからに違いない、わたしは場末のカフェを歩き回る、幸せを探し求めて）。

ホセ・デグランディスは、ヴァイオリン奏者で、趣味で作詞をした。1926年ごろ、彼が演奏しているカフェ（楽団リーダーはバンドネオン奏者**エンリケ・ポジェート**Enrique Pollet）に遊びに来たバンドネオン奏者**ペドロ・ラウレンス** Pedro Laurenz に、この歌詞を見せたところ大感激して、ラウレンスがすぐに作曲、そして第２部は先輩のバンドネオン奏者**ペドロ・マフィア** Pedro Maffiaが作曲して、名曲誕生となった。この曲が今日も愛されるのは音楽のすばらしさからだが、それも、この歌詞があったからこそである。

デグランディス（1888年ボエード地区生まれ、1932年没）は、ほかにも、平均レベルの、いい歌詞をいくつか書いている。**ポジェート**作曲の『**わたしの街の街灯** Farolito de mi barrio』、そして、これまで名前の出た音楽家たちの仲間のバンドネオン奏者**アルフレード・デフランコ** Alfredo De Franco作曲『**運を知らせるインコ**（小鳥）Cotorrita de la suerte』など。これらは、**デグランディ**

スが大ファンだった歌手**ガルデール** Carlos Gardelが録音してくれて、後世に残った。

セサル・ベダーニ　César Vedani

この人は、ほんとに、たった１曲の作詞だけで、充実した人生をおくり（これは、わたしの想像）、後世に大きな名前を残した（これは事実）。その１曲は、かなり長期間にわたって、世界でもっとも有名な、多種類のレコードが録音されたタンゴだった（現在のことは知らない）『**アディオス・ムチャーチョス** Adiós muchachos』――『淡き光に』『カミニート』『ラ・クンパルシータ』よりも上位だったそうだ。世界中でこの曲が好きになった人たちのほとんどは、作者の名前は知らなかったけれど。また、ほとんどのレコードは演奏だけで、歌われていなかったけれど。

セサル・ベダーニは、1906年に、ブエノスアイレスのフローレス地区生まれ。将来のことを考えるでもなく、定職もなく、タンゴ界のまわりを浮遊していた若者だったようだ。27年ごろ、夜の街で遊んでいる若者たちが、「じゃあ、さよなら」と仲間に別れるときの挨拶のことばが、タンゴのリズムとメロディになっていると感じて、それをそのまま使って歌詞を作った。彼も遊び終わって帰るときに寄った、フローレス地区のリバダービア大通りにある喫茶店《ラ・ペルラ》のテーブルで、この歌詞を書いた。いっしょにいたピアニストのフーリオ・サンデルス Julio C. Sandersが、即興で曲をつけた。最初の挨拶は、実際のことばのメロディを、やはりそのまま生かしている。

“Adiós, muchachos, compañeros de mi vida, / barra querida de aquellos tiempos. / Me toca a mí hoy emprender la retirada, / debo alejarme de mi buena muchachada. / ... / Se terminaron para mí todas las farras, / mi cuerpo enfermo no resiste más...”

（みんな、さよなら！　わたしの人生の仲間たち、あの時代の仲良し連中。きょうわたしは隠退するときが来た。わたしは、すてきな仲間たちと離れなくてはいけない。（中略）わたしには、すべての宴（うたげ）は終わった。わたしの病んだ体は、もう耐えられない）。

気軽な挨拶から、すぐ悲劇にしてしまうのが、タンゴならではだ。第２部では、母親と、若いお嫁さんといっしょに暮らしていたことが回顧され、

“¿ Se acuerdan que era hermosa, / más bella que una diosa / y que ebrio yo de amor, / le di mi corazón, / mas el Señor, celoso / de sus encantos, / hundiéndome en el llanto / me la llevó ?”

（みんな、覚えているかい？　彼女は美しかった、女神よりもきれいだった。愛に酔って、わたしは彼女に心を捧げた。だが主は、彼女の魅惑をねたんで、わたしから彼女を取り上げてしまった）

この曲は初演が**アグスティーン・マガルディ** Agustín Magaldiだそうだが、**カルロス・ガルデール**がスペインやパリで歌ったことから、全世界で流行するようになった。

ベダーニのほかの歌詞では、ピアニスト・芸能記者のカルロス・サンチェスCarlos Sánchez作曲の『**愛する仲間たち** Barra querida』が、いささかなりとも後世に残った。

でも『アディオス・ムチャーチョス』１曲のメガ・ヒットがあれば、他はいらない。彼はアルゼンチン作詞作曲協会の会長になるほど、大きな名声を得た。タンゴ史上最高の好運！　でも運をつかむ

のも実力のうち。悠々と安定した人生をおくり、1979年にこの世を去ったタンゴ。

エンリーケ・カディーカモ　Enrique Cadícamo

タンゴ作曲家で、人に知られた曲がいちばん多い人だ。芸術についての話で、最高とか最多とか、その他すべて比較することは意味がなく、また有害なことだけれど、彼の場合、このことはまったく事実である。1300曲もつくったそうだ（著作権登録による）。後世にまで残った歌詞は、その３％くらい？　それでもたいへんなことである。

彼のよく知られた歌詞、タンゴの歌のファンならだれでも覚えているような名文句・さわりだけ紹介しても数ページは簡単に埋まってしまう。全曲が名文句の連続というくらい、ことばの達人である。「タンゴの歌詞は長くても15分で作らなければいけない。それ以上考えたら、いい歌詞にはならない」と、思いつき、ひらめきにまかせて歌詞を作った。

エンリーケ・カディーカモは1900年、ブエノスアイレス州の、首都から50キロほど離れた大草原で生まれた。父はイタリア移民で、牧場の重要職（牧童たちの頭）をつとめていた。彼が６才のとき一家は首都に引っ越してきて、フロレスタ地区に住んだ。お金の話はしたくないが、一家は裕福とまではいえないにしても、余裕のあるくらしだったと思われる。彼は、人には言わなかったが、たぶん子どものころから、本式にクラシックのピアノを学んで、音楽知識は人並み以上にあったらしい。ある人が、彼の自宅を訪ねたら、ピアノの上にショパンのむずかしい曲の楽譜が置いてあったそうだ。見栄を張っていたことは確かだが、ほんとに、いちおう弾けたらしい。彼が自分で作曲したタンゴもいくつかある。歌の曲のほかに、昔のタンゴ演奏のスタイルを模倣した、単純だが、古風さが貴重な曲がある。

18才で、政府の教育関係の機関に就職した。公務員は昼間の一定時間事務所にいればあとは自由なので、芸術家に向いている職業だ（？）。彼が一生にもった唯一の定職である。詩人というのは職業ではない。ひとつの生きかただ。カディーカモは後には、映画の脚本を書いたり、監督もしたが、ふつうの人から見れば仕事はせずに、遊んで流れて生きて一生をおくった。100才近くまで（1999年に没）、詩人として生きぬいたのは尊敬に値する。

詩人としては、タンゴと密着した昔（20世紀はじめ）のブエノスアイレスの街と人々をテーマにした詩が、彼ならではのものだ。ふたつの詩集『底辺の町の月 La Luna del Bajo Fondo』（40年出版）と『運んできて、持ち去る風 Viento que Lleva y Trae』（45年）にまとめられている。

最初の作詞は、1925年の『**しゃぼん玉 Pompas de jabón**』――作曲は、ピアニスト、**ロベルト・ゴジェネーチェ Roberto Goyeneche**。彼は肺病もちで、この曲をカルロス・ガルデールが初演録音する前に、26才で亡くなってしまった。

カディーカモは、公務員のくせに（公務員だから？）夜の街の住人となり、ルンファルド（ブエノスアイレス～モンテビデオのスラング）を熟知していた――ただし、詩人だから勝手に自分でつくったことば、解釈をずらした言い回しもある。とにかく、ルンファルドを多用して、皮肉でコミカルな歌詞が、彼の歌詞に人気が出た最初だろう。27年の『**チェ・パプーサ・オイ Che, pausa, oí**』、『**コンパドローン Compadrón**』、29年の『**ム**

ニェーカ・ブラーバ Muñeca brava』。

でも、彼の才能は豊かで、どんなスタイルでも、すてきな歌詞を、５～15分でつくった。ドラマティックで、いかにも「タンゴの詩」だと感じさせるもの、あるいはロマンティックな甘美な歌詞でも、傑作がある。比較はいけないといいながら、わたしのいちばん好きなのは、３曲あり、いずれもガルデールの歌が完璧に表現している。30年の『**ビエハ・レコーバ** Vieja recova』、31年の『**パリに碇を下ろして** Anclao en París』、33年の『**ここにいない恋人** La novia ausente』だ。

ここでは『**ビエハ・レコーバ**』を紹介しよう。タイトルは、ブエノスアイレスの港に近い危ない夜の街の地域名である。

"La otra noche mientras iba caminando como un curda, / tranco a tranco, solo y triste, recorriendo el veredón, / sentí el filo de una pena que en el lado de la zurda / se empeñaba, traicionera, por tajearme el corazón.

Entre harapos lamentables, una pobre limosnera, / sollozando sus desgracias a mi lado se acercó / y al tirarle unas monedas a la vieja pordiosera, / vi que el rostro avergonzado / con las manos se tapó.

（このあいだの夜、わたしは酔っぱらいのように歩きながら、一歩一歩 足を運び、ひとりぼっちで悲しく、歩道づたいに街をめぐっていた――そんなとき、わたしは悩みの刃（やいば）がせまってくるのを感じた。悩みはわたしの胸の中の左のほうで、わたしを裏切って、わたしの心臓に本気で切りつけようとしていた。見るも哀れなボロ服を着て、ひとりのかわいそうな女が ほどこしを求めて、みずからの不幸の数々を嘆きながら、わたしのそばに近づいてきた。そして わたしが数枚のコインをその物乞い女に投げてやったとき、わたしは見た、恥ずかしさでいっぱいの顔を 彼女が両手で覆うのを）。

Vieja recova, / rinconada de su vida, / la encontré vieja y perdida / como una muestra fatal.

La mala suerte / le jugó una carta brava, / se dio vuelta la taba, / la vejez la derrotó.

Vieja recova, / si vieras cuánto dolor.

（古きレコーバ（アーケード通り）、おまえは彼女の人生の最後の片隅。わたしは年老いて見捨てられた彼女を見つけた。宿命の見本として。悪運が彼女におそろしいカードを突きつけた。運命の表と裏が逆転した。古きレコーバ、おまえにわかるだろうか、どれほどの痛みか！）

この曲に、**シアマレーラ**（この記事に次出）がつけた曲も、たいへんすばらしい（この記事では、重要なことなのに作曲家の名前を省略することが多くて失礼します。カディーカモは曲が多いので、スペースが足りなくなるので）。

ロマンティックなものでは、37年の『**めぐり会い** Por la vuelta』がオシャレで、後にできた**カトゥロ・カスティージョ**作詞『**最後のコーヒー** El último café』に大きな影響を与えている。ただし、そのもとはフランスの詩人**エリュアール**にあるのだそうだ。他人の言葉を自分のものに変えてしまうのも詩人の特権だろう（？）。40年代にタンゴの歌詞づくりに新しい語法が登場すると、**カディーカモ**はそれに影響されて、43年に『**ガーラス**（かぎ爪）Garras』をつくった。懐古調は得意中の得意で、40年『**三つ角** Tres Esquinas』、43年『**みんなが踊るように** Pa'que bailen los muchachos』など。作曲家**コビアーン** Juan Carlos Cobián との長い深い交友から生まれた曲は『**ノスタルヒアス** Nostalgias』、『**酔いどれたち** Los mareados』ほか。

現代タンゴ群像（1955～1990） 第7回

ロス・トゥバタンゴ

por 西村秀人

今回はミュージックホール社にまとまった数のアルバムを残しているロス・トゥバタンゴを取りあげてみる。1950年代末にドミンゴ・ルリオのパケ・バイレン・ロス・ムチャーチョス、ビクトル・デ・パスのコンフント・デル・900、パンチート・カオのロス・ムチャーチョス・デ・アンテスらを中心としていわゆる懐旧派コンフントがラジオ、コンフィテリア、レコードに活躍するが、その後もレコードの企画として懐旧派スタイルの制作は続いた。しかし1967年結成のロス・トゥバタンゴはその編成においても、登場のタイミングにおいてもやや異色の存在といえるだろう。

ロス・トゥバタンゴは実際にはクアルテートで、フルート、バンドネオン、ギター、チューバという４人編成である。実際この編成が1900～1910年代に多く存在していたか、という点にはかなり疑問が残る。ブラスバンドによるタンゴの録音にはチューバなどの管バスはもちろん使われていたが、ギター、フルート、バンドネオンという場末の小編成楽団に組み合わせて使われたケースがそんなに多かったとは思えない。その意味では「疑似懐旧派」かもしれないのだが、それ以前のパンチート・カオにしても、パケ・バイレン... にしても、楽器編成こそ1900年代にあったものだが、演奏スタイルはより自由なものだったわけで、それほど目くじら立てることもないだろう。チューバのリズムをベースにする関係でほとんどの曲がハバネラ～ミロンガ調のリズムになり、明るく楽しくダンス用にもイージーリスニングとしても聞きごたえがある。最初のアルバムと考えられるのは以下である。（このグループのレパートリーは無名の古典曲やメンバーの作品なども多いので、今回にかぎり作者名も入れておく）

（A）Music Hall 733 “Tangos del tiempo perdido”（失われた時代のタンゴたち）

（１）El romántico（Arturo de Bassi）（２）Papas calientes（E. Arolas）（３）Dede（Mauricio Montiano）（４）Ciudad de Córdoba – vals（A. Chazarreta）（５）La refalosa – polka（F. Canaro）（６）Recordando el 900（F.Canaro）（７）El once（A divertirse）（Osvaldo Fresedo-Emilio Fresedo）（８）Sacale punta –milonga tangueada（O. Donato-S. Gómez）（９）Yunta brava（A. Villoldo-A. Polito-Carlos Pesce）（10）María Esther –vals（Juan Maglio Pacho-Juan R. Falchi）（11）Mordeme la oreja izquierda（E. M. Alarcón）（12）La cara de la luna（Campoamor）

1968年５月頃の発売と推測される。２、７、12以外はレコードの少ない曲ばかりで、ダリエンソ楽団の名演で知られる１、エドガルド・ドナート楽団の楽しいレコードがあった８、「エル・チョクロ」のビジョルドのもう一つの名曲９、「私の左耳を噛んで」というタイトルの珍しい古典11など古典タ

ンゴファンの溜飲を下げる内容。ジャケットに記されたメンバーは以下の通り。

ギジェルモ・インチャウスティ（バンドネオン） Guillermo Inchausty

ロメオ・ピルーソ（フルート） Romeo Piluso

アルベルト・S. レメルサロ（ギター） Alberto S. Remersaro

ロムロ・アンヘル・ディアス（チューバ） Rómulo Ángel Díaz

メンバーのうち、バンドネオンのインチャウスティは以前アルフレド・ゴビ楽団、アルベルト・マンシオーネ楽団などで活躍、フルートのピルーソは国立交響楽団やマリアーノ・モーレスの大編成オーケストラのメンバーでもあった。ギターのアルベルト・レメルサロはホルヘ・ビダルを初め、リベロ、マウレなど数多くの歌手伴奏を担当してきた名手である。チューバのディアスもピルーソ同様国立交響楽団のメンバーらしい。

以後およそ１年に１枚程度のペースでアルバムを制作していたと推測される。

（B）Music Hall 2035 “Bailonga”

（１）Sacame una película gordito（Ángel Villoldo）
（２）Naipe marcado -milonga tangueada（Ángel Greco）
（３）Luisito（D. Fortunato）（４）Santiago del Estero –vals（Andrés Chazarreta）（５）La biblioteca（Augusto P. Berto）（６）Una noche de garufa（Eduardo Arolas）（７）El 16（Albérico Espátola）（８）Catamarca（Eduardo Arolas）（９）Bailonga –milonga（Mariano Mores）（10）El criollo –tango lancero（Eugenio Alarcón）（11）En el lago de Palermo –polca（Julio De Caro）（12）Pabellón de las rosas –vals（José Felipetti-Ángela M. Felipetti-Antonio Catania）

アローラスの２曲（６と８）、歌のレパートリーとしても知られる1930年代の２以外は珍しい作品が多い。ビジョルド作「太っちょさん、俺の映画を１本撮ってくれ」は俳優・ジャーナリスト・ピアニストで、後にアルゼンチン無声映画の先駆者となったマリオ・ガージョに捧げられた曲。センテナリオ四重奏団やロドルフォ・メデーロスの録音があるアウグスト・ベルト作５も珍しい。1913年の「エル13」のヒットによって、1925年まで毎年数字のタンゴを発表したアルベリコ・スパトラの７「エル16」もスタイルに合っている。10は前作「私の左耳...」と同じくタンゴ初期に多数の曲を出版したエウヘニオ・（デ・）アラルコンの作品。

（C）Music Hall 2071 “En lo de Hansen”（1970）

（１）La cumparsita（M. Rodríguez-P. Contursi-E. Maroni）（２）Porteña linda –milonga tangueada（Edgardo Donato-H. Sanguinetti）（３）Bar El Popular（Alfredo Bevilacqua）（４）Tubatangueando（Guillermo Faustino Inchausty）（５）La correntada（José Martínez）（６）Francia –vals（Octavio Barbero-Carlos Pesca）（７）El pensamiento（José Martínez-Francisco García Jiménez）（８）El periodista（Augusto P. Berto）（９）Recuerdos de la pampa（Alfredo Bevilacqua）（10）A punta y taco（José Carli）（11）El pinchazo（Ángel Villoldo）（12）La cabeza del

italiano（Francisco Bastard）

１「クンパル」以外はなかなか玄人好みの選曲で、ベビラクアの珍しい作品２篇（３、９）が素晴らしく、他にもホセ・マルティネス作品２曲あるが、５の方は他にレコードはないかもしれない。ベルト作「新聞記者」は、前作の「図書館」同様ベルトの知られざる名曲。最後に収録されたタンゴ歌曲の初期作品12のインスト演奏もなかなか珍しい。古典風の新作も含まれており、４はリーダーのインチャウスティの作品、10はオーケストラ編曲で著名になったホセ・カルリの作品。

（D）Music Hall 2161 “Tubatangueando en el Palais De Glace”（1971）

（１）El cuzquito（Vicente Greco-José Arolas）（２）Mi esclava（Juan Rodríguez）（３）Pura sangre（Adolfo Rosquellas）（４）Platina –milonga（Guillermo F.Inchausty）（５）El verde（Carlos Minotti-Antonio Polito）（６）Un aplauso（Antonio Polito）（７）Zorro gris（Rafael Tuegols-F. García Jiménez）（８）Alfredo（Humberto Canaro）（９）Qué me contás Guillermo（José Carli）（10）Amelia –vals（Julio De Caro）（11）Palospavos（Miguel La Salvia）（12）Alma de bohemio（Roberto Firpo-Juan A. Caruso）

ロベルト・フィルポ四重奏団／五重奏団の演奏で知られるビセンテ・グレコの名曲１が最高の出来で、1950年代にシリアコ・オルティス六重奏団の名演があった５も素晴らしい。フィルポの代表作12は原曲のイメージとは少々異なるが面白い。1927年に北米に移住し、デッカ・レーベルに「パンチョ」の名でタンゴやラテンのアルバムを多数残した才人アドルフォ・ロスケージャス作３も珍しいレパートリーだ。７「銀狐」は1990年代のタンゴ・ダンス復活の頃から、ダンスショウやミロンガで人気の録音となった。今回もインチャウスティ作４、ホセ・カルリ作９と新作も含んでいる。

ライナーによれば、このアルバムでリーダー以外のメンバーは交替している。

ギジェルモ・インチャウスティ（バンドネオン）Guillermo Inchausty

フランシスコ・ミリティチ（フルート）Francisco Militich

アベル・テリリ（ギター）Abel Terrilli

アントニオ・ロドリゲス（チューバ）Antonio Rodríguez

（写真で判断する限り、ギターのテリリはもうひとつ前のアルバム（C）から交替したようだ）

ここで脱退したメンバーのうち、フルートのピルーソとチューバのディアスは1972年、映画「ウン・グアポ・デル・900」出演のため、バンドネオンのトト・ロドリゲスと組んでまったく同編成のロス・グアポス・デル・900というクアルテートを作り、タンゲリーアのビエホ・アルマセンに長く出演、1975年にアルバムGlobal GSLP-10975 “Tangos para recordar” と数曲の録音を残した。

（E）Music Hall 2194 “Con tuba pero con onda”

（1）Nueve de Julio（José Luis Padula-Eugenio Cárdenas-Lito Bayaldo）（2）Caminito（J. de Dios Filiberto-G. Coria Peñaloza）（3）T. B. C.（Edgardo Donato-Víctor Soliño-Roberto Fontaina）（4）Salón 25（Felipe Villa）（5）Corrales viejos –milonga（Anselmo Aieta-Antonio Radicci-Francisco Laino）（6）A media luz（Edgardo Donato-Carlos César Lenzi）（7）Julián（Edgardo Donato-José Panizza）（8）Felicia（Enrique Saborido-Carlos M. Pacheco）（9）A mi madre –vals（Francisco Peña）（10）Ricardo amigazo –tango milonga（Guillermo F.Inchausty）（11）El pañuelito（J. de Dios Filiberto-G. Coria Peñaloza）（12）Cap Polonio（Adolfo Rosquellas）

それまでのアルバムと異なり、ぐっと有名曲が増えた内容。アンセルモ・アイエタ作ミロンガ５、前作にも１曲収録されていたロスケージャス作12もいい感じ。もともと歌曲であるレパートリーが２、３、６、７、11と増えたが、３や11はこのグループ独自の味付けになっていて面白い。

（F）Music Hall 2296 “Con tuba y rancho es la cosa”（1971）

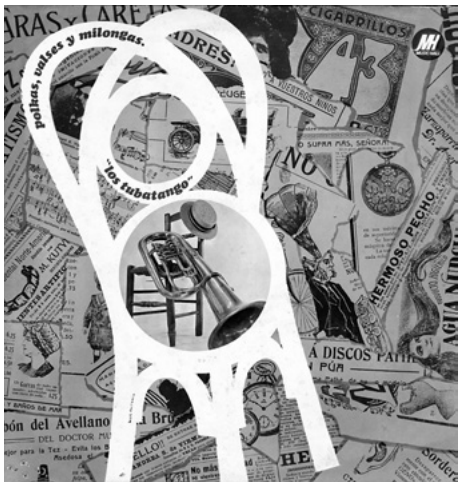
（1）Ivette（Costa Rocca-Pascual Contursi）（2）El cencerro（José Martínez-Francisco Lío）（3）２ x ５（Dos por cinco）–polca（Guillermo F.Inchausty）（4）“23”contra la yeta（Albérico Spátola）（5）A Don Damián（José Carli-Enrique Cena）（6）Don Esteban（Augusto P. Berto-Carlos Keller）（7）El arroyito（Samuel Castriota-Celedonio Esteban Flores）（8）Almagro（A. Timarni-Vicente San Lorenzo）（9）El soplete（José Carli）（10）Ilusión de mi vida –vals（Feliciano Brunelli-Nolo López）（11）Piritiflautico（Felipe Villa-Guillermo Inchausty）（12）Temblemos con la patota（Orfeo Giúdice）

わりと有名な古典タンゴは２、６ぐらいで、もともと歌曲である１、８がかえってこのグループらしい雰囲気になっているのが面白い。４は数字シリーズで有名なアルベリコ・スパトラの「23」で、まず演奏されないレパートリー。ダリエンソなどの演奏で知られる７もなかなかの名曲。リーダーと関係者の古典風新作が増えてきている。

（G）Music Hall 2372 “Polkas, valses y milongas”（1972）

（1）Recordándote –vals（Gerardo Metallo）（2）Fogón argentino –ranchera（Rodolfo De Forte-José Dames）（3）Bien polkeada –polka（Juan Cruz）（4）El esquinazo –milonga（Ángel G. Villoldo-Carlos Pesce-Antonio Polito）（5）Vibraciones del alma –vals（Francisco Canaro）（6）La charlatana –mazurca ranchera（Juan De Dios Filiberto-Alberto Vacarezza）（7）Todo el

mundo a divertirse –polka tangueada（Feliciano Brunelli）（８）Mi china rencorosa –ranchera（Lilo Yubero-Ricardo Souto-Rodolfo De Forte）（９）Sueño de juventud –vals（Enrique Santos Discépolo）（10）Juguetear –polka（Abel Domingo Olmedo）（11）La pastelera –ranchera（Francisco Brancatti-Rafael Rossi）（12）Many Haydeé –vals（Guillermo Francisco Inchausty）（13）El porteñito –milonga（Ángel G. Villoldo-Carlos Pesce-Antonio Polito）（14）Muchachas…yo sé tocar –ranchera（Rodolfo Leoni-Felipe Villa）



タンゴはお休みで、ポルカ、ワルツ、ランチェラ、ミロンガ（とその派生形）の特集。有名な曲はビジョルドのミロンガ２曲（４、13)、メタージョ作ワルツ１、ディセポロ作ワルツ９、フランシスコ・カナロ作ワルツ５といったところだが、フアン・デ・ディオス・フィリベルト作ランチェラ６とか、アコーディオン奏者フェリシアーノ・ブルネリ作ポルカ・タンゲアーダ７、ブルネリと同世代のアコーディオン奏者ロドルフォ・レオーニ作ランチェラ14など興味深い曲目である。

（H）Music Hall 2411 “Cuarteto de tango”（1973/74）

（１）El 13（Ángel Villoldo-Albérico Spátola）（２）Antañero（Jorge Dragone）（３）Alma en pena（Anselmo Aieta-Francisco García Jiménez）（４）Pebeta sin nombre –vals（Guillermo Inchausty）（５）La trampera –milonga（Aníbal Troilo）（６）Bailarín de San Telmo（Orlando Calautti-Américo Cardinale）（７）Bien trajeado（Felipe Villa-Osvaldo Evaristo Bruso）（８）Racing Club（Vicente Greco）（９）Bien añejo（Juan Cruz-Armando Lacava）（10）El malevo（Julio De Caro-Mario Castro）（11）Tú, siempre, tú –vals（José Antonio Orlando）（12）Cuarteto de tango（Rodolfo De Forte-Guillermo Inchausty-Leopoldo Díaz Vélez）（13）No mezquines el cutis al vapolizador（Orfeo D.Giúdice）（14）Por los palos（Juan Cruz-Lilo Yubero-Rodolfo De Forte）

アルベリコ・スパトラ作品は「16」「23」に引き続き、ようやく本命「13」が登場（１）。この他の古典タンゴはビセンテ・グレコ作８のみ。歌曲の３は意外にもスタイルにピッタリ。フリオ・デ・カロの10もわりと珍しいレパートリーだ。あとトロイロの定番ミロンガ５をのぞくと、ほとんどリーダーと関係者の新作のようだ。このグループに多くの曲を提供しているロドルフォ・デ・フォルテ（ロドルフォ・トスカーノ）はこの時期他の小編成グループにも多数の古典風タンゴやダンス音楽の作品を提供しており、「フイモス」「トゥ」「海の悲しみ」などで知られるホセ・ダメスとの共作も多い。６の作者オルランド・カラウティはフロリンド・サッソーネ楽団で来日したことがあり、クアルテート・コルテ・イ・ケブラーダを率いたバンドネオン奏者でもある。共作者のアメリコ・カルディナーレもダンス音楽系のレコードをたくさん制作したバンドネオン奏者。レパートリーは当初の軸からずれてきた感じだが、楽しいスタイルはそのまま。

（I）Music Hall 2444 “Viento en popa”（1974）

（１）Viento en popa（Rosendo Mendizábal-Juan Porteño）
（２）Paciencia（Juan D’Arienzo-Francisco Gorrindo）
（３）Tamaño baño –milonga（Rodolfo Toscano-Guillermo Inchausty）（４）A Don Lalo Bello（Teófilo Orlando-Osvaldo Bruno-Francisco de Lillo）（５）El despiole –polka（Juan Cruz-Felipe Villa-Ignacio Rugnone）（６）Rodríguez Peña（Vicente Greco）（７）El oriental（Donato Racciatti）（８）Si te perdés chiflame（Sandalio Gómez-Osvaldo Donato）（９）La huella（M. Aníbal Villanueva-Enrique Cadícamo）（10）La puñalada –milonga（Pintín Castellanos-Celedonio Esteban Flores）（11）Don Fidel（Armando Lacava-Juan Cruz）（12）Tus ojos me embelesan –vals（Gerardo Metallo）（13）As de ases（Rodolfo De Forte-Guillermo Inchausty）（14）Compás orillero（Jorge Dragone-M. Pardo）

メンディサバルの古典１、グレコの名曲６が目立つが、８、９など珍しいレパートリーもあるし、例によって歌曲２が結構スタイルにはまっているのが不思議。４は日本にフアン・カナロ楽団とやってきたステージダンスのパイオニアの１人、フリア＆ラロ・ベジョのラロに捧げたタンゴ。ピンティン・カステジャーノスのミロンガ10、ドナート・ラチアッティの７などこのグループ向きのレパートリーも多い。

ロス・トゥバタンゴの最後のレコードはこれではないかと思うが、ディスコグラフィーはなく、あくまで西村の所有データに基づいたものなので、これ以外のレコードが存在する可能性はあるので、その点はご留意いただきたい。単独の日本盤としては、（A）から（E）の５枚から有名曲を中心に14曲を選んだステレオのベスト盤、キング SR633「アルゼンチン・タンゴの魅力　ロス・トゥーバタンゴのすべて」が出ていた。

（J）KING SR 633 “Los Tubatango Best Album”

（１）La cumparsita （２）Caminito （３）Felicia （４）Francia -vals （５）Julián （６）Catamarca （７）El once （８）A media luz （９）El pañuelito （10）Alma de bohemio （11）El pensamiento （12）Zorro gris （13）Una noche de garufa （14）Nueve de julio

また同時期に、こちらのベスト盤には収録されなかったアルゼンチン盤（D）収録のEl cuzquitoがキングSR645「タンゴへのいざない　―ソロからオルケスタまで―」というオムニバスLPに収録されていた。

アルゼンチンでも編集盤が出ており、私の手元にあるのは以下の２点。

（K）Music Hall 2627 “Del tiempo de antes”（1978）

（１）El cencerro （２）Bar El Popular（Alfredo Bevilacqua）（３）Francia –vals （４）Felicia （５）Una noche de garufa （６）Papas calientes （７）El once （８）Almagro （９）Zorro gris （10）El porteñito （11）Vibraciones del alma –vals （12）Rodríguez Peña （13）La puñalada

（14）Racing Club

（L）Music Hall 90981 “Tangos, valses y milongas”（1980）

（１）Julián （２）Francia –vals （３）El esquinazo –milonga （４）Zorro gris （５）Pabellón de las rosas –vals （６）Corrales viejos –milonga （７）El once （８）Nueve de julio （９）Ciudad de Córdoba –vals （10）La puñalada –milonga （11）Felicia （12）Santiago del Estero –vals （13）La trampera –milonga （14）Rodríguez Peña

CD時代に入ってだいぶ時間がたつが、ロス・トゥバタンゴの録音をまとめてCD化したものは以下の北米盤１枚とその短縮版のアルゼンチン盤だけのようだ。

（M）Music Hall MH10044- 2 “Una noche de garufa”（1991）

（１）La cumparsita （２）Zorro gris （３）Alma de bohemio （４）Naipe marcado （５）Pabellón de las rosas （６）Una nohce de garufa （７）Rodríguez Peña （８）La puñalada （９）Santiago del Estero （10）Nueve de julio （11）Caminito （12）El esquinazo （13）Francia （14）Julián （15）El pañuelito （16）T.B.C. （17）El porteñito （18）Ilusión de mi vida （19）Ivette （20）El cencerro （21）Almagro （22）La trampera （23）Vibraciones del alma

アルゼンチン盤はこのCDの１から16までの16曲を収録した Music Hall 051752 “Una noche de garufa” で、1994年に出ている。

数ある「疑似古典」グループの中でも寿命が長く、類似グループも登場、現代のミロンガでも人気があるようだし、意外と親しまれるサウンドになっている点が興味深い。（その割にCD化されていないが）このグループの復活を意図して2006年・2011年にアルバムを発表した「ラ・トゥバタンゴ」の登場もこのスタイルの根強い人気を裏付けている。

〈アーティストの足跡（2）〉

アダ・ファルコン

“魅惑、情熱　そして…ミステリアス”

“SEDUCTORA, PASIONAL Y…MISTERIOSA”

LOS GRANDES DEL TANGO誌（1991年 No.24）

著：JORGE PALACIO
訳と編集：弓田 綾子

極めて競争の激しい1920、30、40年代における、ドラマチックにタンゴを表現する様式を持つ国内のカンシオン歌手の中で、アダ・ファルコンは本格的なドラマチックスタイルのカンシオン歌手であった。

ロシータ・キロガ、ティタ・メレーロ、アスセナ・マイサニ、ソフィア・ボサン、およびメルセデス・シモーネは、そのスタイルで売り出した歌手たちであったことは忘れてはならない。しかし、アダ・ファルコンは彼女たちの中でも、抜きん出て随一であったことは、メゾ・ソプラノの声と美貌である。

情熱の歌姫アダ・ファルコンは美貌の三姉妹（姉の女優アマンダと妹の歌手アデルマ）の二番目として、1905年8月17日ブエノス・アイレスで生まれた。三人の中でアダが最も人気があったことは、疑いの余地はない。1916年11歳の時、アポロ劇場で子供の劇団員として活動を始めた。“おませな女の子”と言われ皆に可愛がられた。タンゴを歌うのではなく“LA JOYITA ARGENTINA（アルゼンチンの小さな宝石）”の芸名で、スペインの短い歌曲（tonadilla）を歌っていた。

そして1919年には、リベルタ・ラマルケと同じようにトーキー映画「EL FESTÍN DE LOS CARANCHOS（ふくろうたちの祝宴）」にデビューした。妹のアデルマと男優ホセ・カサマジョールも一緒だった。

1925年アダ・ファルコンはビクターレコードで初録音した。オスバルド・フレセドのオルケスタで「ORO Y SEDA（金と絹）」、「POBRE CHICA（哀れな娘）」、「CAQUIVANA（尻軽女）」、「RISAS DE CABARET（キャバレーのさざめき）」の４曲であった。その後さらに録音を行ったが、オデオン・レコードのためのものであった。エンリケ・デルフィーノ、エクトル・スタンポーニ楽団、フランシスコ・カナロ楽団の伴奏で歌い録音をした。

1929年頃になるとラジオが歌手たちの登竜門となり、憧れでもあった。ロシータ・キロガ、アスセナ・マイサニ、ソフィア・ボサン、メルセデス・シモーネら女性歌手たちが人気を博していた。そんな中アダ・ファルコンは全ての歌手の頂点に立っていたため、彼女の美貌と美声は当時の映画関係者の目に留まらないはずはなかった。

1934年、アダ・ファルコンに映画“ÍDOLOS DE LA RADIO（ラジオのアイドルたち）”への出演依頼があった。1930年のカルロス・ガルデルの有名な一連の短編映画を撮ったエドルアルド・モレラの監督の作品であった。ポスターにはアダ・ファルコンとイグナシオ・コルシーニ、オリンダ・ボサン、ティタ・メレーロ、ティト・ルシアルド、ホセ・ラミーレス、そして特別出演ドリータ・ダビス、広

アダ・ファルコンとフランシスコ・ロムート

報はパブロ・オスヴァルド・バージェ、オルケスタはフランシスコ・カナロとドン・ディーン、と錚々たる名が連ねられていた。

歌に映画にと人気絶頂の1930年から1935年の間に、なんとアダ・ファルコンは月7,000ペソも稼いでいたのである。お陰でPalermo chico（パレルモ・チーコ＝カナロの住居に極めて近かった…）に三階建ての家を持ち、ガレージには二台以上の車、宝石、毛皮を持ち、さらに、ロシア産のグレイハウンド犬を飼い、贅沢三昧の生活をしていた。だが、どうしたことかその頃から彼女に奇行が目立つようになった。突然皆の前から姿を消したり、契約を交わしておきながら後になって知らなかったと云ったり、家に閉じ籠ったりと、当時のゴシップ記事の種となった。優れたカンシオン歌手アダ・ファルコンが仕事を離れてからの奇行は多々あった。そして、アダ・ファルコンは誰にも告げずに自らの芸能活動を中止し、姿を消した。なぜやめたのか調べても今日までその理由が分からない。最高の歌い手として地歩を築いていた歌手の、まったく理解できない行動であった。

当時はカナロとの確執など色々な憶測が飛び交ったがその本当の理由は今もって誰にも分らない。だが、それらのことを新聞記者のエステーラ・ドス・サントスは次のように書いている。

うわさによると、アダ・ファルコンは、誤って神秘主義の信仰に入り洗脳されてしまったようだ。家に数週間閉じ籠っていた後、全身黒ずくめの衣服に白の（ターバン風の）婦人帽と白手袋の身なりでポンページャの教会まで行き、ひざまずいて教会に入り、跪いたまま教会から出てきた。そしてアダ・ファルコンは聖像に向かって大声で話しかけ、応答か天啓を待っているかのようにその場を動こうとはしなかった。やがて彼女は尼僧になり修道院に移り住んだと云われたが、実際には彼女は尼でなく修道会の第三会員で母親と一緒に小さな家にひっそりと住み、質素な衣食をすること、華美な催し物など避けることを課せられた生活をさせられていた。全てを捨てた生活とは言え最低限の出費はあり、そのためにかつての贅沢品の残りものを少しずつ隣近所に売って暮らしを立てていた。

そして、歌手時代ほとんど規律を守らなかったアダ・ファルコンだったが、几帳面に宗教の規律は守っていた。夜明けと共に起床しバスに乗り、コルドバ市のある修道院に集まり、祈り、瞑想し、聖書を読んでいたりした。

この35年間全てを捨て、小さな部屋に住み、調理器具は灯油の加熱器を使い、二組のテーブルセット（母親と一緒に住んでいるので、母親は華やかな年月もこの痛ましい隠遁生活も共にしていた）で食事をしていた。

アダ・ファルコンの住んでいる部屋には、“家族は別荘に住んでいます”との看板が掛けてあり、あたかも彼女の大邸宅は遠くにあるように見栄をはっていた。実際にはその部屋に住んでいるのに、いつも窓を閉めていた。

フランシスコ・カナロとアダ・ファルコン

そんな彼女のことを世間の人たちはいつしか忘れ去っていった。特に1940年代以降、大衆の目は次第に別の女性歌手たちに向けられていき、オルケスタの歌手たちに定着していった。アスセナ・マイサニ、リベルタ・ラマルケ、メルセデス・シモーネ、次いでフィオレンティーノ、ロベルト・ルフィーノ、アルベルト・ポデスター、ラウール・ベロン達であった。

年月が過ぎ去り、1989年のある日突然アダ・ファルコンがブエノス・アイレスに来た。だが、かつて録音をしたレコード会社は、彼女に対してけんもほろろだった。それは当然で、1935年のあの魅惑のアダ・ファルコンではなかったからだ。テレビ局は、タンゴ・プログラムで彼女を紹介しようと大変に気を遣ったが、彼女は“定番の出演者として契約するならよいが…、でなければお断りです。好奇心で一回だけ私を見せるだけなら嫌です。”と言った。魅惑的な美貌とメゾ・ソプラノの声で情熱的な歌姫とまでいわれ、1920年～30年代の本格的なドラマチックスタイルの歌手として脚光を浴びていたアダ・ファルコンの、これがせめてもの最後のプライドだったのかも知れない。

さらにこんな悲しい出来ごともあった。

ある晩のこと、10時にアダ・ファルコンはかつての友であったティタ・メレーロの住まいまで行った。インターフォンで来訪を告げると、ティタ・メレーロはまったく本物のアダ・ファルコンとは思わず、彼女を出迎えなかった。何故ならティタ・メレーロはアダ・ファルコンを名乗った女強盗かと思い、追い返してしまったのである。彼女を襲うのではないかと思ったからである…。

アダ・ファルコンは、かつての華やかで輝かしかった時代と現実の落差を改めて知り、落胆したまま第二の故郷コルドバに帰って行った…。そう、誰の目にも留まらぬままに…。

（注：2002年4月1日アダ・ファルコン没＝訳者）

＝＝

＜フランシスコ・カナロ楽団のCDが発売されました＞

オーディオ・パークより『フランシスコ・カナロ楽団「黄金の時代」』というタイトルの２枚組CDが発売されました。内容はSPコレクターとして著名であった故岩崎永一氏の秘蔵のコレクションから1926年～1927年の名演奏を40曲集めたもので、大変密度の濃い内容になっています。CD番号はAPCD－6512です。皆様のコレクションに加えることをお勧めします。

（編集部）

シリーズ・資料再見（5）

私のカミニート

高橋 忠雄

（出処：「中南米音楽」誌、昭和54年1月号から転載）

日本のタンゴ発祥地　喫茶「マド」

日本に帰って（*）１か月はなにやかや、それこそヤボ用で過ぎてしまった。一段落したので、そろそろ昔懐かしい所に出かけ始めたのだが、やはりタンゴ関係では新宿の「マド」であろう。ここで「マド」のお話を少ししておく必要があると思う。

新宿もかなり変わってしまったが、駅の正面にある二幸を右に行った所、たしか角が銀行だと思ったが、この角から少し下るようになった路地といってよい細い道があり、この道を下って行くと四～五軒めの右側が、タンゴ喫茶「マド」であった。上の方に丸い看板があって、真ん中に「マド」と書いてあり、これをとりまくように横文字で、アルゼンチン・タンゴ・ディレクトール・カネガエとしてあった。喫茶店もこの辺には少なくないが、主人の名、つまり鐘ヶ江を堂々と看板に出した所はまずなかったと思う。口の悪い人が、ディレクトール（支配人）はカネガネーのかといって笑ったこともあった。

ところでこの「マド」のことをここに取り上げたのは、当時、東京でただ一軒のタンゴ専門店であるということよりももっともっと重要なことは、お客の半数がタンゴの専門家で、その人たちがここでタンゴを聴き、ここでタンゴを勉強したということだった。バンドネオン、ピアノ、クラリネット、その他いろいろな楽器をこなした高橋孝太郎氏、クラシックの方にいってしまったが、クラリネットの坂口新（あらた）氏や、ベースの青島氏、今の東京キューバン・ボーイズのリーダー見砂直照（みさごただあき）氏、その他およそタンゴ演奏でメシを食っている人たちで「マド」を知らない人はなかったろう。「マド」は、日本というか、少なくも東京のタンゴ発祥の所であり、ここでタンゴに魅せられ、タンゴのプロやフブノになった人も随分あったと思う。日本のタンゴ界に尽くした鐘ヶ江ディレクターの功績は大きいものがある。

その後鐘ヶ江氏は「マド」をやめて、実業界に入ってしまわれたが、私が海外へ行く前、また帰ってきてから二～三年は「マド」のゴールデン・エージだったと思う。

高山正彦氏との出会い

帰国後初めて「マド」へ行った時だったか、それとも二～三回あとだったか忘れたが、鐘ヶ江氏から、この方もタンゴ・ファンの一人ですといって紹介されたのが、高山正彦氏であった。そしてお話をしましょうといって一緒に新宿三丁目に近い喫茶店に入った。少なくともこの時は「マド」でなかったことはたしかである。席について話がはじまると、私は高山氏からたてつづけの質問をうけた。そしてこの時私が驚いたのは、その質問内容が一般のタンゴ・ファンとまったく違っていたことである。

タンゴの音楽家はブエノスアイレスでどの程度の社会的地位にあるのか、彼らの収入はどのくらい

（＊）編集部注：この文章は高橋氏が「中南米音楽」誌に続き物として毎号書かれていた文章の１つである。「日本に帰って」とは恐らく氏が昭和12年のヨーロッパと南米の周遊旅行から帰ったことの意味であろう。

なのか、ブエノスの一般人はタンゴの音楽家をどんな目で見ているのか、尊敬されているのか、それとも白眼視されているのか、等々。

私はその時、この人はそんじょそこらのタンゴ・ファンとは毛並みが違うと思った。タンゴ・ファンとひとくちにいうが、こんな人もいるのだナー、と驚きもし、尊敬もし、あきれもした。それはともかく、これがのちのタンゴの神様というか、タンゴ一辺倒の高山氏との初対面であった。

月日のたつのは速いものである。77年高山氏は私の家内と同じ日に亡くなられた。妻をなくし、同好の友をなくした淋しさはひとしおであった。しかしここでへこたれていてはと、一人頑張ってはいるものの、何か気が抜けてしまったような気持ちはどうにもならないのである。

レヴューの世界に足をつっこむ

私と小学校時代の同級生に益田定信という男がいた。父親は元男爵の益田太郎氏というより、帝劇の女優劇華やかなりしころ、益田太郎冠者と称して多くの喜劇を書いた人で、今日でもその作品が上演されることがあり「ラブ哲学」や「女天下」は今みても面白い。また時代を歌った小唄を作ったりして、新橋の浅井丸子という芸者にうたわせたり、実にしゃれた通人ぶりをみせた得がたい人であった。もっとも益田氏の作品に対しては久保田万太郎氏あたりは大分悪口を言っていたが、とにかくあれほど時代の機微を先取りした作者はいなかった。定信君はその末っ子であり、兄の義信氏は洋画の方面で有名である。

その定信君もジャズ・ピアノがうまくいろいろな才能があったが、そのころ大劇場は映画と実演の二本立てが流行していた。そして日劇（日本劇場）ではすでにダンシング・チームができていたが、これに対抗して松竹でも実演をやることになり、当時は松竹のものだった帝劇を本拠として、男も入れたダンシング・チームを作ったのである。この第一回の公演には、大阪から秋月と笠置の二大スターが応援出演し、なかなか豪華なものであった。音楽は服部良一氏が担当したのだが、この時益田君から、今度松竹でこんなものをはじめたので僕もちょっと関係している。舞台稽古をやるから見に来ないかとさそわれた。面白そうなので、ひと晩徹夜でこの舞台稽古につきあったのだが、私はこんなことが好きで、この稽古に大いに興味を持ったのである。

そこで宝塚の舞台稽古も見たくなり、幸いなことに、宝塚少女劇場（当時の言葉）の創立者であった小林一三氏とは父がごく親しいおつきあいをしていたので小林のおじさんに宝塚の舞台稽古をぜひ見せてもらいたいとたのんだのである。小林のおじさんは、いいよ、いいよ、私が話しておくからとひきうけてくださったので楽しみに待っていた。

それからしばらくして、当時日劇の裏方の支配人であった秦豊吉氏から電話があり、私の家にくるというので、これは宝塚の舞台稽古をみせてもらえるのだろうと喜んだのである。

ところがどうだろう。秦氏が私宅に来られて話をしているうちに、私に日劇で中南米音楽を中心にしたレヴューを作ってくれ、ということになったのである。私は中南米音楽が好きで、はるばるブエノスアイレスまで行って来た。またソシアル・ダンスが好きで随分踊ったものである。しかしステージの仕事をしたことは一度もない。もちろんステージでの踊りを見て来たことは前にも書いた通りだが、舞台の仕事をした経験は全然ない。とてもできません、とことわったのだが強引に作ることにさせられてしまった。まったくもって自分でもこんなことをたのまれようとは夢にも思わなかったことであり、舞台稽古は自分の作ったものを見るはめになってしまったのである。

秦豊吉氏のことなど

ここで秦豊吉氏について一言しておこう。秦氏は三菱の社員としてドイツにも長くおられたが、片手間というか、書かれたエロ文学が有名になり、古い方ならおぼえておられるであろうが、丸木砂土というペンネームはあまりにも有名である。おそらく秦氏が秦豊吉という本名で出版されたのは、これも懐かしい昔のベストセラー「西部戦線異常なし」だけだったのではないかと思われる。

小林一三氏が秦氏を東宝にひっぱったのは、家のことなぞほったらかして仕事をするような、今でいう猛烈社員が好きだったからと思うが、秦氏は子供もなく奥さんは体が弱く寝たきりという、小林氏向きの条件がそろっていたからであろう。日劇ダンシング・チームを作ったのは秦氏であり、当時氏は裏方のおやだまだった。

それはともかく、私としてはどうしてよいのか、慌てふためいたものである。音楽を選ぶことはできても、振付なんてことは、したことはもちろん考えたことさえなかった私が、秦氏の強引さにまけて、益田隆先生や、タップの荻野先生に助けてもらったとはいうものの、とにかく生まれて初めて振付なるものをしたのである。

大好評だった南米レヴュー『南十字星』

●南米レヴュー「南十字星」（当時の新聞広告）

かくして昭和13年７月15日、私が作、演出した南米レヴュー「南十字星」なるものが、東京有楽町の日本劇場で上演されるはこびとなったわけである。今考えても無謀というほかないが、このレヴューは幸いなことに大好評であった。各新聞がほめてくれたばかりか、あのおくちの悪い葦原英了氏までが口を極めて賞讃してくださった。まぐれあたりといえばそれまでだが、私自身も昔の言葉でいう一貫目はやせてしまった。

当時日劇の生徒の中にはいろいろな人がいた。私が入るといれかわりくらいにやめた人に、丹下清子、三浦光子（映画女優）、中村笑子その他がいたそうだし私とともに働いた人に長部千鶴子、葉村みき子、銀暁美（しろがね）、国分みさお、といったような当時の学生諸君に人気のあった人もいた。

私は当時これといった仕事もなかったので、その後一年半ほど日劇の嘱託になった。そして小林一三氏が近衛内閣の商工大臣（今の通産大臣）になられた時までつとめてやめた。体がもたなかったからである。猛烈重役の秦氏の下では私のような体の弱いものは務まらない。社員というのが一年中休みなし、嘱託が普通の会社の社員なみである。御大の秦氏はというと、朝８時に日劇の裏の事務室に現われ、９時ごろまで仕事をしてから東宝の本社に行き、午後５時に本社が終わると再び日劇の事務室にきて８時か８時半ごろまで仕事をする。これが毎日で、日曜なぞは一日中、日劇に来ている。ときどき社員が休むと、なぜ休むのだろうと考えこむ。社員にいわせると、

当たりまえじゃないか、休みがないから休むんだ。

当時の働きぶりは今の猛烈社員どころではなかったのである。

私は「南十字星」に続いて、二～三本のレヴューを作った。しかし、「南十字星」が自分でも一番よくできたと思っている。ところで私は秦豊吉氏からは、ほめられたり、おこられたりいろいろあっ

たが、この人の性格、その仕事から、ひとつの人生哲学というとオーバーになるが、ひとつのことを学びとることができた。

大衆に受けるにはその心をつかむこと

およそクラシック音楽からポピュラーまで、レヴューでも芝居でも、大衆を喜ばす作品が成功した作品であることはいうまでもない。ましてレヴューやタンゴその他ポピュラーなものは、その時の大衆の心をキャッチする必要がある。その人の死後何十年かたって世に認められたのでは、クラシック音楽ならともかく、ポピュラーといわれる世界では意味がない。大衆を喜ばす。この場合ふたつのことがいえるのである。そのひとつは大衆の好みに合わせて作ること。ある時は自分の好みを捨て、とでもいうか、どうしたらその時代の大衆の好みに合うかを研究して作品を作ることである。タンゴでいえば、フランシスコ・カナロなぞはこの形の代表的存在だろう。もうひとつは作る人の趣味が偶然にもその時の大衆の好みに合うということである。特に大衆を意識したのではなく、自分がよいと考えて作ったものが、一般にも喜ばれる。この場合は大衆も満足し、作った本人も満足しているのだから、まことに幸いである。秦豊吉氏の場合は後者の方なのだから考え方によっては幸福な人だった。戦後帝劇で上演した古川ロッパ、越路吹雪、岸井明などによるミュージカル「モルガンお雪」はその代表ともいうべきもので、あまりに自分の思った通りにいったので、あの口やかましい秦氏がボーッとしてしまい、夢をみているような顔をしていた、という話は裏方の間では有名で、かなり馬鹿げたところもあるが、それは専門家筋の間の話で、連日大入りだったのだからまずはめでたしめでたしである。

これは私のような評論家にとっては大切な話なので、もう少し書かせてもらうと、クラシック音楽の方でもこんなケースはたくさんある。生前は大衆からあまり喜ばれず、本人はめぐまれない一生を終わった人としては、アメリカに渡ってからのバルトーク、「カルメン」の作者ビゼー、シューベルトもある意味ではこの部類に入るのではないだろうか。この反対に一曲作るごとに天下がひっくりかえるほど騒がれたマイエルベールの如きは、今日ほとんど音楽会でもＦＭラジオでもその作品がでてこない。もっともこの人の作品はオペラでもコロラチューラ・ソプラノが主役のものが多く、現在はコロラチューラ・ソプラノがまったくといっていいほどいないので、「ディノーラ」とか「北の星」のようなオペラがだせないということもあるが、これがポピュラーとなると今日ただ今受けなくてはならないのだから、その時代の大衆の好みに合う、または合わせるということはクラシック以上に必要になってくる。しかし合わせるより、合うということが本当に幸福なことであるのを、私は長年の体験や経験から、考えざるを得ないのである。どんなにもてはやされても、自分自身満足しない作品を書き、それが受けているということは淋しいというか、割り切れないものがある。一生懸命作ったものが受けないのより一層中途半端な気がするものである。これが作詞作曲その他すべての作者の苦しみであろう。古賀政男氏がどんな気持ちで作曲されていたかは知らないが、作者の気持ちというものだけは読者に知ってもらいたいのだ。

「南十字星」は私の考え通り作って喜ばれたのだから私は幸せ者であった。なお、特別出演の淡谷のり子さんが、私の作詞した《ルンバ・タンバ》を歌われたが、この時がこの曲の日本初演である。

カルロス・ガルデル（5）
Carlos Gardel (5)

大澤　寛（訳）

“CARLOS GARDEL”, Tango de colección 20（Clarín（2005））

翻訳資料添付ＣＤの歌詞邦訳（1/2）

「Ventanita de arrabal」（下町の小さな窓）
Letra : Pascual Contursi
Música : Antonio Scatasso

カフェラータ*という町の
床には煉瓦を敷いた
間仕切りのドアのない
古いコンベンティージョ *には
手回しオルガンの嘆き節
そこでは娘があの青年（あとこ）の
通りがかるのを待っている

*カフェラータCaferata：チクラーナ（Chiclana）にある町
同名のタンゴ「Caferata」がこの作詞・作曲コンビにある
*コンベンティージョ Conventillo：移民などが住んだ集合住宅
強いて訳せば“棟割長屋”か

栗色の帽子
光った革の半長靴
人々の視線を浴びながら
ひとりでコンベンティージョに
やって来て　ギターを借りると
その娘に　歌を歌ってやった

とある日曜日にその娘と
タンゴを踊ったあの青年
その娘に“君が好きで死にそうだ”と告げて
娘の心を泥沼に引きずり込んだ　あの青年
コンベンティージョの入り口*に
二度と戻って来なかった

*入り口と訳したがreja は花を飾ったりすることと防犯という
ふたつの目的を持った鉄格子

その娘の部屋のあの小窓
あの日から見捨てられて
しおれた花があるばかり
誰も居ない小窓に霧が降り
花に宿った露が悲しんで
溜息をついたものだから
細い幹も折れて崩れた

邦訳：大澤　寛

「Mano a mano」（五分と五分、貸し借りは無い）
Letra : Celedonio Esteban Flores
Música : C.Gardel + J.Razzano

悲しみに狂って　いまお前を思い出している
判るよ
お前は　世間の除けものの俺に貢いでくれる
いい女だった
お前は　いてくれるだけで　俺のねぐらを温めて
くれた　いつも変わらない　いい女だった
判るよ　俺を愛してくれた
他の誰も愛さなかったし
これからも愛することはないだろう

上手くツキが回ったんだ
哀れな小娘だったお前は
貧しい家で　貧しさから逃れようと頑張っていた
今じゃお前は　本物の大金持ちで　人生はお前に
頬笑み歌いかける
間抜けな男の懐の金を
じゃんじゃん遣いまくってる
性悪な猫が　哀れな鼠をいたぶるように

今じゃ お前の頭の中は不幸な夢で一杯だ
馬鹿な男たちにも　女友達にも
あのヒモにも騙された
狂ったように誘いかける大金持ちのミロンガ
そこに集まる気取った女たちの野望が
実現したり砕けたり
お前の哀れな心の奥に入りこんだ

お前の勝利が　哀れな束の間の勝利が
冨と快楽が　続いている間は
お前の金蔓の旦那がずっと金持ちでいて欲しいし
お前には遊び人たちとの賭けごとをやめて欲しい

そして男たちに“ありゃ好い女だ”と言わせたい

俺はお前に礼を言うことはない　俺とお前に貸し借りは無い
お前がして来たことも　現在(いま)していることも
将来(これから)することも　俺には関係ない
お前に何かして貰ったら　それは払った筈だ
知らずに何か小さな借りがあって
俺が忘れていたら　それはお前の
あの馬鹿の勘定に付けて置けよ

いつかお前が
ガタついて古びた家具みたいになったとき
そしてお前の哀れな心に　希望がなくなったとき
助けが要るなら　忠告が欲しいなら
この俺を思い出せよ　　お前を助けるためなら
その時には　生命を投げ出つもりだから

邦訳：大澤　寛

1940年代初めの検閲でオリジナルの歌詞と検閲後の歌詞は大きく変わっている。ここに訳したのは検閲を受ける前の原詩

「Palomita blanca」（白い子鳩）
Letra : Francisco García Giménez
Música : Anselmo Alfredo Aieta

あの娘(こ)がいないことは　私には苦しみ嘆くこと
あの娘を思い出すと　時々は幸せなのだけど
すぐに私を嘆きの中に閉じ込めて
どんなに遠くに出かけても
あの娘と一緒でないのなら
私を慰めてくれるものは何もない
私が前に向かっても
心は後ろに残される
私が進む道は　ひどく残酷に私を遠ざけて
あの娘の愛の優しさを私から奪うのだ
そして私は　思いの中だけであの娘に会い
うっとりと声を聴き　切なくあの娘に唇付ける
あの娘が傍に居るような気がする
こうして　夢を見ながら
私は　さらに遠ざかる

白い小鳩が飛んで行く
あの娘の住む家の方に
“白い子鳩よ　悲しく捨てられたものへの
お前は想い出の便りなのだ！”
私が想い焦がれるあの娘に会ったら
私が泣いてるなんて言わずに
あの娘に教えてやってくれ
あの娘無しで生きるのが　愛する人を失うのが
どれほど辛いことかと
前に歩みを進めよう　ぼろ切れみたいな私の服よ
流れる風の中の　私たちは千切れ雲
愛する者が居ない中で　人生は過ぎて行く
愛するものに　いつも別れを告げながら
“白い小鳩よ！”
夜も昼も　飛んでくれよ　私の塒を探して
そして静かに飛びながら　空に書いてくれ
“あの娘は決してお前を忘れていない　お前のことだけ思っている”と

あの娘には判らないだろう
私が　愛するひとを遠くに置き去りにはしなかったことを
私の心にむごい試練を与える悩みが
ふと横合いからやって来て
あの娘を呼んでいることを

小道を彷徨(さまよ)い歩きながら
暗い遠くに探している
あの娘が捨てた故郷を
あの娘が私の腕の中で泣いたのを
別れにあの娘が振り向いて
薄いハンカチを振ったのを
そして遠く小さくなって行く
あの娘の姿を
そして　私の心で拡がってゆく
あの娘の可愛さと
もうあの娘に会えない私の　この嘆きが

邦訳：大澤　寛

男歌・男の嘆き節なのだから、主語は“俺”としたいのだが、この歌詞には一種の優しさがある（＝男っぽさが薄い）ので“私”としてある。

「Viejo smoking」（古いタキシード）
Letra : Celedonio Esteban Flores
Música : Guillermo Barbieri

よく見てくれよ　部屋が寂れて行くのを
クッションのないベッドが威張っている
見ろよ　この哀れな男がどんなに落ちぶれたかを
苦しみ　貧しく　警察(けいさつ)の犬みたいに痩せて
少しずつ　何もかも　質屋に運んだ
貧乏暮しが続いて
プールに飛び込んで泳ぎ始めるしかなかった*

*この表現の含意はネイティヴも不明という

お前だけが残っている　俺にはお前が
神に愛される夢の一つなんだ
神は俺の眼を覚ましには来ないけれど

俺の昔の　古いタキシードよ
お前を身に着けて　俺は目立ったものだよ
綺麗な女が幾人　お前の襟に涙を流したことか
艶のあるお前の襟　女たちの気持ちに火を付けて
何処へ行っても
俺の評判を立ててくれたようだな
ジゴロとしての俺の

俺は　自分が惨めなのが判っても
悲しんだりしない
華やかだった昔を　思い出して嘆いたりもしない
無駄に費った金や年月を　悔んだりはしない
だけど泣けて来るよ
孤独(ひとり)で　友も無く　恋も無く
助けの手を差し延べられることもなく
余生を楽しませてくれる女もいない
いずれ近いうちに　お前を枕にして
ベッドに身を投げて
そのまま俺は死んでしまおう

古いタキシードよ　飛びきり綺麗な女が
幾度　化粧と唇紅で　お前の襟を汚したことか
俺が冷たくすると　どんなに泣いてお前を濡らしたことか
男たちが
どんなに俺の評判を羨ましがったことか
ジゴロとしての俺の

邦訳：大澤　寛

「Mi noche triste」（我が悲しみの夜）
Letra : Pascual Contursi
Música : Samuel Castriota

俺の人生が　一番上手く行っていたときに
お前は俺を捨てたなあ
俺を傷つけ　心に棘を残して
俺はお前が好きだった　お前が居れば楽しかった
俺はお前に　身を焦がすように惚れていたのに
もう俺には　慰めてくれるものも無いから
お前を忘れるために　酔っ払うぜ

部屋に戻っても　散らかっていて
何もかも　見捨てられて　悲しげで
俺は泣きたくなる
自分を慰めようと
お前の写真を見つめて
長い間　じっとしている
夜になって　寝る時にも
ドアを閉める気にはならない
開けて置いたら
お前が帰って来る気がするから

何時だって　お前がここに居るみたいに
マテ茶もビスケットもあるぜ
お前に見せたいものだ　あの安物のベッドが
二人が一緒じゃないのを見たら
どんなに腹を立てるかを

お前が　同じ色のリボンで飾った化粧瓶は
ここにはもう残っていない
お前が居ないので
鏡は曇って　泣いたように見える

ギターは　未だ化粧棚に吊るしてある
誰も　弾いたり歌ったりはしないけれど
部屋の灯りだって　お前のいないのが判って
俺の　悲しい夜を照らしてはくれない

邦訳：大澤　寛

「Yira, yira」
Letra y música : Enrique Santos Discépolo

運命が　女と同じように
裏切りを重ねて
お前の願いを　拒絶(はね)つける時
お前が　全くの素寒貧になって
行くあても無く
打ちひしがれている時
お前が神を信じる気も無くし
陽に当たり干からびて行く
昨日のマテ茶の葉も無い時
お前が　食べ物のための
金を稼ごうとして
あちこち歩き回る時
見向きもしてくれない
世間の冷たさが判るだろう

全部嘘ばかりで
愛などは無いのが判るだろう
世間は気にも掛けないのだから
ジーラ*　ジーラ
“売春婦”。侮蔑的な呼びかけ・掛け声
堕落(おち)た暮らしで身体を壊し
悩みで　心を蝕まれても
決して助けを求めるなよ
差し伸べてくれる手も　施しも

お前が　優しい胸に抱かれて死にたくて
どんなに玄関のベルを押しても
誰も答えてくれない時
お前が　働いて　疲れて　その後で
俺と同じような　一文無しになった時
お前が手放そうとしている衣装を
誰かがお前の傍で　試し着をするのを見る時
お前は思い出すだろう
昔　疲れて　聞いて貰えない叫び声をあげた
この馬鹿な男のことを

邦訳：大澤　寛

「Anclao en París」（パリに住みついて）
Letra : Enrique Cadícamo
Música : Guillermo Barbieri

さすらい人の暮らしに浸って
俺は　ブエノスアイレスよ
不運続きで金詰まりで　パリに根を下ろしてる
こんな遠いところから　お前を想い出している
通りに面した俺の部屋の窓から
柔らかく降る雪を見つめている
赤みがかった消えそうな街灯は
不思議な眼差しの瞳に見える

遠いブエノスアイレスよ　綺麗だろうなあ
俺が船で旅立ってから　もう10年になるぜ
ここで　このモンマルトルの
センチメンタルな下町の
その短剣で
想い出が釘付けにされているのを感じる

コリエンテス通りは　どんなに変わったかなあ
スイパチャも　エスメラルダも　お前の下町も
誰かに聞いたよ　お前は華やいでいて
斜めに交差する街角もあるって
俺がどれほど　お前に会いたいか
判らんだろうなあ
この土地で俺はうらぶれて
金も無く　明日の望みもなく
いつか或る夜　俺が死ぬことは　誰にも判らない
ブエノスアイレスよ　もうお前に会うことはない

邦訳：大澤　寛

「Tomo y obligo 」（交わす盃）
Letra : Manuel Romero
Música : Carlos Gardel

（この「交わす盃」というタイトルの邦訳は先人の名訳）

俺も呑みやすから　お宅も一杯やって下さいよ
故郷（くに）からは離れて　友達（だち）も居らんし
今日は思い出を消しちまいたいんでさ
俺の悩みを　お宅の胸にぶちまけさせて貰いてえ
一緒に呑んで下せえ
そして　時々俺の声が曇っても
俺を騙した女を恨んで泣いてるんじゃねえ
男は泣くもんじゃねえことは判ってやすよ

パンパの草が口をきけたら
お宅に話してくれるかなあ
俺が　どんなにあいつに惚れてたか
どれほど熱くあいつを想っていたか
葉を散らした木の下で
昔あいつにキスしたあの木の下で
何度俺は　震えながら蹲（うずくま）っていたことか
そして今　落ちぶれたあいつが
他の男の腕に身を任せているのを見て
嫉妬に目が眩んだ俺のナイフの
ほんの一刺しでよかったんだ
誓って言いやすが　俺には今でも判らねえ
どうやって思い留まれたのか
あそこであいつを殺っちまわなかったのか

俺も呑みやすから　お宅も一杯やって下さいよ
女のことは　話さないようにしやしょう
女ってものはねえ　兄さん
酷いことをするものでさあ
今になると　それが経験（とし）で判るんでさあ
言うことを聞いて下さいよ　兄さん
女に惚れちゃいけねえ
もしそんなことになったら
しっかりするんですぜ　兄さん
悩んで　だけど泣いちゃいけねえ
男らしい男は　泣くもんじゃねえんだ

邦訳：大澤　寛

「Milonga sentimental」
Letra : Homero Manzi
Música : Sebastián Piana

あなたを思い出すための
切なく哀しいミロンガよ
泣きながら嘆くひともある
私は唄う　泣かないように
理由(わけ)など何も告げないで
あっという間に冷めた愛
私は自分を慰める
女は裏切るものなのだと

男だよ　あなたを激しく愛するための
男だよ　あなたの幸福を願うための
男だよ　受けた仕打ちを忘れるための
私はもう　あなたを許したのだから
あなたがそれを知ることは無い
あなたは信じられないだろう
私がひれ伏すのを見たら
あなたは笑い出すだろう

それは容易(たやす)いことなのだ
裏切りの恨みを晴らすのに
相手に傷を付けるのは
愛の行方を決めるのに
ナイフで決着(しまつ)をつけるのは
だけど容易いことじゃない
愛の縺(もつ)れを断ち切ることは
縺れが心の止まり木に
固くとりついている時は

あなたを居なくさせたミロンガ
あなたを思い出すミロンガ
あなたの家のバルコニーで
誰にも歌わせたくないミロンガ
あなたが夜に来て　朝に帰って欲しいのだと
時々“いいよ”と言うための　“駄目だ”と叫ぶための

邦訳：大澤　寛

この曲および近代的なミロンガの誕生については石川浩司編「タンゴ名曲事典」に詳しい記述がある。

「Melodía de arrabal」（場末のメロディー）
Letra : Alfredo le Pera + Mario Batistella
Música : Carlos Gardel

月の明りに照らされて
銀色をした場末の町よ
踊りの噂も　宝物
貧しきものの集いでは
バンドネオンが呟いて
花に見まがう美少女が
静かに照らす街灯に
科(しな)を作って待っている

町よ　町よ
震える心を持つ町よ
こころ優しい雀の心
悲しいことや願い事
やくざな場末のここかしこ
全てが唄になるところ
古い　　町よ
もしも　お前を思い出し
俺が涙を流しても
許してくれるだろうなあ
お前と一緒に酔いながら
彷徨(さまよ)う俺が心から
お前に捧げる
長い唇付けなのだから

お前はみんなの揺り籠だ
伊達男たち　歌い手たち
そして喧嘩と小競り合い
俺が愛するものたちの
俺はナイフを取り出して
お前の壁に彫りつけた
愛する名前を彫りつけた
「ロサ」 ダンスホールの花だった
「マルゴー」 金髪だったなあ
そして　あの可愛い「リータ」
初めて誘ったその時に
俺に愛をくれたんだ

邦訳：大澤　寛

私の人生とタンゴ

断片的回想録

舳松伸男（堺市）

私は昭和５年の生まれで、今年（2015年）85歳になる。人間、年を取るとどうしても自分の過去を顧みるようになる。吉村作治さんは　あ＝愛、い＝意思、う＝運、え＝縁、お＝恩　の「あ、い、う、え、お」が大切であると言っておられるが、自分も同感である、そして特に長い人生で　う＝運、え＝縁、お＝恩　が大切であると思っている。

このメモは私のこれまでの85年の人生を振り返って、思い出すことを、丁度ラ・クンパルシータの歌詞（マトス・ロドリゲス作詞のもの）にあるように、断片的・羅列的に記述したものである。全体的なまとまりには乏しいが、日本タンゴ・アカデミーの会員の方々の何かのご参考にでもなればと思い、敢えて機関誌の誌面を汚させていただいた。

生い立ち

- 冒頭に書いたように私は昭和５年、大阪市の生まれである。実家は舳松病院と言ったが、昭和20年３月13日の空襲で焼失した。戦後になって、父は近鉄線の駒川で内科医院を開いた。私も後に旧制大阪市立医科大学を卒業して医者になった。
- 子供の頃は上野音楽学校（今の東京芸大）の奥田良三先生に声楽を、同じく上野出身の女の先生にピアノを習った。難波元町小学校５年の時に大東亜戦争（太平洋戦争）が始まったが、音楽は習っていた。
- 昭和18年に旧制今宮中学校に入学。戦時中はご多分に漏れず、軍事教練や勤労奉仕に明け暮れたが、その頃のことである。防空壕を掘っている時に連合軍のノルマンディー上陸のニュースが入った。その時、傍にいた陸軍将校から「これでどちらが勝つか判っただろう。お前ら無理をするな」と言われたことは今でも憶えている。
- 昭和20年３月13日の空襲では焼夷弾の雨の中を逃げ惑った。周りは焼死体ばかりで、みな中学生以上の男女であった。小学生は田舎に疎開していて助かった。後日、アルゼンチンに行った時、このことをポンティエールに話をしたら、奥さんのマルタさんは涙ぐんでいた。
- 敗戦後は進駐軍（占領軍）を迎えることとなった。その頃の私たちは身体中ノミとシラミであり、地下鉄などの改札口でDDTを頭からかけられた。これでノミもシラミも退治された。
- 当時、多数の日本女性が米軍キャンプの前に並んでいた。若い夫が戦死した未亡人や両親を空襲で亡くした娘さんたちである。彼女らがどのような仕事していたのかはご想像におまかせします。

バンドネオンとの出会い

- 大学入学後のことであるが、私はアコーディオンが弾けたので、アルバイトとしてあるタップダ

ンスの劇団に雇われ、愛媛県の宇和島に行き、ダンスの伴奏をした。その頃は俳優の藤田おさむや山根寿子なども来ていた。皆、食うためである。

- ある日、芦屋の家でバンドネオンの生の演奏を聴いた。
- 私はあるバンドに入ったが、そこのバンドマスターから早川真平氏が戦前に彼の楽団に居られたことを知った。その後、小川数芳さんの率いるオルケスタ・ソルのあることを知り、小川さんに直訴して、バンドボーイとして働くことになった。ところがある時、小川さんの楽団からバンドネオン奏者が他の楽団に引き抜かれる事件があり、私が急造のバンドネオン奏者となった。これがバンドネオンとの付き合いの始まりである。この辺の事情と、その後のタンゴ演奏歴はタンゲアンド・エン・ハポン誌のNo.29 （2012）に「ドクトル・バンドネオンのタンゴ・タンゴ人生」と題した文章に詳しく述べてあるので、その方を参照していただきたい。

阿倍野　キャバレー大阪にて、左端　著者（1948.12.8）

小川数芳とオルケスタ・ソル（前列　左から2人目が著者）

● 軍隊による召集や戦後の公職追放でどの世界でもベテランが居なくなり、若い人が比較的上の地位につけた。音楽の世界でも若いバンドマスターがかなり居た。

● その頃のオルケスタ・ティピカ東京の第１バイオリンはクラシックの第一人者の岩淵龍太郎氏であった。早川さんはタンゴのためにこのような努力をしておられたのだ。

● 小川さんの楽団はその後長崎に行き、キャバレー「ニューメトロ」の益原英次氏が後を引き継いだ。更にもう１人にピアノ式バンドネオン（左右の鍵盤がピアノのように並んでいるもの）奏者が入って来た。音楽的に実に素晴らしい人で、私は随分と勉強させてもらった。この人が岩崎さんで、今も東京で大活躍しておられる。この楽団に脇さんが居た。後にティピカ東京に加わったバイオリン奏者である。

● 志賀山勢洲さんなる女性が大阪府八尾におられた。この方は「せしゅう・ぐるーぷ」の代表で、アルゼンチン・タンゴを日本舞踊で踊られるので、よく存じていた。

● 昭和42年にロス・アセス・デ・オーサカ（ロス・アセス）を結成した。初代ピアノは大阪音大出身の岡野健次君で、中々の名ピアニストだった。朝日放送の「お早うパーソナリティ」にもしばしば出演した。

ロス・アセス・デ・オーサカ

アルゼンチンとの交流

● アルゼンチン（以降、亜国と略記）は何度か訪れ、アルマンド・ポンティエールとフアン・ポリートには大変お世話になった。ポンティエール夫人のマルタさんは学校の先生で英語とフランス語を流暢に話された。

前列　左端　ポリート夫人、中央　著者、右端　ポンティエール夫人マルタさん
後列　左端　ポリート、2人目　ミロ・ドフマン、3人目　上原氏、右端　ポンティエ―ル

● 私の本職は医師であり、その関係で大阪住吉ライオンズ・クラブ*）（以下、L.C.と略記）の会員でもある。それでポンティエールにブエノス・アイレスのモンセラートL.C.を紹介され、その例会に出席することができた。またモンセラートL.C.の関連施設を見学させていただき、活動内容の説明も受けた。

● 戦後、亜国に移住されノリタケ陶器の販売会社を経営しておられる津田氏によれば、亜国は階級社会で、スペイン、イギリス、フランス、ドイツ系の人が政治、経済、軍、宗教の要職を抑え、その次がロシア、東欧系、そのまた次がイタリア系、アラブ系はその下の位置にあるという説明であった。因みに亜国のタンゴ音楽家の社会的地位は高くはないという。

● ある日、人から聞いたベルナルド・ベベールの家の近くを歩いていると、横の理髪店から白い上着を着た小太りの男性が何か言いながら前に立った。鋏を手にしたベベールだ。彼の本職は理髪師だったのだ。かなり大きな店で、客で立て込んでいた。

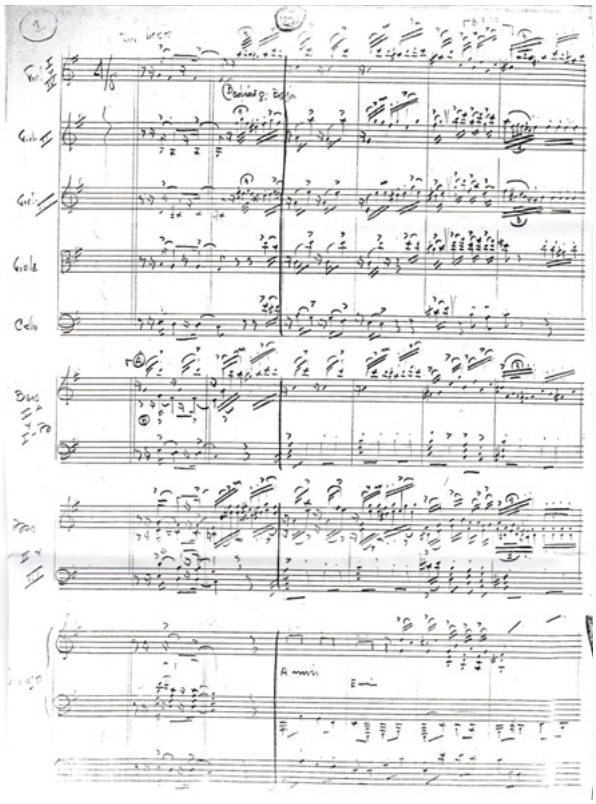
● 1982年にマルビーナス（フォークランド）戦争が起きた。私は早速ブエノス・アイレスに飛ぼうと決心し、いつもお願いしている濱旅行社に頼んだ。前回、同行した大阪会計事務所の所長の杉本さんも、今回は奥様同行で行かれることになった。ニューヨークでは気狂い扱いされたが、ともかく３人ともブエノス・アイレスに到着した。しかし街は平常と変わらず、夜のレストランは満員、タンゴの演奏も何時も通りだった。ポンティエールも無事であった。しかし、国外からのテレビ、ラジオの放送は遮断され、英語も使用禁止だったから戦況はさっぱりわからない。翌朝、１人でウルグアイ航空でモンテビデオに渡った。ラジオを聞いていると、英国の原子力潜水艦がラ・プラタ川を潜航してブエノス・アイレス近くまで来たとか、亜国のミラージュ戦闘機が英国のハリアー戦闘機に撃墜されているといったニュースが流れてきた。その日は一泊して、翌日早朝、ウルグアイ航空の便でブエノス・アイレスに戻った。

● ブエノス・アイレスに戻ると、大使館からエセイサ空港が閉鎖された場合に備えて商社の人たちを亜国から脱出させるためにバスを待機させている、なにをぐずぐずしているのか、との連絡が入った。この時、日本は国連の方針を支持していたのでイギリス側につくことになり、亜国の日系人は随分と肩身の狭い思いをしたそうである。幸いにエクアドルに向かう便があったので恩師のホセ先生を訪ねてキトに向かった。彼は病院を持ち、喜んで我々を自宅に泊めてくれた。そして大谷幸平なる日本人が世界に知られている長寿村のビルカバンバに病院を寄贈したことも知った。ホセ先生から100歳を超えたビルカバンバの人々の血圧、脈拍、血中脂質、脊椎写真、歩行状態などを詳しく説明していただいた。また、弟さんの案内で高所にある寒い赤道や、ガラパゴス諸島を見物した。

ガラパゴス島でゾウガメに触れる

＊）ライオンズ・クラブとは、1917年にアメリカのシカゴで発足し，現在世界157ヵ国および領域に約3万7000クラブ，約133万の会員（1984）を擁する国際的社会奉仕団体で、正式の名称は〈ライオンズ･クラブ国際協会International Association of Lions Clubs〉である。本部はアメリカのイリノイ州オークブルックにある。各ライオンズ･クラブは国際協会を構成する一単位で，クラブの存在する地域に対してさまざまな奉仕活動を行う。（Wikipediaによる）。

● 翌年（1983年）、ポンティエールが亡くなったとの悲報が届いた。直ちに、彼の冥福を祈り、墓参のためにブエノス・アイレスに向かった。奥様のマルタさんはブエノス・アイレスの家も、豪華なヨットも売り払い、小ぢんまりしたアパートに１人で居られた。ポンティエールが生前に私宛に書かれた手紙を見せていただいた。そこには「マル・デル・プラタの別荘に行って、ヨットで釣りをしよう」と書いてあった。マルタさんからはタンゴ「ア・ロス・アミーゴス」の総譜などをいただき、又、愛用のバンドネオン２台を買いました。



ポンティエール自筆のA los amigosの総譜の一部

● ブエノス・アイレスのモンセラートL.C.と大阪住吉L.C.とが姉妹提携することになり、その調印式が1984年８月14日に開催されることになった。私は当時大阪住吉L.C.の会長であったので、その調印式に出席するために大阪住吉L.C.の会計担当であった尾形君と共にブエノス・アイレスに行った。調印式には当地の多くのL.C.会員夫妻の他に日本大使館の高野文化担当官、多数の日系人の方々が参列され、故ポンティエール夫人も列席された。

● ある時、日本国際医療団から亜国の医療を調べてもらえるかとの問い合わせが来た。私はそれに応諾し、日本国際医療団から医療保健専門技術委員を委嘱された。それで亜国の医療を調べるために1985年にブエノス・アイレスに行った。先ず、Durand病院を訪れた。そこにはフランシスコ・カナロの甥が医師として勤務していた。タンゴ「エル・インテルナード」が発表された頃には亜国にはインターン制度が無かったことが確かめられた。日本でもインターン制度や医師国家試験が実施されたのは米軍による占領後であり、戦前は医学部を卒業すれば医師の資格が取れた。

● Durand病院を見学後、飛行機でフフイに飛んだ。フフイは２千数百メートルの高地であり、早足だと息切れがする。日系人医師が診療所を開いており、そこで高山病についての説明を受けた。

● ある日、フォルクローレの楽団が来た。１人が上手にバンドネオンを弾いている。タンゴとは全く違う奏法である。後で彼がディノ・サルーシであるとわかった。バンドネオンの奏法と言えば、ウルグアイの弾き方もブエノス・アイレスのとは少し違う。日本のバンドネオン奏者はブエノス・アイレスの奏者の弾き方に似ている。ブエノス・アイレスに帰るとDurand病院の院長から亜国の医療事情に関して詳しく記述された書類を渡された。帰国して亜国、エクアドル、ブラジルの医療事情を日本国際医療団に報告した。

● ブエノス・アイレスという地名はイタリア、サルディニア島のサルダの聖母ブエン・アイレに由来していると言う。

その後の音楽活動

● 平成になってからの楽団活動は先に述べたタンゲアンド・エン・ハポン誌のNo.29 （2012）に「ドクトル・バンドネオンのタンゴ・タンゴ人生」に詳しく記述してあるので、ここでは繰り返さない。

● １つだけ付け加えると、2005年に村田道代さん（vn）、小川紀美代さん（bn）、綾部美和子さん（p）、荒玉哲郎さん（cb）、それに私の５人で音楽使節として大阪市長の書簡を携えてブエノス・アイレスに行くことになった。ところが、出発前に村田さんが急病になられたので、当時亜国在住であった古橋ユキさんに急遽出演をお願いしたところ、ご快諾を得たので事なきを得た。CASA DE GOBIERNO内のホール、CASA DE CULTURA内のSALÓN DURAND、Congreso De La SALÓN DE PERDIDOS、Salón de Jardín Japonés、の４ヵ所で演奏した。私も年で疲れていたが、小川さんが殆ど１番を弾いてくれて、たいそう助かった。

トリオ・ボナリア（1990.9.25）

● 当時のブエノス・アイレスは治安が悪く、夜の１人歩きは危険であった。ビエホ・アルマセンなどの入場料も食事込みでUS$60位になり、タンゴは観光客を相手の踊りが主になっていた。1974年頃はデ・アンジェリス楽団やエドムンド・リベロの歌が聴けたが、今は昔の話となった。

● 2010年に80歳のコンサートを想い出深いホテル日航大阪で、古いメンバーの上田君や葛川君も加わり、患者さんたちも招待して、開いた。これが最後の演奏になった。

● 2012年に診療所を閉院した。その後、癌と脊椎骨折で入院、手術となり、昨年（2014年）暮れにようやく正常になった。想い返すと、目賀田綱美様、高橋忠雄様、早川真平様、その他の方々のご恩は忘れ得ず、また今日私を取り上げて下さった日本タンゴ・アカデミーの島﨑名誉会長、飯塚会長、そして原稿の編集のお世話になった大澤様に厚くお礼申し上げます。

（文責：齋藤冨士郎）

（編集部注：舳松氏からの原稿のオリジナルは思い出すままに書かれたメモの集まりであり、そのままでは機関誌に掲載は不可能でした。そこで編集部で原稿を整理し、要点を箇条書きに書き出したものがここに掲げた文章です。なお、掲載に当っては事前に舳松氏に閲覧していただき、許諾を得ております。）

舳松氏の著書（1991年発行）の表紙

映画に見るアルゼンチン・タンゴ模様

～そのアーティスト、タイトル、バイレなどをめぐって～

その6・完

飯塚久夫

前回までに、アルゼンチン初の本格トーキー映画にしてタンゴ映画の傑作「タンゴTANGO」の製作経緯と概要、そして歴代タンゴ映画の集大成「アル・コラソンAL CORAZÓN」の紹介、さらにウーゴ・デル・カリルHugo del Carril、アルベルト・カスティージョ Alberto Castillo が出演した殆どの映画のデータを整理したところであるが、今回は（前出と重複するものもあるが)、その他の映画のデータを掲げておこう。

下記の順でデータを並べていく。
「」：タイトル
１：封切り日
２：封切り劇場
３：撮影年
４：監督
５：音楽担当
６：映画の中で使われる曲
７：主な出演者

■名女優歌手の出演映画

「MADRESERVA」
１：1938年10月5日
２：Cine Monumental（Lavalle780）
３：1938年
４：Luis César Amadori
５：Francisco Canaro, Alfredo Malerba
６：Madreserva, Canción de Amor, Vendrás Alguna Vez
７：Libertad Lamarque, Hugo del Carril

「LA CABALGATA DEL CIRCO」
１：1945年5月30日
２：Gran Palace
３：1944年
４：Mario Soffice
５：Isidro B. Maiztegui
６：Mi Noche Triste, El Porteñito, El Caburé, Dúo de Los Paraguas
７：Libertad Lamarque, Hugo del Carril, Juan José Miguez, Eva Duarte, Armando Bo

「ROMANCE MUSICAL」
１：1947年1月22日
２：Cine Normandie
３：1945-47年
４：Ernesto Arancibia
５：A. Gutiérrez del Barrio
６：Milonguita, Bien Criolla y Bien Porteña, Pregonera, Sin Palabras, Tus Pupilas, Facundo, Malu, Poema en Gris, Candunga
７：Libertad Lamarque, Juan José Miguez

「LA HISTORIA DEL TANGO」
１：1949年7月29日
２：1949年
３：Cine Monumental
４：Manuel Romero
５：Francisco Canaro
６：El Choclo, La Morocha, Mi Noche Triste, Yira-Yira, Y Toda a Media Luz, Pobre Mi Madre Querida
７：Virginia Luque, Juan José Miguez Fernando Lamas, Tita Merello

■有名歌手の出演映画

「ASÍ ES LA VIDA」

1：1939年7月19日
2：1938-39年
3：Cine Monumental
4：Francisco Mugica
5：Enrique Delfino, Francisco Balaguer
7：Enrique Muiño, Elías Alippi, Sabina Olmos

「CARNAVAL DE ANTAÑO」

1：1940年4月17日
2：1940年
3：Cine Monumental
4：Manuel Romero
5：Alberto Soifer, Miguel Caló
6：La Piedra del Escándalo, Las Vueltas de la Vida, Flor de Fango, Don Juan, Muñequita, Ivette, Zorro Gris, Margot, Pobre Milonga, Carnaval de Antaño, Esta Noche Me Emborracho
7：Sofía Bozán, Sabina, Olmos, Charlo, José Ovidio（Benito）Bianque “EL CACHAFAZ”

「EL ÍDOLO DEL TANGO」

1：1949年3月17日
2：1948-49年
3：Cine Libertador
4：Héctor Canziani
5：Rodolfo Sciammarella, Domingo Federico, Osmar Maderna
6：De Igual a Igual, No Tiene Importancia Comencé Jugando, Lluvia de Estrellas
7：Julio Martel

「ADIÓS MUCHACHOS」

1：1955年11月29日
2：1955年
3：Cine Normandie
4：Armando Bo
5：José Rodríguez Faure, Osvaldo Fresedo Juancito Díaz
6：No Me Pregunten Porqué, Cafetín de Buenos Aires, Nelly, Carrillón de la Merced, Café de los Angelitos, Rencor, Nuevo Amigo, Loca Dónde Estás Corazón, Adiós Muchachos
7：Juancito Díaz, Alfredo Dalton

「EL TANGO EN PARÍS」

1：1956年8月9日
2：1956年
3：Cine Suipacha
4：Arturo S. Mom
5：Héctor Artola
6：El Llorón, Adiós, Tres Esperanzas, El Metejón, Que Viejo Estoy, El Irresistible Rodríguez Peña, Tierrita, Viejo Rincón
7：Jorge Vidal

■記録に留めるタンゴ関連映画

「LOS MUCHACHOS DE ANTES NO USABAN GOMINA」

1：1937年3月31日
2：1936-37年
3：Cine Monumental
4：Manuel Romelo
5：Manuel Romelo
6：Sacale Viruta al Piso, Qué Cara Tenés de Otario, Don Juan, El Irresistible, Sobre las Olas

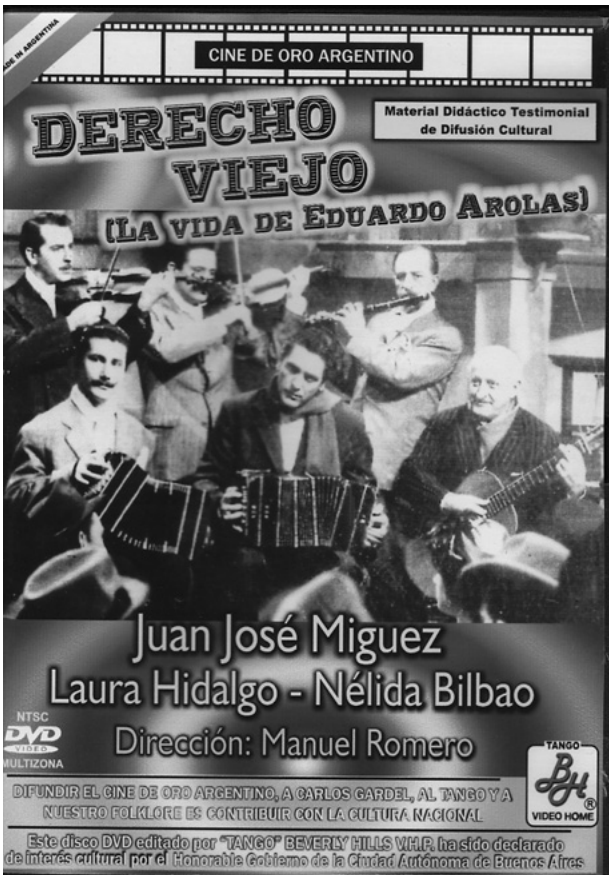
「LOS MUCHACHOS DE ANTES NO USABAN GOMINA」

1：1969年3月13日
4：Enrique Carreras
5：Tito Ribero
7：Sabina Olmos

「DERECHO VIEJO (La Vida de Eduardo Arolas)」

1：1951年1月4日
2：1950年

3：Cine Monumental
4：Manuel Romero
5：Sebastián Piana
6：La Guitarrita, Re Tin Tín, Rawson, La Cachila, El Bataraz, Catamarca, Fuegos Artificiales, Derecho Viejo, Comme Il Faut, El Marne
7：Juan José Miguez,



「FLOR DE DURAZNO」
1：1917年9月28日
2：1917年
3：Cine Coliseo
4：Francisco Defilipis Novoa
7：Carlos Gardel

■まとめ

本シリーズではこれまでで、すべてのタンゴ映画を網羅しているわけではないが、代表的なタンゴ映画の概要やデータを掲げてきた。

アーティストにとっては映画俳優としても活躍した経歴は、その位置づけを左右するものであった人も多い。カルロス・ガルデル Carlos Gardelはその最たる例であろう。

しかし、余りに有名なガルデルの1930年代映画のことは省いた。あまり知られていないが、記録に留めるべきガルデルの映画初出演の「ドゥラスノの花」のみはここに掲げた。

また「デレーチョ・ビエホ」はエドゥアルド・アローラスの生涯を描いた映画で、マヌエル・ロメロ監督故に脚色も多く正確な伝記映画とは言い難いが、本アカデミーの2013年全国懇親会時のセミナーで披露したところである。

タンゴ・ファンにとっては（スペイン語という障壁はあるが）、映画もタンゴ史を知る上では極めて重要である。本稿が、タンゴ映画に興味を持った際に、あるいはレコード録音盤のディスコグラフィ的な役割で何らかの参考になれば幸いである。（完）

こんなレコード／CDを聴いています　7

私の好きなタンゴは・・・ やはり、現代ものです

山根　洋（横浜市）

私ども「横浜ポルテニヤ音楽同好会」の今年（2015）１月の例会で、「新春３曲選」を行いました。そこで私が選んだ３曲のうちの１曲が、アストル･ピアソラの 1959年、ニューヨークでの録音、“take me dancing”からの１曲　PARA LUCIRSE でした。ピアソラの演奏ではちょっと異質ですが、会員の皆さんも興味を持って聴かれたようです。今回、機関誌編集部からこのLPを紹介して欲しいとのご連絡を頂き、この一文にまとめました。

ピアソラの苦悩の時代、オクテート・ブエノス・アイレス が認められず、1958年２月、少年時代を過ごしたニューヨークへ旅立ちます。そして1959年、このLPを録音します。

この演奏はキンテートですが、ピアソラのバンドネオン以外はエレキ・ギター、ビブラフォン、ピアノとベースという編成です。勿論みんなジャズのプレイヤーです。

ピアソラ自身が“ジャズ・タンゴ”と名付けたものではありますが、斎藤充正氏によれば『～アドリブによるソロもなければ、スウィングもせず、実際の音は一般的にいうジャズの概念とはあまり結びつかない～』というスタイルです。ですが、『～パーカッションが刻む一定のリズムがピアソラ風タンゴのエッセンスが窮屈ながらも乗っているという、ユニークなもので、ラテン的ではあるが、一般的にいうジャズの概念とはあまり結びつかない』ものです。（『　』内は斎藤充正氏の言葉）

LPのジャケットの裏を見ると、Aug. 22, 1961 と、買った日付が書いてあります。学生時代（高校２年か３年の頃）からずっと聴いていたアルゼンチン・タンゴが、少しは分かりかけてきたころ、大学を出て大阪へ就職して、当時、熊谷さんや、杉本栄男さんが中心になってやっておられた「SEMI-大阪」に籍を置いていた頃（1960 ～ 63年）の懐かしいＬＰの一枚です。

＜Take me dancing ～ 私をダンスに連れて行って　TICO 1066＞

曲目は

TRIUNFAL ／ OSCAR PERTERSON

BOLICUA ／ PARA LUSIRSE

PLUS ULTRA ／ DEDITA

CONTRATIEMPO ／ PRESANTANIA

の自作曲８曲のほか、ジョージ・シァリングの名曲「バードランドの子守唄」、デューク・エリントンの「ソフィスティケイテッド･レディー」など４曲が収められている。なお、このLPはのちにCD化され、“LA COQUETTE”という曲が追加されている。

＊ OSCAR PETERSONは偉大なジャズ・ピアニストへの献呈曲で、ピアソラがこのアルバムのために作った新曲である。

＊＊ LPジャケットの PIAZOLA のスペリングに注目 !!

どちらかといえば現代ものの方が好きな私ですが、古典では O.T.V. をよく聴いています。自分で作ったデータ・ベースに、O.T.V.が、約 100曲あります。

同音源の重複を除けば、およそ80曲位でしょうか・・

＜“ORQUESTA TIPICA VICTOR BEST SELECTION” BVCP-2653（BMG）＞

MOCOSITA ／ EL ENTRERRIANO ／ C.T.V. ／ ADIÓS MUCHACHOS ／ DON JUAN ／ JUEVES ／ VENTARRÓN ／ CARILLÓN DE LA MERCED

など、26曲が入っている。文字どおり、ベスト・セレクション が選ばれていて、気楽に聞き流しています。

３枚目と４枚目は、ニコラス・レデスマとフリオ・パネのソロ・プレイで、いずれもよく聴いています。現代の名人、といっても差し支えないでしょう。二人の演奏を初めて聴いたのはもう10年以上も前、たしか2003年か2004年頃だったと思います。スカイ・パーフェクトTV（スカパー）で、ミュージック・エアという番組があり、その中にソロ・タンゴというシリーズがありました。この二人にコントラバス（エンリケ･ゲラ）を加えたトリオがあり､この演奏を聴いて現代のものに興味をひかれるようになりました。

カナロ、フィルポ、ディ・サルリ、ダリエンソ、プグリエセ、トロイロ・・・らがすばらしい演奏を聴かせてくれた時代が過ぎ、丁度私たちとほぼ同世代の（我々の年代により近い）ミュージシャンたちが第一線で活躍する時代になって来ました。そんな時に聴いたこのトリオの演奏は、とても新鮮に感じました。因みに、レデスマが 1965年、パネは1947年生まれです。

epsa 17182（2001年）

epsa 0791-02（2006年）

収められている曲は～
ニコラス・レデスマ：
EL POLLO RICARDO / MAL DE AMORES / ROSA DE OTOÑO / BUENA VIDA
LA GUITARRITA / EL DÍA QUE ME QUIERAS など、12曲
フリオ･パネ：
BOEDO / CHICLANA / CHIQUÉ / SHUSHETA / RACING CLUB /
INDEPENDIENTE CLUB / YO TE BENDIGO / FLORES NEGRAS など、14曲
12曲目に入っている、自作の MI MARÍA（私のマリア）を除いて即興で弾いている。
CDには、“INSTANTÁNEAS”～「瞬間の音 / フリオ･パネ」というタイトルがついています。

偉大なバンドネオン奏者、レオポルド・フェデリコが亡くなりました。トロイロ、ピアソラとフェデリコがいなくなり、そしてそのあとフリオ・パネががんばっている・・・。あらためて、フェデリコを聴き直してみました。最後にレオポルド・フェデリコの２枚のLPを挙げて置きます。

Music Hall SFX-5132（1974 ？）

PRELUDIO NOCHERO / POMPAS DE JABÓN
CIUDADANO / FUIMOS / DE PURO GUAPO
OTRA NOCHE / PA’MAMÁ など 12曲
＊FUIMOS は フェデリコと アントニオ・アグリ（vn）にコントラバス（奏者不明）のトリオでの演奏。

Polydor 25MM 0163（1979）

CHE BANDONEÓN / LA RAYUELA
FUIMOS / CAPURICHO OTOÑAL
EL MARNE / BANDOLA ZURDO
SUS OJOS SE CERRARON / MALA
JUNTA など 10曲（すべて Bnソロ）。

以上の６枚を挙げてみました。私の、アルゼンチン・タンゴとの出会いは1955年ですので、60年～半世紀以上になります。O. T. V. を除いて、リアル・タイムで聴いてきたことになります。

全国リレー随想（16）

～タンゴ・ラジオ今昔～

佐藤勝夫（秋田市）

■ 懐かしい思い出

先日、地域のある会合で久しぶりに里帰りをしたというM君にめぐり逢った。中学生の頃は毎日のように野山に出かけては魚捕りや虫取り、野鳥を捕るなどで遊んだ気心の知れた間柄である。

高校は別々に進み、古里を離れていたが家庭の都合で最近地元に帰ったとのこと。話が進んでいくうちに彼から意外な言葉が飛び出たのである。「オメェのエ（家）サ行って、タンゴを聴いたなぁ～」と懐かしそうに大昔の出来事を昨日のように話したのである。私は些か呆気にとられ彼の顔を覗き直した。ふと、自分が忘れていた遥か昔、半世紀前のタンゴとの原点？を突かれて二度驚いたのである。そういえばあの頃は古ぼけたラジオにやっと買ってもらった小型のレコード・プレイヤーをコード線で繋ぎ、初めて買ったEP盤（ドーナツ盤）から流れるJ・ダリエンソ楽団のラ・クンパルシータやティタ・メレージョの歌声に度肝を抜かれた懐かしい思い出が甦ったのである。空白の時間をお互い語り合ったひと時であった。

■ ラジオを聴き始めた頃・・・NHKタンゴ放送は・・

高校生となりフランシスコ・カナロ楽団が来日した1961年（昭和36年）12月の新宿コマ劇場ライブが２度テレビ放映された。白黒のテレビに目を皿のようにして見入ったのは云うまでもない。借りてきたSONYのテープレコーダーを使って録音したものが手元にある。またその頃NHKや民放ラジオで始まったタンゴやラテン音楽のラジオ放送が各局であり、多くのリスナーにとってラテン音楽との出会いの入り口でもあった番組でした。「ポルテニア音楽の時間」を高山正彦先生。「ラテン音楽」を高橋忠雄先生。独特な語り口のホルヘ・的場先生、民放では深夜の「これがタンゴだ！」の中島栄司先生と、先達の解説と音源は貴重なもので聴き逃せない放送でした。また、FM放送が始まった60年代にスタートしたポルテニア音楽同好会の会長である大岩祥浩先生の「ラテンのひととき」は74年からワールド・ポップス・セレクションと90年代まで続き、2001年４月からは「タンゴ深夜便」として音源を提供してリスナーを楽しませてくれ、2008年３月まで83回続いて終わった。

1981年からNHK・FMで中南米＆カリブの音楽を竹村淳先生が受け持ち、タンゴも少なからず放送され、2005年３月まで24年間続いた。中止の際はNHKに全国のリスナーから継続や代替え番組の意見書が出されたが、番組編成については検討するとの答えだけで、その後は「なしのつぶて」である。NHKに対してはポピュラー音楽の中核を成すラテン音楽を若者たちにその存在を知らしめることが放送事業の大きな役わりであるはずである。アカデミーの総意として番組の復活を強く望みたいところでもある。退職後、カセット・ケースに眠っていたこれらの音源を発掘しながらもう一度聴き直し

ている。気に入った特集番組などはCD制作して仲間と共有している。（下図参照）

最近になって関西の大阪タンゴ愛好団体「BODEGUERO」のインターネット・ホームページで「これがタンゴだ」のオープニング部分が発信されているのを発見した。「エル・ジョロン」の曲に乗せて、この頃来日したバンドネオン奏者ホルヘ・カルダーラのレシタード（語り）は当時の懐かしい思い出でもある。

■インターネット時代のラジオ放送は・・脳を活性化する

高齢化社会となり、マスメディアは連日のように介護や認知症など様々な老後の諸問題を取り上げています。行く末を案ずることで憂鬱になりがちですが、中には90歳以上でもまったくボケない人もおります。この違いはどこから来るのでしょう。誰もが健康体で過ごしたいはずですね。ボケることは遺伝や環境、生活習慣など要因はさまざまですが、予防の一つとして何か集中出来る趣味を持てば健康体を保持できると言われます。

私たちが愛好している音楽趣味は脳を刺激しストレスも解消されて活性化するといいます。また趣味をみつけることによって交友関係も広がり積極的に老後ライフを楽しみ充実した時間を過ごせると思います。特に音楽はポジティブな感情を喚起する効果があるといいますからご安心ください。

ボケ防止にとパソコンを使い始めたのは定年退職後ですが、未だに初心者で進歩がありません。情報化時代の変化に追いついて行けないもどかしさと加齢による理解度が年々衰えるのを必死で防御？している有様です。特にここ数年の通信革命は日を追うごとに進化しております。

そこで、パソコンをまだ使用していない方に先ずはインターネットでラジオを聴くことをお勧めします。私の仲間たちも「パソコンは今更必要ない！」「使い方が解らない！」「費用もバカにならない」等々理由を付けては話に乗ってきませんが、近頃は公共施設や図書館でも長時間利用することも可能となり解らないことは指導も受けることができます。一度出向いて触って、あえてチャレンジしてみてはどうでしょう。薦めるのは最近のラジオは国内、海外ともに音楽情報が豊富だからです。

（１）日本国内（沖縄から北海道まで）のAM/FMの地上波ラジオ局が聴けるサービスが開始されました。「radiko.jp（ラジコドットジェイピー）」、いままで都市部の放送地域内でも電波が悪くてラジオが聞こえない。聞こえるけれど雑音などのノイズが多くてよく聞き取れない・・・。そんな悩みに対応したのがこのサービスです。2014年４月から「radiko.jpプレミアム（エリアフリー聴取）」、日本国内であれば全国のどこからでもラジオ放送を聴取できます。（＊月額378円有料サービスです）。現在およそ80％が可能ですが地域によってはまだ登録加入されてないところもありますがいずれ配信が始まるでしょう。またスマートフォンでFM局が楽しめるアプリも無料で使うことができます。（au

やドコモFM対応）また、Listenradio.jpでも同様、多彩な音楽情報を無料で楽しめます。

（2）SIMULRADIO（CSRA） サイマルラジオ　無料配信です。

サイマルラジオとは、コミュニティ放送局が放送と同時にストリーミングでインターネットに番組を配信することを表わした言葉です。CRSAには、現在100局以上のコミュニティ放送局が参加しております。こちらもパソコンで簡単に局の選定ができ、クリアな音で聴くことができます。

当会員によるタンゴ放送（TANGUEANDO EN JAPÓN No. 34で紹介済）はこちらのシステムで聴くことができます。

・丹羽　宏氏・・・三重県四日市：FMポートウエーブ局

“ブエノス・ディアス、タンゴでおはよう”

毎週月曜日～金曜日まで朝6時30分から20分

ヨーヨッパ・タンゴから今に活きるタンゴ、古典と多彩なプログラム。日曜日まとめて再放送があります。

・上村　要氏・・・函館：FMいるか局・・・SPアワー

＊まだ登録配信はされていませんが以下のタンゴ番組があります。

・佐々木かはん氏・・秋田椿台FM局　“こまちタンゴ”

秋田市内のミニ・コミュニティ局から毎月１時間の放送は、近年発売されたアルバムから話題のタンゴ、古典曲等の解説入りで12曲を紹介する。「こまちタンゴ」は2015年4月で100回の放送を達成しました。これからも継続していきたいと張り切っている。

・岡田　寛氏・・・香川県高松：西日本放送（RNC）「タンゴ・アルバム」

西日本放送が開局した昭和28年10月の翌月の11月からこの番組が始まったとのこと。以来今日まで休まずに「タンゴファンの皆さん！こんばんは！岡田寛です」と毎週タンゴ放送をずーっと継いでいる驚きの長寿番組である。半世紀以上のキャリアを誇る驚異の岡田寛さんはRNCきっての名パーソナリティーである。地元高松でポルテニア音楽研究会の会長も務め活躍している。

またホームページの「タンゴアルバム」では放送で取り上げた内容を詳しく解説している。

（下は放送音源を元に制作したCDのケース画像です）

＊NHKのFM音楽とAM語学講座もストリーミング放送を通じていつでも何度でも復習出来気軽に聴けるようになりました。FM音楽は情報も豊富にあり音質は雑音も無くクリアでとても便利で感動ものです。

＊サイマルラジオには現在100局以上のコミュニティ放送局が参加しております。例として北海道から沖縄までローカルな番組が聞けるのも楽しいです。地方放送にはユニークな番組が多くあります。

ただ、インターネット・ラジオは通信サービスの一つなので、人気番組や災害時などリスナーが急激に増えるとつながらなくる可能性もあります。

（3）海外のインターネットタンゴ・ラジオ局でブエノスアイレス旅行気分？・YouTubeの特選映像

地球の反対側にあるアルゼンチンの電波タンゴ情報も年々情報が多くなっている。アルゼンチンタンゴの代表的ホームページであるTodotango.comは年々リニューアルしタンゴ・ガイドから年表、ディスコグラフィー、歌詞、楽譜、ガルデル特集、写真や音源も半端ではない。内容も充実しており、まさにタンゴ・ファンにとって検索のすべてを網羅している博物館的存在でもある。中でも日替わりメニューのタンゴ20曲、La Selección de Hoyは初めて聴く楽団や歌手等は日本国内では紹介されないアーティストもおり未知の世界へと誘ってくれる。

・アルゼンチンのタンゴラジオ局の紹介

・Fm tango Argentino //タンゴ専門のラジオ放送局・・・24時間ラジオ、タンゴを聴きながら他のページを見ることも可能です。

・buenosaires.gob.ar/la ２x ４ //ブエノスアイレスの市役所が保有するタンゴ専門局24時間放送無料聴取が可能です。

中南米各国のラジオ局ほとんどがSIMULRADIOからも受信可能となりました。南米の多彩な音楽が簡単に試聴出来る時代に変化しております。他にもタンゴネットラジオをご存知の方がいらっしゃいましたら、ぜひ教えてください。いろいろなラジオとの出会いを心待ちにしています。

（4）YouTube投稿動画について

2005年の立ち上げ以来、YouTubeのオリジナルな動画には世界中の人々が繋がり、情報を交換し革命的なネット社会を構成している。タンゴの世界にも多様な動画が配信されており、こんな映像があったのかと驚くばかりである。貴重な動画も数多いが私が気にいっている数点を紹介したい。

① Encuentro en el Estudio（エンクエントロ・エネル・エストゥディオ）ゲストを招き収録された長時間（50分ほど）動画はどれもが映像も音声も良く貴重なものばかりである。
最近亡くなったLeopoldo FedericoやRubén Juárezの独奏は懐かしく拝見している。
以下Susana Rinaldi、Amelita Baltar、Adriana Varela、Rodolfo Mederos, またアルゼンチン・フォルクローレ界のSusana Baca、Jaime Torres、Teresa Parodiらも登場する。

② オルケスタ・ティピカ東京と坂本政一のオルケスタが1960年代訪亜したときのカラー・フィルム映像が最近投稿された。藤沢嵐子、阿保郁夫の若い頃の歴史的熱唱が登場する。

③ アニバル・トロイロのオルケスタ・ティピカのカラー・フィルム動画
Ésta es mi Argentina。1974年の映画に挿入されたカラー映像で晩年のA. トロイロが「バンドネオンの嘆き」を熱演している。

L・フェデリコ

阿保郁夫

■ おわりに・・付録の人生を豊かに過ごすために・・

タンゴという音楽との出会いが今、私たちの人生を前向きに生きる活力を与えている。楽しい日々を今後有意義に過ごす計画を立ててみたいものです。それには体の健康と脳の健康をどう維持できるかどうかで、人生の幸せも大きく違ってきます。普段よく聴く音楽は脳が心地よいと感じる状態になっていると専門家は言います。最近になって健康長寿に関する本を数冊読みました。

104歳を超え尚、現役で医師！を続けている日野原重明先生の「人生百年、私の工夫」の著書によると「60歳から長く、豊かな人生の午後の時間が始まる」、「ライフワークを持つことが長生きの秘訣」「ストレスを楽しみ、活かすことで脳も若返る」・・との日野原流名言の数々は生きることの意味を教えています。日本人の平均寿命は80歳をはるかに超えて長生きになりましたが、長寿だけでは意味はありません。心身の健康を保つことこそが、いちばんの理想的な生き方ではないでしょうか?

タンゴ・アカデミーに入会以来、機関誌TANGUEANDO EN JAPÓNに寄せられた数多くの研究論文や資料、解説等は日々の鑑賞になくてはならない教材でありお宝倉庫であります。沢山タンゴの楽しみ方を教えていただきました。これからも人生の伴侶として机上に鎮座まし活用続けたいと思います。

タンゴ関連のネット・サーフインをしていると様々な人達との出会いが増えてきました。これから残された時間をホーム・ページの開設に向けて諸準備を整えてみたいこのごろです。

次はいわき市の佐々木秋雄さんにバトンを渡します。よろしくお願いします。

ラファエル・カナロのディスコグラフィ（Tangolandia 2015年春号「ラファエル・カナロ」の稿で掲載予告したもの）

（http://www.bibletango.comに掲載のデータを基に復刻LP、CDのデータを含めて作成者の方で再構築したもので、完全ではない）

作成：齋藤　冨士郎

	録音年	レーベル	録音国	レコード番号	マトリス番号	曲名	種類	歌手	復刻CD/LP	備考
1	1926	Regal	Espagne	RS 1228	K 1557	Caminito	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro		
2	1928	Homokord	Allemagne	4-3103	TC 936-1-D	El carrerito	tango			
3	1928	Homokord	Allemagne	4-3104	TC 938	Lamento criollo	tango			
4	1928	Homokord	Allemagne	4-3104		Señor comisario	tango	Rafael Canaro		
5	1928	Homokord	Allemagne	4-3103	TC 935 D	Vieja milonga	tango			
6	1929	Regal	Espagne	RS 1187	K 1552	Carmen	tango	Carlos Dante		
7	1929	Regal	Espagne	RS 1228		Castillo de naipes	tango	Carlos Dante		
8	1929	Regal	Espagne	RS1187	K 1555	El carrerito	tango	Carlos Dante		(+)
9	1929	Odeon	France			Éso es bailar	tango			(**)
10	1929	Regal	Espagne	RS 1188	K 1559	Haragán	tango	Carlos Dante	(a)	
11	1929	Odeon	France			La melenita	tango			(**)
12	1929	Regal	Espagne	RS 1314		Las vueltas de la vida	tango	Rafael Canaro	(a)(b) (c)	
13	1929	Regal	Espagne	RS 1227		Llevátelo todo	tango	Carlos Dante	(b) (c)	
14	1929	Odeon	France			Mama ya encontré un novio	tango	José Carreras		
15	1929	Regal	Espagne	RS 1188	K 1548-1	Mama yo quiero un novio	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro		
16	1929	Regal	Espagne	RS 1229		Noviecita mía	tango	Carlos Dante	(b)	
17	1929	Regal	Espagne	DK 8145		Pero yo sé	tango	Carlos Dante	(b)	
18	1929	Columbia	France	DF 123	K 1562	Ya no cantas Chingolo (Chingolito)	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro		(+)
19	1929	Regal	Espagne	RS 1186	K 1562 （？）	Ya no cantas Chingolo (Chingolito)	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro		(+)
20	1929	Regal	Espagne	RS 1314		Beso su mano, Madame (Beso vuestra mano Madame)	tango	Carlos Dante	(b) (c)	(+++) (#)
21	1929	Columbia	France	DF 123	K 1555	El carrerito	tango	Carlos Dante	(c)	(+) (#)
22	1930	Columbia	France	RS 1229	K 1561	Alma en pena	tango	Carlos Dante	(a)	
23	1930	Columbia	France	DF 170	L2205-1	A Montmartre	tango	Carlos Dante		
24	1930	Regal	Espagne	RS 1477		Aquel tapado de armiño	tango	Carlos Dante		
25	1930	Columbia	France	RS 1228	K 1557	Caminito	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro	(a)	
26	1930	Regal	Espagne	DK 8098		Cariñito	tango	Carlos Dante		
27	1930	Regal	Espagne	DK 8146		El último golpe	tango	Carlos Dante		
28	1930	Regal	Espagne	DK 8145	L 2207	Entre sueños	tango	carlos Dante	(a)	
29	1930	Regal	Espagne	DK 8098	L 2210	Estampilla (Pot de colle)	tango	Carlos Dante		
30	1930	Regal	Espagne	RS 1328	K 1604	Garufa	tango	Carlos Dante	(a)	

31	1930	Regal	Espagne	RS 1186	K 1562	Juanita	vals	Carlos Dante		
32	1930	Regal	Espagne	RS 1477		La muchacha del circo	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro		
33	1930	Regal	Espagne	DK 8100	L 2225 (L 2215)	La pulpera de Santa Lucía	vals	Carlos Dante	(a)	
34	1930	Regal	Espagne	DK 8115	L 2206	Los amigos te engrupieron	tango	Carlos Dante		
35	1930	Regal	Espagne	RS 1379	K 1587	Malevaje	tango	Carlos Dante	(a)	
36	1930	Regal	Espagne	DK 8107	L 2218	Manguero	tango	Carlos Dante		
37	1930	Regal	Espagne	DK 8100	L 2117	Margaritas	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro	(b)	
38	1930	Regal	Espagne	DK 8107	L 2221	Mi secreto	tango	Carlos Dante		
39	1930	Regal	Espagne	RS 1328	K 1602	Oración	tango	Carlos Dante		
40	1930	Regal	Espagne	RS 1319		Rosas de abril	vals	Carlos Dante / Rafael Canaro		
41	1930	Regal	Espagne	RS 1429		Sos bueno, vos también	tango	Carlos Dante	(b)	
42	1930	Regal	Espagne	RS 1399	K 1585	T.B.C. (Te besé)	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro		
43	1930	Regal	Espagne	RS 1429	K 1586	Tortura (Torture)	tango	Carlos Dante	(a)	
44	1930	Columbia	France	RS 1227	K 1551	Zaraza	tango	Carlos Dante / Rafael Canaro	(a)	(++)
45	1930	Regal	Espagne	RS 1229	K 1561	Alma en pena	tango	Carlos Dante	(a)	(+++)
46	1930	Regal	Espagne	DK 8115	L 2205-	A Montmartre	tango	Carlos Dante	(b)	(+++)
47	1930	Columbia	France	DF 2665	CL 7130	Por vos… yo me rompo todo (Pour vous, michina)	tango	Rafael Canaro	(c)	(#)
48	1932	Columbia	France	DF 170	L 2210	Estampilla	tango	Carlos Dante	(a)	
49	1932	Regal	Espagne	DK 8146	L 2216	Victoria ! (Victoire !)	tango	Carlos Dante	(a)	
50	1934	Regal	Espagne	DK 9089	WK 3460	Lo que dure mi vida	tango	Mario Beltrán		
51	1934	Regal	Espagne	DK 9089	WK 3459	Naipe marcado	tango	Mario Beltrán	(a)	
52	1935	Columbia	France	DF 1885	CL 5579	Alma del bandoneón	tango	Mario Beltrán	(a)	(+++)
53	1935	Columbia	France	DF 1909	CL 5577	Il est certaines amours	tango	Roger Toussaint	(b)	(+++)
54	1936	Columbia	France	DF 1885	CL 5580	El que a hierro mata	tango	Mario Canaro	(b)	
55	1936	Columbia	France	DF 1910 (1916?)	CL 5645	Campañas del recuerdo	tango	Ricardo Duarte	(a)	
56	1936	Columbia	France	DF 2258	CL 6450	Cómo te quiero	tango	Luis Scalón		
57	1936	Columbia	France	DF 1910		Engañame no más	tango	Ricardo Duarte	(b)	
58	1936	Columbia	France	DF 2354	CL 6500-1	Envidia	tango	Luis Scalón	(b)	
59	1936	Columbia	France	DF 1945	CL 5647	La melodía de nuestro adiós (La melodía de nuestro amor) (La melodie de notre adieu)	tango	Roger Toussaint	(a)	
60	1936	Columbia	France	DF 1910		Quand tu partiras				
61	1936	Columbia	France	DF 2258	CL 6451	Qué le importa al mundo	tango	Luis Scalón		
62	1936	Columbia	France	DF 1909	CL 5578	Une dernière fois	tango	Roger Toussaint	(b)	

63	1936	Columbia	France	DF 2354	CL 6501-1	Viejo gaucho (Quiero verte una vez más)	tango	Luis Scalón	(a)	
64	1936	Columbia	France	DF 1909	CL 5577	Volvé mimosa (Il est certaines amours)	tango	Roger Toussand		(****)
65	1936	Columbia	France	DF 2259	CL 6453	Yo también soñé	tango	Luis Scalón	(c)	
66	1937	Columbia	France	DF 2325	CL 6498-1	Aunque no lo crean	tango	Luis Scalón		
67	1937	Columbia	France	DF 2325	CL 6499	Casas viejas	tango	Luis Scalón	(c)	
68	1937	Columbia	France	DF 2025	CL 5876	Je ne sais (Yo no sé por qué te quiero)	tango	Raoul Sanders	(c)	
69	1937	Columbia	France	DF 2025	CL 5878	La muchachada del centro	tango	Raoul Sanders	(a) (c)	
70	1937	Columbia	France	DF 2038	CL 5875	Mais… si tu pars	tango	Raoul Sanders	(b)	
71	1937	Columbia	France	CF 2038	CL 5877	Rien que nous deux	tango	Raoul Sanders	(a) (c)	
72	1937	Columbia	France	DF 2025	CL 5876	Yo no sé por qué te quiero	tango	Raoul Sanders	(d)	
73	1938	Columbia	France	DF 2452	CL 6755-1	Cuando el corazón	tango	Luis Scalón	(c) (e)	
74	1938	Columbia	France	DF 2452	CL 6757-1	Hay que aclarar	tango	Luis Scalón		
75	1938	Columbia	France	DF 2463	CL 6756-1	Paciencia	tango	Luis Scalón	(b) (c)(d)	
76	1938	Columbia	France	DF 2463	CL 6758-1	Pura milonga			(c)	
77	1938	Columbia	France	DF 2259	CL 6452	Resentimiento	tango	Luis Scalón	(b)	(+++)
78	1939	Columbia	France	DF 2665	CL 7131	Callaecita de mi novia	tango	Luis Mariano	(d)	
79	1939	Columbia	France	DF 2532	CL 6851	Desaliento	tango	Alberto Tagle		
80	1939	Columbia	France	DF 2583	CL 6918-2	Desconfíale	tango	Aldo Campoamor	(b)	
81	1939	Columbia	France	DF 2557	CL 6919	Desencanto	tango	Alberto Tagle	(b) (c)	
82	1939	Columbia	France	DF 2557	CL 6917	Desengaño	tango	Alberto Tagle		
83	1939	Columbia	France	DF 2522	CL 6849-1	Falsedad	tango	Alberto Tagle		
84	1939	Columbia	France	DF 2680	CL 7129	Ilusión	tango			
85	1939	Columbia	France	DF 2680	CL 7132	Olvidame	tango	Luis Mariano		
86	1939	Columbia	France	DF 2532	CL 6850	Vieja amiga	tango	Aldo Campoamor	(b) (c)	
87	1939	Columbia	France	DF 2522	CL 6848-1	Viejos tiempos	tango	Aldo Campoamor		
88	1945	Odeon	Espagne	204101-A	SO 9737	Co, co, ro, co	marchinha	Luis Scalón		
89	1945	Odeon	Espagne	204.101-B	SO 9738	Garúa (Crachin)	tango	Jorge Cardozo	(a)	
90	1945	Odeon	Espagne	204.149.B	SO 9874	El tortazo	milonga	Jorge Cardozo	(a)	(+++)
91	1946	Odeon	Espagne	204111-b	SO 9739	Distancias	tango	Alina Bermejo		
92	1946	Odeon	Espagne	201111-A	SO 9736	El desafío	milonga	Jorge Cardozo	(c)	
93	1946	Regal	Espagne	204149-A	SO 9875	La ribera	tango	Jorge Cardozo		
94	1948	Odeon	Espagne	204240-B	SO 10119	Cuidado con el triburón	guaracha	Alina Bermejo / Héctor Pontón		
95	1948	Odeon	Espagne	204240-A	SO 10132	Lágrimas de cocodrilo	vals criollo	Alina Bermejo / Héctor Pontón		

96	1929/1930	Regal	Espagne	RS 1399	K 1588	De a traición	tango	Carlos Dante		(b)
97		Homocord	Allemagne	4.310	Tc 913	Alhaja falsa	tango	Rafael Canaro ?		
98		Odeon	France			A media luz	tango	Luis Toussin		(*1)
99		Odeon	France			Ciertos amores	tango	Roger Toussand		(*2)
100			France			El cieguito de Montmartre	tango	Francisco Along		(*3)
101		Homocord	Allemagne	4.310	Tc 917	Fierro chifle	tango	Rafael Canaro ?		
102		Columbia	France	DF 32	K 1587	Malevaje	tango	Carlos Dante		
103		Odeon	France			Recuerdos de la pampa	tango	Ernesto Famá		(***)
104		Odeon	France			Si la ves dale recuerdos	tango	Felix Gutiérrez		(**)
105			France			Sueño de muñeca	tango	Alejandro Fernández		
106		Odeon	Espagne	204165-A	SO 9884	Vals del amor	tango	Jorge Cardozo		

（A）このディスコグラフィ作成に当り、利用したウェブサイト http://www.bibletango.comに記載されている原注
（*1）これをRafael Canaroに帰属することは確実に誤っている。実際にはこのバージョンはステレオで早くて１９５５年である。しかしRafael Canaroの最後の録音は１９４８年、スペインにおいてである。更に演奏のスタイルはRafael Canaroに全く対応しない。更に歌手の名前、Luis Toussin、は全く知られていない。ここに掲げたのは一応の参考のためである。
（*2）これをRafael Canaroに帰属することは恐らく誤りである。これはタンゴIl est certaines amoursの近似翻訳である。Roger Toussandという歌手名はRoger Toussaintに対応する。これはよくあるようにレコードの盤面の誤りによるのであろう。
（*3）参照は恐らく誤りであろう。
（**）参照は確認されていない。
（***）参照は疑わしい、確認されていない。
（****）歌手のRoger Toussand、の名前は確かにRoger Toussaintに対応する。これはよくあるようにレコードの盤面の誤りによるのであろう。Volvé Mimosaの曲名はディスコグラフィの誤りであろう。多くの人々は曲名として、Il est certaine amours、と言っている。

（B）作成者注
(+) オリジナル盤か再編集盤
(++) データはA.M.P. CD-1176による。RSの記号はスペインRegalのもの。
(+++) 録音年はA.M.P. CD-1176, CD-1267による。
(#) 録音年はCTA-1004による。
(a) A.M.P. CD-1176, (b) A.M.P. CD-1267、(c) A.V.ALMA　CTA-1004、(d)　I.L.D,　IL 642167、(e) ,I.L.D.. IL 642190
(b) 曲名は恐らくDe la traiciónの誤りと思われるが、利用したhttp://www.bibletango.comのデータや復刻CD　CTA-951にもDe a traiciónとあることからレーベル面にはそのように印刷されていると考え、そのまま記載した。またCTA-951には1929年録音となっている。

ラ・フアン・ダリエンソ

来日記念盤CDとコンサート・レポート

鈴木茂次（埼玉県日高市）

私がこの楽団を知ったのは2014年の日本アルゼンチン協会主催「アルゼンチンタンゴを楽しむ会」において飯塚会長が「“なんたってダリエンソ”の風が吹く」という表現でこのダリエンソ・スタイルの楽団来日の話をされたことによっており、リーダーがフアン・ダリエンソ楽団後期の第一バンドネオン奏者でアレンジャーのカルロス・ラサリの孫とのことで少し興味をそそられました。

私の知るところでは、ダリエンソ・スタイルの楽団といえば2009年に亡くなる直前までタンゲリア「ラ・ベンターナ」に出演していたカルロス・ラサリが率いる「オルケスタ・フアン・ダリエンソ」または「ロス・ソリスタ・デ・ダリエンソ」とラサリのかつての同輩でタンゲリア「セニョール・タンゴ」に長期に出演していたエルネスト・フランコの楽団、それと「ロス・レジェス・デル・タンゴ」である。私見だが「ロス・レジェス・デル・タンゴ」はメンバーがダリエンソ楽団の有力メンバーではなかったためかティピカ編成で活動していてもなにか正統的な後継楽団と思えなかった。ところがティピカ編成のこの新しい楽団はリーダーがダリエンソ最後期25年間を支えたカルロス・ラサリの孫で、フアン・ダリエンソの名を堂々と冠していることでもあり、期待が持てるのではないかと思った。しかしその楽団の情報が何もないので、そのツールとしてインターネットのYouTubeを検索すると、すぐに10件ほど動画がアップされている事が分かった。

インターネット動画からの印象

当然音質はあまり良くないが、演奏スタイルやその雰囲気を知るには充分である。編成はバンドネオン３、バイオリン４、コントラバスとピアノで９人のティピカ編成でありダリエンソ・サウンドを聴かせる要件を満たしている。バンドネオン陣の中央で長髪を振り乱して弾いているのがリーダーのファクンド・ラサリとすぐに分かった。演奏スタイルはダリエンソ・スタイルと云うよりもラサリ・スタイルの印象であった。映像で見る限りではメンバー全員が若手なので、元気の良い演奏だが、やや荒い感じがしていた。歌手は男性歌手だったが、楽団メンバーに比べるとぐっと年長のベテラン歌手の感じであった（それが同行来日したフェルナンド・ロダスであり、タンゲリア「ラ・ベンターナ」でカルロス・ラサリと共演していた歌手だったと後で知った～ DVDあり）。このネット動画から知り得たのは、発足が2012年であり既に２年以上活動している事で、画面から伝わる雰囲気から、かなり人気があるのではないかと思われた。

来日記念盤CDを聴く

「LA JUAN D'ARIENZO Cortando Clavos」（電撃のリズム／ラ・フアン・ダリエンソ）MUSAS-7001

（曲目）

01 これが王様だÉSTE ES EL REY、02 フェリシアFELICIA、

03 もう一度あなたに会いたい QUIERO VERTE UNA VEZ MÁS、04 心の底からDESDE EL ALMA、05 レメンブランサ（追想） REMEMBRANZA、06 最後の盃　LA ÚLTIMA COPA、07 エル・タマンゴ　EL TAMANGO、08 ガジョ・シエゴ　GALLO CIEGO、09 忍耐（パシエンシア）　PACIENCIA、10 カンソネータ　CANZONETA、11 ラ・プニャラーダ　LA PUÑALADA、12 ラ・クンパルシータ　LA CUMPARSITA、13 永遠の桜　SAKURA ETERNA

リーダーのファクンド・ラサリは1987年生れ、2006年に祖父カルロス・ラサリにバンドネオンを師事し、２年後に「フアン・ダリエンソ楽団」でプロデビューを果たした。2012年から「ラ・フアン・ダリエンソ」の活動を積極的に行い、2014年にはヨーロッパツアーを行っている。

このアルバムの収録曲数は13曲である、第１曲目がこの楽団のテーマ曲とも云うべき「エステ・エス・エル・レイ（これが王様だ）」で始まり、終わりの12曲目で「ラ・クンパルシータ」、そして最後はリーダーのファクンド・ラサリがこのツアー主催者の民音に敬意を表して作曲した「永遠の桜」となっていて、その曲順は日本公演に類似の配置である。まず01「これが王様だ Éste es el Rey」はダリエンソ賛歌の一つで、作曲者のマヌエル・カバジェロはカルロス・ラサリの別名という人もいる。ダリエンソ楽団が1971年に録音している曲だ、その印象の第一がテンポである。私は演奏スタイルの決め手の一つがそのテンポだと思うのだが、ネット動画で見たより明らかにテンポが遅くて落ち着いた感じの演奏である。音質抜きにしてもライブでノリノリの演奏とスタジオ録音とでは比較出来ないかもしれないが、かなり落ち着いていてアンサンブルも良好な演奏だと感じた。このアルバム全体についても同様の印象である。02以下も全てダリエンソ・スタイルである。02はダリエンソの名演の一つで知られる「フェリシア Felicia」であるが、重厚さには欠けるがダリエンソの名を冠した楽団に相応しい演奏である。03は歌の曲でダリエンソ楽団が1964年にホルヘ・バルデスの歌で録音している「今ひとたびの Quiero verte una vez más」である。F. ロダスがベテランらしく上手く歌いこなしていると思った。以下歌の曲は05「レメンブランサ Remembranza」、06「最後の盃La última copa」（C・ラサリの「ダリエンソ楽団」ではワルテル・グティエレスの歌）、09ダリエンソ作曲、A・エチャグエの歌で知られた「パシエンシア Paciencia」、10は多くの歌手が歌い、ダリエンソ楽団ではA・ラボルデが録音した「カンソネータ Canzoneta」を同じくF. ロダスが歌っている。全体の印象は力強い歌い方だがCDの方が声は高く感じられた。これは音の良さからくる印象かと思えた。04はダリエンソ楽団1935年ビクター初録音の曲「心の底から Desde el alma」、あとに続くインスト曲は07「エル・タマンゴ El Tamango」、08「ガジョ・シエゴ Gallo ciego」、11「ラ・プニャラーダ La puñalada」、12「ラ・クンパルシータ La cumparsita」で07以外はダリエンソが何回も録音している聴きなれた曲である。

＜ドラマチック・タンゴ2015＞　LA JUAN D'ARIENZO・電撃のリズム　コンサート

中野サンプラザホール　２月27日（金）14：00

オープニングはまず映像により、19世紀ヨーロッパからの大量移民の様子や、やがて世界の食料供給地として重要な国となるアルゼンチン発展の歴史、またその玄関口ともいえるブエノスアイレスの港町で移民たちの一夜の享楽と郷愁から生まれてきたタンゴが、やがて市民権を得てゆくことが紹介された。冒頭での映像による説明はあまりタンゴになじみのない人に対して親切で良いやり方であると思う。

（プログラム表紙）

プログラム

（第１部）
01 これが王様だ Éste es el rey（楽団）
02 フェリシア Felicia（楽団）
03 ロカ Loca（ダンサー）
04 パシエンシア（忍耐）Paciencia（歌手）
05 ラ・プニャラーダ La puñalada（ダンサー 3組）
06 ドン・アルフレド Don Alfredo（楽団）
07 ７月９日 9 de julio（ダンサー）
08 ラウソン Rawson（楽団）
09 オルガ Olga（ダンサー）
10 ラ・タブラーダ La Tablada（ダンサー２組）
11 エル・インテルナード El internado（楽団）
12 アンダーテ・ポル・ディオス Andate, por Dios（歌手）
13 最後の盃 La última copa（歌手）
14 ガジョ・シエゴ Gallo Ciego（ダンサー 3組）
（第２部）
01 オテル・ビクトリア Hotel Victoria（楽団）
02 心の底から Desde el alma（楽団）
03 台風 El huracán（ダンサー２組）
04 エストレージャ（星）Estrella（歌手）
05 レメンブランサ（追想）Remembranza（歌手）
06 ネグラーチャ Negracha（ダンサー２組）
07 エル・タマンゴ（古靴）El tamango（楽団）
08 デレーチョ・ビエホ Derecho Viejo（楽団）
09 インスピラシオン（霊感）Inspiración（ダンサー）
10 パタ・アンチャ Pata ancha（ダンサー）
11 スム Zum（ダンサー）
12 今ひとたびの Quiero verte una vez más（歌手）
13 カンソネータ Canzoneta（歌手）
14 パリのカナロ Canaro en París（ダンサー 3組）
アンコール曲：永遠の桜 Sakura eternal
＆ラ・クンパルシータ La cumparsita

第１曲目はCDと同じくこの楽団のテーマ曲？「これが王様だ Éste es el rey」で始まった。演奏もさることながら目についたのは赤いシャツのユニホームである。これはネットの映像で見ていて知っていたが、今度は靴も全員が赤にしていた。なにか“ほほう”といった感じで、見た目も重視なのだなと思い、またこの“赤”は“電撃のリズム”を称する楽団のカラーにふさわしいかもしれないと感じた。さて肝心の演奏のほうはホールの音響が良いせいか結構迫力のあるダリエンソ・サウンドが響いてきた。アンサンブルもかなり良くて、これは楽しめるぞと期待をもって聴き始めた。続けて２曲目はダリエンソの名演が残る「フェリシア Felicia」、その後が「ロカ Loca」（ダンス）で、このシリーズのダンス・リーダーとして毎年来日しているガスパル＆カルラのダンスが入った。これも耳馴染んだ曲であるが、少し違和感をもって聴いたのがバイオリンのパートである。それはメロディを少し崩しているのだが、私たちはダリエンソの定番曲でバイオリンのオブリガードなどが固定化インプットされているので、これが耳に引っかかってきて気に入らないところであった。そしてその後も数曲で同様であった。この楽団のあり方からも当時のアレンジのまま演奏してほしいと思う。４曲目で歌手のフェルナンド・ロダスが登場した。曲はA. エチャグエの歌で聴き馴染んだ「パシエンシア Paciencia」で、その歌い方は熱唱型で声量もありベテランらしい歌いっぷりであった。そして何故か声の印象が今度はCDで聴いたよりも低い声に感じたのである。次の「ラ・プニャラーダ La punãlada」（ダンス）は賑やかにダンサー３組の踊りが入った。その後「ドン・アルフレドDon Alfredo」、「７月９日 9 de julio」（ダンス）、「ラウソン Rawson」、「オルガ Olga」（ダンス）、「ラ・タブラーダ La Tablada」（ダンス）と続いたところで再びF. ロダスの歌で曲は「アンダーテ・ポル・ディオス Andate, por Dios」と「最後の盃 La última copa」。前者は

1957年にホルヘ・バルデスがダリエンソ楽団で歌い、F. カナロ作曲の後者は多くの歌手が歌っているが、さほど見劣り（聴き劣り？）しない歌いっぷりと思った。この歌手の癖なのか、歌い終わりによく両手を広げるので、最後までハンドマイクが声を拾わない場面があり少々気になった。第１部の終わりは最近のダンサーたちが好む「ガジョ・シエゴ Gallo Ciego」（ダンス）（～プグリエーセ・スタイルであるが）で、３組のダンサーが競って踊り、舞台を盛り上げた。

第２部はプログラムの構成を面白く感じた。１曲目と２曲目の「オテル・ビクトリア Hotel Victoria」と「心の底から Desde el alma」はダリエンソ楽団1935年ビクター録音レコードの一枚目のカップリング曲であることなど徹頭徹尾ダリエンソかと思っていたら、後半になんとプグリエーセの「ネグラーチャ Negracha」や「パタ・アンチャ Pata ancha」とピアソラの「スム Zum」が並んでいるので、どんな演奏を聴かしてくれるのかと興味を持った。

第２部は上記のインスト２曲「オテル・ビクトリア Hotel Victoria」「心の底から Desde el alma」の楽団演奏で始まった。次の「台風 El huracán」（ダンス）では２組のダンサーが躍った後、続いてF. ロダスが1961 ～ 62年にダリエンソがホルヘ・バルデスの歌で録音している「エストレージャ Estrella」と「レメンブランサ Remembranza」を歌った。ここで気付いたのはやはりダリエンソ楽団のいわゆるラサリ時代？からの選曲が多いなと思った。よって次の「ネグラーチャ Negracha」（ダンス）はもしかしてダリエンソ・スタイルに編曲か！と思ったがやはりプグリエーセ・スタイルのままであった。次に楽団演奏２曲はグアルディア・ビエハの「エル・タマンゴ El tamango」と「デレーチョ・ビエホ Derecho viejo」であったが納得のいくダリエンソ・スタイルであった。ここで再び映像で昨年のタンゴダンス世界選手権大会の模様と、このツアーに参加出演のマヌエラ＆フアンが優勝した様子を映した。ここはショーとしてダンサー主体（各ダンサー好みの曲と演奏楽団？）のコーナーになっていると思えた。さてこのコーナーの始めの曲は「インスピラシオン Inspiración」でダンサーはヨーロッパ風な衣装で踊った。次が「パタ・アンチャ Pata ancha」だが、それはやはりプグリエーセ・スタイルの演奏であり、続く「スム」も同様であった。先の「ネグラーチャ」を含めてこれは私の推測ながらコンサートはタンゴ・ショーでもあるので、見せるところを受け持つダンサーの意見や得意芸も入れてバラエティに富んだ演出をしたのではないかと思った。その後歌に戻り、F. ロダスが「今ひとたびの Quiero verte una vez más」と「カンソネータ Canzoneta」を歌った。彼の歌はダリエンソ楽団のホルヘ・バルデス、ラサリの「ダリエンソ楽団」のワルテル・グティエレスにはやや及ばない感があるが、充分歌い込んでこなれていると思った。最後の曲は「パリのカナロ Canaro en París」（ダンス）で、最後に相応しい盛り上がる演奏を展開し、ダンサー３組全員が舞台一杯を使って踊り、華やかなエンディングへと向い、お馴染みのバンドネオン・バリアシオンで演奏を終えた。

ところで今回は献呈曲がプログラムにないと思っていたら、ここで花束贈呈があり、その後に「永遠の桜 Sakura eterna」と「ラ・クンパルシータ La Cumparsita」を続けて演奏し、全員が出場してフィナーレとなった。

ここでこのコンサートを総評的に言えば「若いメンバーで元気の良い演奏ながら大方の曲で手慣れた演奏を展開し、ダリエンソ・スタイルをある程度堪能させてくれた。結果思っていたよりも楽しめるものであった」と記してこの稿を終えることとします。

東京・春・音楽祭

チコス・デ・パンパ

～昼下がりのアルゼンチン・タンゴ～

脇田　冨水彦

2015年３月21日（土）14：30、東京上野の東京文化会館小ホールに於いて東京・春・音楽祭の一環としてチコス・デ・パンパの演奏会が開催された。

小ホールと云えども650人以上の観客を収容できる会場だ。その大きな会場を満席にするほどの盛況ぶりを見せた。出演のチコス・デ・パンパは日本のダリエンソと云われる西塔祐三さんが主宰するオルケスタ・ティピカ・パンパ、チコス・デ・パンパ、エストレージャス・デ・パンパ、というパンパ・ファミリーの１グループである。

パンパの定例コンサートでは“チコス”はクアルテートであるが、これはカルロス・ラサリのLos Solistas de D'Arienzoの四重奏団をイメージして編成していたのだろう。ところがこの日の“チコス”は六重奏編成でbn：北村聡、vn：永野亜希、pf：宮沢由美、cb：佐藤洋嗣、の他に２人加わりbn：鈴木崇朗、vn：吉田篤貴のメンバーだった。それに、ダンスのマルティン＆ユカのコンビが加わり豪華さを増した。

楽団編成を小編成コンフントと標準編成のオルケスタ・ティピカに分けるとすれば、六重奏はオルケスタ・ティピカの最小編成だと私は勝手に考えている。同種楽器のアンサンブル、特にバンドネオン群の一糸乱れぬバリアシオン等は聴いていて大変心地良く醍醐味でもある。今回の“チコス”は本家の“ティピカ・パンパ”（12～13人編成）に一目を置きながらも見事なパフォーマンスを見せた。初代バンドネオン奏者川波幸恵の後を北村聡が担当しているが、最近ますます頭角を現してきた鈴木崇朗とは息が合い安心して聴けた。

一方、バイオリンはベテランの永野亜希と、吉田篤貴だが永野亜希のソロは、あのカジェタノ・プグリッシも真っ青になるほどの音色と奏法である。ちょっと誉めすぎか・・・？

ダリエンソの豪快なリズムを生み出すのはベテランピアニストの宮沢由美とベースの佐藤洋嗣であり、宮沢のソロは、華麗なフルビオ・サラマンカを彷彿させる、これもまた誉めすぎか・・・？　ただ惜しまれるのはピアノの高音部の音量が大きすぎ全体のバランスを崩してしまったことだ。これは彼女の奏法に依るものではなく会場のPA（Public Address）さんの技術とセンスに依るものであって残念であった。

こだわるようだが大編成のティピカ・パンパよりも六重奏のチコスの方が小回りも利き、今後、ちょっとしたライブやミロンガパーティ等催しものには引っ張り凧になること請け合いだ。今後が楽しみである。

2015年上期首都圏タンゴ・コンサート情報

作成：脇田　冨水彦

●アルゼンチン・タンゴコンサート

チコス・デ・パンパ

北村聡（bn）、永野亜希（vn）、宮沢由美（pf）、佐藤洋嗣（cb）、菅原洋一（vo）、山口蘭子（vo）、兵頭カンナ（vo）

1月15日　よみうり大手町ホール

●KOJI HIRATA Premium Tango Concert

平田耕治（bn）、須藤信一郎（pf）、田中伸司（cb）、吉田篤（vn）、那須亜紀子（vn）

1月16日　杉並公会堂小ホール

●タンゴシンガー KaZZma リサイタル

小松亮太（bn）、KaZZma（vo）、熊田洋（pf）、田中伸司（cb）、レオナルド・ブラーボ（gt）

1月29日　江古田「BUDDY」バディ

●古橋ユキ魅惑のタンゴバイオリン

古橋ユキ　タンゴ五重奏団

古橋ユキ（vn）、鈴木真紀子（fl）、金益研二（pf）、鈴木崇朗（bn）、高杉健人（cb）

2月3日　銀座十字屋ホール

●ラ・フアン・ダリエンソ

LA JUAN D'ARIENZO

ファクンド・ラサリ（bn）、リカルド・バダラッコ（bn）、アドルフォ・トレピアナ（bn）、パブロ・ヒンスブルグ（vn）、オクタビオ・ビアンチ（vn）、セバスティアン・フラッソン（vn）、エミリオ・ロンゴ（cb）、パブリ・バジェ（pf）、フェルナンド・ロダス（vo）、ダンサー：カルラ＆ガスパル、マヌエラ＆フアン、サブリナ＆ホセ

2月3日　川崎市教育文化会館、2月4日　市原市市民会館、2月6日　サンシティ越谷市民ホール、2月17日　神奈川県民ホール、2月27日、28日　中野サンプラザホール

●TANGO JACK

早川純（bn）、吉田篤（vn）、三枝伸太郎（pf）、田中康介（gt）、西嶋徹（cb）、

2月25日　神楽坂THE GLEE

●LOS REFLEJOS DEL ALMA VOL.10

Sayaca（vo）、青木菜穂子（pf）、北村聡（bn）、田中伸司（cb）、鬼怒無月（gt）

2月26日　神楽坂THE GLEE

●楽屋で奏でるキサスタンゴLive vol.19

キサスタンゴ

池田達則（bn）、瀬尾鮎子（vn）、深町優衣（pf）、大熊慧（cb）

3月15日　楽屋

●今宵はタンゴで

チェ・タンゴ

丸野綾子（pf）、小谷野誠司（bn）、澤崎洋子（vn）、足立忠男（vn）

3月4日　船橋ゴリ

●東京・春・音楽祭

昼下がりのアルゼンチン・タンゴ～哀愁漂うタンゴの名曲を集めて～
チコス・デ・パンパ
宮沢由美（pf）、佐藤洋嗣（cb）、北村聡（bn）、鈴木崇朗（bn）、永野亜希（vn）、吉田篤貴（vn）、ダンサー：マルティン＆ユカ
3月21日　東京文化会館小ホール

●LA MILONGA

チコス・デ・パンパ
ダンサー：エンリケ＆カロリーナ、萩野華一＆五十嵐純子、ケンジ＆リリアナ、チヅコ＆マキシミリアーノ、ヒロシ＆キョウコ、マルティン＆ユカ、ユージン＆アリサ、亮＆篠月
3月29日　有明TFT東京ファッションクラブ

●Pacific Tango Sexteto

Antonio Yoo（vn）-韓国、会田桃子（vn）、Koh Sangji（bn）-韓国、川波幸恵（bn）、青木菜穂子（pf）、田中伸司（cb）
3月31日　神楽坂The Glee

●古橋ユキタンゴ四重奏団　タンゴバイオリンの魅力

古橋ユキ（vn）、鈴木崇朗（bn）、深町優衣（pf）、高杉健人（cb）
4月18日　アート・カフェ・フレンズ

●GW Special Live 古橋ユキ　魅力のタンゴバイオリン

古橋ユキ（vn）、金益研二（pf）、鈴木崇朗（bn）、高杉健人（cb）、ゲスト：畠山文男（vo）
5月4日　ケネディハウス銀座

●春の芸術祭2015

オルケスタYOKOHAMA
齋藤一臣（vn）、専光秀紀（vn）、石川麻衣子（vn）、池田達則（bn）、古野奈巳（bn/fl）、齋藤晶（pf）、斉藤直樹（cb）、飯泉昌宏（gt）、高橋マサヒロ（ｹｰﾅ/ｻﾝﾎﾟｰﾆｬ）、グロリア米山（vo）、南川紘子（vo）、藤田翔（vo）、ダンサー：トシユキ＆マイコ、Araki&Mayumi、叶千穂
5月5日　横浜市開港記念館

●東京タンゴ祭　2015

オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ
濱川千紘（vn）、加藤里奈（vn）、寺内美紀（bn）、鈴木晴賀（bn）、大塚聡太（gt）、神戸頌子（pf）、松山光樹（pf）、手塚沙也佳（cb）、嵯峨山琴音（cb）
慶應義塾大学KBRタンゴアンサンブル
柏原誠（vo）、福本孝（bn）、池田達則（bn）、石井清敏（vn）、鈴木慶子（vn）、大石豊（pf）、田中彰（cb）
ロス・ポジートス with タンゴ並木
神谷太郎（bn）、萩原育夫（bn）、岡田尚子（bn）、横山哲也（vn）、大西里香（vn）、赤石尚美（vn）、村田竜一（vn）、鎌田剛（cb）、尾崎順子（pf）、大森一樹（gt）
チコス・デ・パンパ
北村聡（bn）、鈴木崇朗（bn）、永野亜希（vn）、吉田篤貴（vn）、宮沢由美（pf）、佐藤洋嗣（cb）
イエロータンゴカルテット
仁詩（bn）、鈴木広志（sax）、田中庸介（gt）、木村仁哉（tub）
小松真知子とタンゴクリスタル
小松真知子（pf）、北村聡（bn）、鈴木崇朗（bn）、齋藤寛子（vn）、宮本建政（vn）、田辺和弘（cb）、小島りち子（vo）

オルケスタ・アウロラ
青木菜穂子（pf)、会田桃子（vn)、吉田篤貴（vn)、北村聡（bn)、鈴木崇朗（bn)、東谷健司（cb)、ダンサー：ヒロシ＆キョウコ
京谷弘司クアルテート・タンゴ
京谷弘司（bn)、淡路七穂子（pf)、会田桃子（vn)、田辺和弘（cb）
5月9日　浅草公会堂

●Tango Jack 揺れ蕩グルーブ、突き抜ける音の閃光

西嶋徹（cb)、吉田篤（vn)、早川純（bn)、田中庸介（gt)、三枝伸太郎（pf）
5月20日　JZ Brat（渋谷）

●Virtus Tango live

仁詩（bn)、水村浩司（vn)、高杉健人（cb)、須藤信一郎（pf）
5月25日　C-LAPS 六本木クラップス

●Tango Origin 2015 vol.02

アンドレス・リネツキータンゴ楽団
アンドレス・リネツキー（pf)、ウンベルト・リドルフィ（vn)、パブロ・ハウレーナ（bn)、会田桃子（vn)、鈴木崇朗（bn)、東谷健司（cb)、特別ゲスト：川井郁子（vn)、石垣征山（尺八)、セシリア・カサード（vo)、ダンサー：ロベルト・エレーラ＆ラウラ・レガスクエ、アルバロ＆スリエタ、シモン＆マリル、クリスティアン＆ナオ
6月6日　ヤクルトホール

●KOJI HIRATA Premium Tango Concert

平田耕治（bn)、金益研二（pf)、那須亜紀子（vn)、藁科基輝（cb）
6月25日　めぐろパーシモンホール　小ホール

（編集部注：「エル・チョクロ」でのライブコンサートは非常に件数が多いので、ここでの掲載は見送りました。）

原稿募集

タンゴに関する随想・研究・資料・書評・コンサート評など、会員からの寄稿をお待ちしております。ご執筆の内容によって「タンゲアンド･エン･ハポン」または「タンゴランディア」のどちらかに掲載いたします。「タンゲアンド･エン･ハポン」の次号の締め切りは11月末日、「タンゴランディア」は９月15日となります。なお、原稿（図・画像を含む）は可能な限り電子化して電子メールの添付ファイルまたは外部メモリーの形で送ってください。やむを得ず手書き原稿になる場合は、編集部で電子化する作業が必要ですので、早めに送っていただくことをお願いします。また、原稿の内容によっては掲載できないことがあることをご承知置き下さい。

本誌に掲載の見解その他は、あくまでも執筆者個人のものであり、必ずしも日本タンゴ･アカデミーを代表するものではありません。なお人名のカナ表記については執筆者の表記のままを原則としますが、Juanを「ファン」と表記されたものについては、表記の流儀の問題ではないと考え、編集部の方で「フアン」と修正いたします。

編集後記

タンゲアンド・エン・ハポン第36号をお届けします。諸般の事情で今号も頁数は100頁余りとなりました。この方向は今後も継続すると考えられます。その中で誌面の質を維持することに編集部全員を挙げて取り組んでおります。現在の悩みは執筆者が固定する傾向にあることで、それは機関誌が本来狙いとするところではありません。編集部としては全国の広い層からの投稿を待ち望んでおります。ご遠慮なくご投稿ください。

（齋藤　冨士郎）

日本タンゴ･アカデミー主機関誌　TANGUEANDO EN JAPÓN

第３６号　２０１５年７月発行（非売品）

発　行：日本タンゴ･アカデミー
〒156-0044　東京都世田谷区赤堤2-32-14-104
飯塚　久夫方
TEL/FAX　03-3324-1989　　iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編集部：齋藤　冨士郎（編集長）
〒195-0072　東京都町田市金井6-17-2
TEL/FAX　042-736-7445　　f-saito@mqj.biglobe.ne.jp
大澤　寛、弓田　綾子、宮本　政樹、島﨑長次郎
池永　博威、笠井　正史、鈴木　啓子

印　刷：（株）藤印刷　〒102-0072　東京都千代田区飯田橋2-13-1
TEL 03-3262-8641　FAX 03-3262-8643　E-mail: fujip@fuji-p.co.jp

ทิค